

324
402



始



324
402

脇谷 撫謙 述

諸經論大意

二樂莊出版部

324-402



諸經論大意

大正
3. 7. 14
内交

諸經論大意

目次

叙述の方針

- 一 華嚴經 一
 - (イ)華嚴經の傳譯1(ロ)華嚴經の梗概(ハ)華嚴經と淨土教8
 - (ニ)華嚴經の疏10(ホ)高祖の御引用11
- 二 十住毘婆娑論 二十
 - (イ)華嚴經の十地品と十住毘婆娑論80(ロ)十住毘婆娑論の内容12(ハ)高祖の御引用24(ニ)龍樹菩薩と華嚴經(龍宮及南天鐵塔)29
- 三 十地經論 三十二
 - (イ)十住毘婆娑論と十地論22(ロ)十地論と淨土論24
- 四 首楞嚴經 三十七
 - (イ)傳譯沿革57(ロ)一經の梗概57(ハ)首楞嚴三昧58(ニ)高祖の御引用57(ホ)楞嚴經の疏58
- 五 圓覺經 四十六
 - (イ)傳譯及び梗概56(ロ)圓覺經の疏57(ハ)首楞嚴經と圓覺經48
- 六 首楞嚴三昧經 五十
- 七 楞伽經 五十三
 - (イ)傳譯の沿革50(ロ)慧師の御引用51
 - (イ)傳譯の沿革54(ロ)一經の大意55(ハ)楞伽經の疏57(ニ)高祖の御引用58(ホ)口傳鈔の御引用61
- 八 大乘起信論 六十三
 - (イ)傳譯の沿革55(ロ)馬鳴菩薩の傳57(ハ)一論の梗概58(ニ)起信論と淨土教58(ホ)起信論の疏60
- 九 般舟三昧經 七十二
 - (イ)傳譯及び梗概57(ロ)善導大師の御引用57(ハ)口傳鈔の御引用
- 十 大集經 七十六
 - (イ)其の編製56(ロ)六十卷の梗概57(ハ)十輪經その他59(ニ)五個の五百年90(ホ)四種法度生53(ハ)説聽の方軌55(ト)未有一人得者57(チ)高祖の御引用99
- 十一 悲華經 百六
 - (イ)傳譯及び梗概109(ロ)高祖の御引用107
- 十二 大般若經 百九
 - (イ)傳譯及び梗概108(ロ)第壹會111(中略)(ハ)第十六會120(ソ)諸譯般若經112
- 十三 大智度論 百二十八
 - (イ)其の傳譯55(ロ)其の大意55(ハ)智度論と天台宗55

(二)智度論と淨土教135(ホ)十六正士148

十四 灌頂經

百五十一

(イ)傳譯及び内容151(ロ)十方隨願往生經152(ハ)高祖の引用154

十五 藥師如來本願經

百五十五

(イ)傳譯及び内容156(ハ)十二の大願157(ニ)高祖の御引用162

十六 不空絹索神變真言經

百六十二

(イ)傳譯及び内容163(ロ)高祖の御引用164

十七 法華經

百六十九

(イ)傳譯沿革169(ロ)諸本の異同172(ハ)一經の梗概175(ニ)諸師の法華經疏177(ホ)高祖と法華經182

十八 法華論

百八十六

(イ)傳譯及び内容186(ロ)所謂十如是186(ハ)法華論と諸師論釋189

十九 涅槃經

百九十一

(イ)傳譯及び部類191(ロ)一經の要領192(ハ)涅槃の四德194(ニ)高祖の御引用203(ホ)觀經と涅槃經204(ハ)涅槃經の論釋206

二十 本行集經其の他

二百七
以上

諸經論大意

輔教協谷 搦謙

叙述の方針

諸經論大意といふは、恰も大藏經大意といふと同じことで、大藏經といふ中には經、律、論、釋總じて一千九百十六部、八千五百三十四卷(縮刷大藏經による)ある。かゝる多數の經論釋を、其の一に就いて大意を陳べんこと、敢て不可能ではないけれど、短日月に限られたる紙數を以ては、成し遂げることが難かしい、それで今は吾祖師聖人が本典に御引用になりたる諸經論を、五時(華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃)の順序によりて逐次に其の大意を陳ぶることとし、乃ち先づ華嚴經から始むることとする。

一 華嚴經

(イ) 華嚴經の傳譯

祖師聖人が本典に引用になりてある華嚴經に、六十華嚴、八十華嚴の二本
諸經論大意

あるが、尙ほ此の外に四十華嚴といふものもある。六十と云ひ八十と云ひ四十と云ふのは其の卷數を言ひ表はしたもので、かく卷數に相違を生じたのは、翻譯者が異なりて居るからである。尤も四十華嚴だけは全部の華嚴經を翻譯したものでなく、最後の入法界品のみを別譯して「大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品」略して「普賢行願品 Chapter on the practice and prayer of the Bodhisattva Samantabhadra」云ひ、それが四十卷あるところから四十華嚴と呼ぶ様になりたのである。六十と八十の二本は共に全部の華嚴經で、具には「大方廣佛華嚴經 Mehavajrapūya-buddhavatamsaka-sūtra」云々ののである。今三本傳譯の沿革を略して表示すれば次の如くである。

六十華嚴—東晋の義熙十四年—佛陀跋駄羅 Buddhahadria (覺賢) 三藏譯

八十華嚴—大唐の證聖元年—實叉難陀 Śikshananda (喜學) 三藏譯

四十華嚴—大唐の貞元十二年—般若 Pragna 三藏譯

以上三本の中で、六十華嚴と八十華嚴とは、其の卷數に二十卷の相違だある

如く、内容も亦六十華嚴の方は七處八會三十四品であるが、八十華嚴は七處九會三十九品になりて居る、會數に一會の相違の出來たのは、八十華嚴の方で第七會の初にあるところの十定品と云ふ一品が、六十華嚴には全く缺けて居るので、説法の會所が分らない爲めに第六會に合せられてしまつたのである。又品數に五品の相違のあるのは、六十華嚴の方に缺けてないのもあれば、單に具略開合の相違から來たのもあるが、煩はしいで其の事は略しやう。

それから四十華嚴は、前にも云ふ如く入法界品の一品ではあるが、既に前二本と並び稱せらるゝほどで、非常に大切なことが、前二本の上に加はりてある。特にそれが吾々淨土門の行者に取りて大切であるのである。といふのは、六十華嚴及び八十華嚴では、祖師聖人が信卷に御引用になりた第一文の

聞此法歡喜 信心無疑者

速成無上道 與諸如來等

といふ偈文が最終になりて居るのであるが、四十華嚴では其の次に普賢菩薩

の十大願(禮敬諸佛、稱讚如來、廣修供養、懺悔業障、隨喜功德、諸轉法輪、請佛住世、常隨佛學、恒順衆生、普皆回向)を説きたる一卷の經文が加はりてある。而して此の十八願は、阿彌陀佛の極樂世界に往生する因行である。説かれてあるのである。即ち彼の偈に曰く

三世諸佛所稱歎
如是最勝諸大願

我今回向諸善根
爲得普賢殊勝行

願我臨欲命終時
盡除一切諸障礙

面見彼佛阿彌陀
即得往生安樂刹

我既往生彼國已
現前成就此大願

一切圓滿盡無餘
利樂一切衆生界

「かくの如く最勝の諸大願(十八願のこゝ)は、三世諸佛の稱歎したまうところなり、我今諸の善根を回向して、普賢殊勝の行を得んごす、願くば我れ命ち終らんご欲する時に臨みて、盡く一切諸の障礙を除き、面のあたりに彼の佛阿彌陀

陀を見たてまつり、即ち安樂刹に往生するごを得ん。我れ既に彼國に往生し已りて、現前に此の大願を成就し、一切圓滿して盡く餘す無く、一切衆生界を利樂せん」といふのである。華嚴經の究竟は最後の入法界品の一品にある、入法界ごは法界に證入する—佛果を證るごである、入法界の因は普賢の十大願である、而して此の十大願は阿彌陀佛の極樂世界に往生する業因なりごある。されば入法界ごは西方淨土に往生するごでありた、即ち華嚴經は往生淨土を教へた御經でありた。吾等は華嚴經を以て他山の石ご見るごは出來なくなりたのである。

以上三本の外に、華嚴經中の諸品を別譯して、色々な經題を付したものが澤山あるが、あまり煩はしいで一挙ぐるごは略して置く。中に就いて十地品を別行せる十地經は、よほご早くから世に行はれて居りたものご見へて、龍樹菩薩の十住毘婆娑論、世親(天親)菩薩の十地論の如きは、此の十地經を釋したるものであるから、特に記憶して置く必要がある。

(口) 華嚴經の梗概

華嚴經には廣く五十二位の相が説かれてある、それを諸會諸品に就いて仔細に分別するならば、色々説明を要するところがあり、一概に言へないところが多いけれど、今八十華嚴の九會の説によりて、其大體を配當すれば、凡そ次の如くである。

九會								
第一會	第二會	第三會	第四會	第五會	第六會	第七會	第八會	第九會
六	六	六	四	三	一	一	一	一
品	品	品	品	品	品	品	品	品
佛	信	住	行	回	十	等	妙	重
果	住	住	行	向	地	覺	覺	説
一	一	一	一	一	一	一	一	一
三十九品								

第一會に於て先づ佛果の妙相を説き、而して後ち廣く五十二位の相を説く、此所に華嚴の特色があるのである。即ち華嚴では因果不二、一即一切と談じて、

五十二位の修行といふも、因より果に至るの相ではなくて、全く果中の因相であるを説く。それ故に先づ第一會に佛果の妙相を説破し、而して後果海の妙波瀾として廣く五十二位の相を説いたのである。最後第九會の一品は即ち入法界品で、此の第一會には善財童子が五十五の善知識を歴訪して道を求むる云ふ譚を以て、重ねて五十二位の相を説いたのである。五十五の善知識の中には色々な人がある、最初が文殊菩薩で、第二十八が觀世音菩薩、第五十二が彌勒菩薩、第五十四が再び文殊菩薩で、第五十五即ち最後が普賢菩薩である。前に四十華嚴の事を陳べたところにある彼の十大願が、普賢菩薩の授けた法門で、此の十大願の力に依りて極樂世界に往生すれば「即ち阿彌陀佛、文殊師利菩薩、普賢菩薩、觀自在菩薩、彌勒菩薩等を見たてまつる」と説いてある。されば善財童子を導きたる諸の善知識は、阿彌陀佛の極樂世界より應現せられし方々でありたのである。既に五十二位の法門を説ける五十五の善知識が極樂界中より出現せられた方々であるから、即ち廣く五十二位の相を説ける華嚴經は、是れ全く彌陀の

誓願一佛乘を開説したるものが出来るのである。

(八) 華嚴經と淨土經

既に華嚴經の終歸たる入法界品には、普賢菩薩の十大願を以て、阿彌陀佛の安樂世界に往生することを説かれてあるのであるから、全く淨土門の御經云ふべきである。それ故に獨り入法界品のみならず、其他の諸品にも處々に阿彌陀佛のことが説かれてある。中に就いて六十華嚴卷二十九壽命品(八十華嚴卷四十五)に「佛子よ、此の娑婆世界の釋迦牟尼佛刹の一切の如き、安樂世界の阿彌陀佛刹に於て一日一夜を爲す」等と説かれてある。之れに就いて支那華嚴宗の第二祖至相大師(智儼)は、其の著孔目章卷四に「壽命品内明往生義」といふ一章を設けて、廣く往生淨土の事を明し、阿彌陀佛の安樂世界が、即ち華嚴經に説くところの蓮華藏莊嚴世界であるとして、天親菩薩の淨土論に於ける五因五果の文を引き、入第三門の得入蓮華藏世界を以て、其の證據とせられてある。又前に擧げてある普賢行願品の「即得往生安樂刹」の文に就いて、同じく支那華嚴

宗の第四祖清涼大師(澄觀)第五祖圭峰禪師(宗密)は、其の著普賢行願品疏鈔の今の偈文を釋するところに於いて、華嚴の蓮華藏世界が、即ち阿彌陀佛の安樂世界であるから、普賢の十八願を以て安樂世界に往生することを得るのであると釋してある。

又之れを淨土門の方から觀るに、淨土の根本聖典たる大無量壽經には、其の序分に「普賢菩薩、妙德(文殊のここ)菩薩、慈氏(彌勒のここ)菩薩等」と説き、「皆遵普賢大士之德」と説き、「得佛華嚴三昧、宣暢演説一切經典」と説いてある。華嚴經で上首であつた普賢菩薩は、今大無量壽經でも亦上首であり、華嚴經で普賢菩薩は華嚴三昧に入りて説法した(離世間品)、今も亦賢護等の諸大菩薩は、皆普賢菩薩の德に遵ひ、華嚴三昧を得て一切經典を演説すがある。華嚴經と大無量壽經、其の關係や決してたゞここではない。抑々阿彌陀如來の第十二願に言く「超出常倫諸地之行現前修習普賢之德」と、蓋し普賢菩薩は正しく之の彌陀の第二十二願力より出現せられし大士である。それ故に先づ華嚴

に於て安樂世界に往生を願はれた。然るに他の諸菩薩は機縁未だ熟せざりしか、華嚴會上では未だ往生を願はれなかつたが、今此の大無量壽經の會座に於ては、皆普賢大士の徳に遵ふて、彌陀の本願に乗ずる機類となりた。何ぞたゞここにましまさん、善巧の施設、誠に難有く味はねばならぬことである。されば華嚴經は流れて大無量壽經に入りて究竟し、大無量壽經は華嚴經を序分として正説せられたものご伺はれるのである。

(二) 華嚴經の疏

六十、八十、四十の三本の華嚴經を、各々其の全部を通じて註釋したるもの、今に存するものは、僅に次の數部である。

- 華嚴經搜玄記九卷——唐至相大師智儼著
- 華嚴經探玄記二十卷——唐賢首大師法藏著
- 華嚴經刊定記十五卷——唐靜法寺慧苑著
- 華嚴經合論百二十卷——唐居士李通玄著

華嚴經大疏鈔百卷——唐清涼大師澄觀著

華嚴經綱要八十卷——明慈山大師德海著

普賢行願品疏十卷——唐清涼大師澄觀著

普賢行願品疏鈔六卷——唐圭峰禪師宗密鈔

以上の中で搜玄記及び探玄記は六十華嚴を釋したもので、他は皆八十華嚴を釋したるもの、普賢行願品の疏及び疏鈔は四十華嚴を釋したものである。此の外に一經の大綱を明したるものや、諸品を別釋したるものは尙ほ多少あるが、煩しいて今は略して置く。中に就いて前にも擧げた十地品を釋したる龍樹菩薩の十住毘婆論や、天親菩薩の十地論は何れ後日紹介するここがあらう。

(ホ) 高祖の御引用

次に御本典のごういふ所に華嚴經を御引用になりてあるかごいふに、それは行卷に一文、信卷に三文、化土卷に三文御引用になりてあるのである。行卷の一文ごいふは一乘海釋の下(四十五紙の左)で、次の様な文である。

華嚴經言

文殊法常爾 法王唯一法

一切無礙人 一道出生死

一切諸佛身 唯是一法身

一心一智惠 力無界亦然

これは六十華嚴卷五菩薩明難品(卅藏七の三十三紙左)の偈文である。明難品といふは問答品といふと同じこと、明は答へ難は問ひである、文殊菩薩が賢首菩薩に對して、佛子よ、一切諸佛は唯一乘を以て生死を出づることを得たりといふに、今其の諸佛國土を見れば世界、衆生、說法、壽命、光明、神力など皆それ〴〵不同であるのは何故ぞやと問ふた。その時賢首菩薩が偈文を以て文殊菩薩に答へた、これは其の最初の二偈である。(四句を以て一偈とする)「文殊よ、法は常に爾り、法王は唯一法なり、一切礙人は、一道をもて生死を出でたまへり。一切佛身は、唯是れ一法身なり、一心一智惠なり、力無畏も亦然り」といふのである。祖師聖人は一乘海即ち誓願一佛乘を助顯せらるゝ爲めであるから、

以上の二偈だけを御引用になりたのであるが、華嚴經の上では是れから後の偈文が肝要で、即ち文殊菩薩が諸佛國土の各別なる所以を問難せるに對しては「衆生の業行異なるがゆへに、所見各々不同なり」として諸佛國土の各別なるにあらず、衆生の見かたに相異があるのだと答へてある。御引用の二偈の中で、初の一偈は因の一乘を明し、後の一偈は果の一乘を明されたものご伺はれる。本願の一因によりて、成佛の一果を得る、是れが即ち誓願一佛乘であるといふことを華嚴經の偈文を以て立證せられたものである。

次に信卷の三文といふは俱に信樂釋の下(本の二十三紙左以下)で、其の第一文は

華嚴經言

聞此注歡喜 信心無疑者

速成無上道 與諸如來等

これは六十華嚴卷六十八法界品最終の一偈で「此の法を聞きて歡喜し、信心無疑の者は、速に無上道を成じ、諸の如來と等し」といふのである。即ち華嚴

經を聞いて信心歡喜し疑ひなければ、速疾に諸佛と等しき無上道を證ることが出来るので、正に此華嚴經を信ぜよと最後に結勸せられたものである。今願力回向の信心を獲得する者は、現生に即得往生住不退轉の益を得、當來には速に大涅槃を證ることを得、此の義を立證せられんが爲に、信樂釋の下に彼の華嚴經の文を御引用になりたのである。

其の第二文は

又言

如來能永斷一切衆生疑

隨其心所樂 普皆令滿足

これは八十華嚴卷六十入法界品卷一(卅藏七の八終り)の終りの一偈で「如來は能く一切衆生の疑を永斷し、其の心の所樂に隨つて、普く皆満足せしむ」といふのである。信樂は是れ明に佛智を信じて疑はざる心であるが、此の無疑の信樂たるや、彌陀の願力を以て吾等の疑惑を斷破したまひしものである。此の旨を立證せられんが爲に、今の華嚴經の一偈を御引用になりたものと伺はれる。

其の第三文は、中に略せられたところもあるが、それでも前後二十三偈半ほどの長ひ文が御引用になりてある。今爰には其の初の一偈だけを擧ぐることにしやう。

又言

信爲道元功德母 長養一切諸善法

斷除疑網出愛流 開示涅槃無上道

(下略)

これは八十華嚴卷十四賢首品卷一(卅藏七の六一六十七紙右)の偈文である。此の賢首品も亦文殊菩薩と賢首菩薩の問答を以て成り立ちて居る。今の偈文は賢首菩薩が信心の徳を陳べられたもので「信を道の元、功德の母と爲す、一切諸の善法を長養し、疑網を斷除して、愛流を出で、涅槃無上道を開示す」といふのである。祖師の御引用は此の偈文から始まりて居るが、華嚴經の上では此の前にも長い偈文があり、祖師の御引用になりてあるより後にも、まだく長く續いた偈文がありて、前後三百有餘の長頌である。此の賢首品にかくの如く信心の

徳の廣大なることを説くは抑々所以あることで、華嚴經には前にも云ふ通り廣く五十二位の相を説かれてあるが、其の最初の十信の處で究竟成佛する、所謂信滿成佛といふところが、華嚴獨特の主張である。其の信滿成佛のこゝを説けるが即ち此の賢首品であるから、信徳の廣大なることを示すに三百有餘頌を以てしても、尙ほ且つ足りない有様であるのである。祖師聖人が信樂釋の下に、信徳讚嘆の此の賢首品の偈文を長く御引用になりたるこゝ、亦誠に有難い思召で、涅槃眞因唯以信心、聞信一念の端的に、究竟成佛の業事全く成辨するのであるから、華嚴の信滿成佛といふこゝ、其の趣を同じうして、其所にたゞこゝならざる味ひがある。それ故に彼の偈文をば、あの様に長々ご御引用になりたるものであらうご伺はれるのである。

次に化土卷の三文といふは、眞門釋の下(本の二十九紙左以下)に二文と、大尾の處に一文御引用になりてあるのである。眞門釋の下の二文の中、其の第一文は

華嚴經言

汝念善知識

生我如父母

養我如也母

增長菩提分

如醫療衆疾

如天灑甘露

如日示正道

如月轉淨輪

これは八十華嚴卷七十七入法界品卷十八(正藏七の九一三三七七十四紙左)の文で、善財童子の五十五の善知識の中、第十三の善知識たる彌勒菩薩が、善財童子に告げし偈文である。に就いて增長菩提分とあるのが、華嚴經の文では増我菩提分となりてある。汝善知識を念ぜよ、我を生ずる父母の如し、我を養ふ乳母の如し、我が菩提分を増す。醫の衆疾を療するが如し、天の甘露を灑くが如し、日の正道を示すが如し、月の淨輪を轉ずるが如し」といふので善財童子が諸の善知識に就いて法を求めたるを讚嘆し、告ぐるに善知識の恩徳の甚深なるを以てしたものである。

其の第二文は

又言

如來大慈悲

出現於世間

普爲諸群生

轉無上法輪

如來無數劫

勤苦爲衆生

云何諸世間

能報大師恩

これは八十華嚴卷六十八法界品卷一(卅藏七の八終り)の終りの偈文の中の二偈(信卷に御引用の第二文の偈頌と一蓮の偈で、總じて十一偈ある中、信卷の方は最後の二偈、今のは初めの方の二偈である)で「如來大慈悲をもて、世間に出現し、諸の衆生の爲に、無上の法輪を轉じたまう。如來無數劫に、勤苦したまふことは衆生の爲めなり、云何ぞ諸の世間、能く大師の恩を報ぜん」といふのである。

以上の二文は、化土卷の眞門釋即ち第二十卷を釋せらるゝについて、阿彌陀經の難信之法の意によりて、行者を勸誡したまうところに御引用になりたのである。

二文俱に善知識に遇ふことの難きを立證する爲めの御引用で、第一文は善知識の徳を明し、第二文は善知識(特に釋尊)の恩の深重なることを明されたものである。

其の第三文は、化土卷の最後に御引用になりてある。

華嚴經偈云

若有見菩薩

修行種々行

起善不善心

菩薩皆攝取

これは八十華嚴卷七十五入法界品卷十六(卅藏七の九—三百六十三紙左)の偈文である、善財童子の五十五の善知識の中、第四十一の善知識たる佛妃釋迦瞿波女が、善財童子に告げしころの偈文で「若し菩薩の種々の行を修行するを見て、善不善の心を起すこと有りとも、菩薩は皆攝取したまはん」といふのである、祖師聖人六軸の本典を御製作あらせられ、最後に述懐してのたまはく「慶ばしき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如來の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ、慶喜彌々至り、至孝彌々重し、茲れに因りて

眞宗の詮を鈔し、淨土の要を撫ふ、唯佛恩の深きことを念ふて、人倫の嘲りを耻ぢず、若し斯の書を見聞せん者、信順を因ご爲し、疑謗を縁ご爲して、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯さん」と、御引用の華嚴經の偈文は、此の意を證誠せられん爲めでありて、看よ華嚴經には、菩薩の修行を見て善心を起す者、不善心を起す者あらんに、菩薩は此の善惡の兩人を同じく攝取したまうごあるではないか、今製作を了りし教行信證文類六卷、之れを見て信順の心を起す者もあらん、之を聞いて疑謗を逞しくする者もあらん、哀れ信順は誠に是れ往生淨土の正因なり、「如來の矜哀」豈に亦疑謗の者をも捨てたまはんや、されば「信順」は正因なり、「疑謗」も亦是れ勝縁なり、末代の道俗、仰ひて信敬すべしご仰せられたものである。

一一 十住毗婆沙論

(イ) 華嚴經の十地品と十住毘婆沙論

十住毗婆沙論 Dasa bhūmi-vibhāṣā-sāstra は、眞宗七祖の第一龍樹菩薩 Bodhisattva

Nāgārjunaの所造で、支那姚秦の朝に龜茲國の三藏鳩摩羅什 Kumārajīvaが翻譯した全部十七卷三十五品あり、七祖聖教の第一易行品は、其の第九品目で、第五卷に出て居る。

此の十住毗婆沙論は、華嚴經の十地品を釋したもので、賢首の探玄記卷一(五十九紙右)に云ふところに依れば、十地品の註釋者に前後四人ある、一に龍樹菩薩の十住毘婆沙論、二に世親(天親)菩薩の十地論、三に金剛軍菩薩の作、四に堅慧菩薩の作であるが、三、四の二書は傳らない。

華嚴經の諸品の中には、別に一卷の經となりて世に行れたものが色々あるが此の十地品も亦十地經若しくは十住經、其外色々な名前の下に、よほご古くから華嚴經と分れて別に世に行れたものである、則ち龍樹の十住毘婆沙論も、世親の十地論、も共に別行の十地經を釋したものである。それ故に賢首の探玄記卷九(七紙左)には、世親の十地論の事を述べて「論主別に此の品の釋を爲す、一部別に行はる」と云ひ、淨影寺慧遠の十地論義記卷一本(二十一紙及び二十五

紙)には、十地の一品、龍樹別傳す云ふてある。
 十住云ふ名前と十地云ふ名前は、同じ場合と別な場合がある、菩薩の因果五十二位を列ねて十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺云ふ時は、十住と十地と別であるが、龍樹菩薩の十住毘婆沙論云ひ世親菩薩の十地論云ふ時は、十地と十住が全く同じことである、元來地云ふ字には、生と成と住と持との四義を備へて居るので、住の字は地の字の別義を顯す場合があるから、十地のことを亦十住とも云ふのである。

(口) 十住毘婆沙論の内容

華嚴經の十地品云ふは、釋尊が他化自在天宮の摩尼寶藏殿にまします時、金剛藏菩薩が十方世界より來集せる諸菩薩衆の爲に、菩薩の十地(歡喜地、離垢地、發光地、燄慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地)の相を説きたるものである、龍樹菩薩の十住毘婆沙論は、此の十地の經説を釋せられたものであるが、耶舎三藏が誦出して、羅什三藏が翻譯する時分に、第二地まで誦出

して、其の後の諸地の釋論をば誦出しなかつたから、現存の十住毘婆沙論は、乃ち第二地までのみのものである。

現存の十住毘婆沙論に三十五品ある中、初より第二十七品までに初地の相を釋し、第二十八品以下に第二地の相を釋してある。而して其の解釋の躰裁は、文々句々を逐次に註釋したものでなく、全く達意的、實行的で、言は、通俗的の叙述になりて居る、彼の序品第一に、龍樹菩薩自ら述作の趣意を陳べて「我れ自ら文辭を莊嚴することを現さんが爲にあらす、亦利養を貪りて此の論を造るにもあらす」と云ひ、又「我れ慈悲を以て衆生を饒益せんご欲するが爲なり、餘の因縁を以て此の論を造らず」と云ひ、又「但佛經を見て第一義に通達するものあり、善き解釋を得て實義を解するものあり、有は文飾の章句を莊るを好み、有は偈頌を好み、有は雜句を好み、有は譬喩因縁を好む、我れ隨て一を捨てず、各々好むところに從て解を得しむ」と云ふてある、造論の御趣意が、既に斯くの如く衆生の根機に相應してそれく修行し能ふ様に御示し下さるに在りたか

ら、華嚴經の十地品を釋するご云つても、強ちに華嚴經の法門の廣大甚深なる旨を説明するご云ふではなかつた、それ故に華嚴宗相承の祖師方は、此の十住毘婆沙論をば餘り重く見ず、却つて淨土門所依の御聖教として、非常に大切なるものとなりた、即ち彼の易行品に明されたる難易二道の御判釋が、十住毘婆沙論述作の大主眼で、難行易行の二道に就いて、各々根機相應の法を依行せよ、但し我れは、易行中の易行なる阿彌陀佛の本願に歸命し奉れりご、其の方向を御示し下されたものである。

(ハ) 高祖の御引用

祖師聖人は、龍樹菩薩を崇めて眞宗七祖の第一祖とし、其の十住毘婆沙論中の易行品をば、七祖聖教の第一として依用せられた、それ故に易行品は始終全部を御引用になりたわけであるが、易行品以外の十住毘婆沙論では、三十五品の中第二の入初地品、第三の地相品、第四の淨地品ご、それから第九易行品の文が、本典行卷大行釋の下に、一連に御引用になりてある。

初に入初地品の文は十住毘婆沙論卷一(卅藏貳拾壹の五―五紙左)の終りの文で、行卷五紙左から七紙の左までに亘りて、大分長い文が御引用になりてある。

十住毘婆沙論曰、有人言、般舟三昧及大悲、名諸佛家、從此二法、生諸如來、此中、般舟三昧爲父、大悲爲母、復次、般舟三昧是父、無生法忍是母、如助菩提中說

般舟三昧父

大悲無生母

一切諸如來

從是二法生

中

終

問曰、初地何故、名爲歡喜、答曰、

如得於初果

究竟至涅槃

菩薩得是地

心常多歡喜

自然得增長

諸佛如來種

是故如此人。

得名賢善者。

如得初果者、如人得須陀洹道、善閉三惡道門、見法、入法、得法、住堅牢法、不可傾動、究竟至涅槃、斷見諦所斷法、故、心大歡喜、設使睡眠懶惰、不至二十九有、(中略)是故此地、名為歡喜。

十地の第一、歡喜地を明すが此の文の始終である、而して祖師御引用の趣意は南無阿彌陀佛の不行は、速疾に不退轉位に至ることを得る法なることを顯すに在る。「設使睡眠懶惰なれども、二十九有に至らず」と云ふが、初歡喜地不退轉の相である。速疾に此の位に至らんこと、名號大行を除ひて他に求むべからずと御示し下されたのである。

次の地相品の文は、十住毘婆沙論卷二(卅藏貳拾壹の五―六紙右)の文で、前の入初地品の文に引續き、行卷七紙の左から九紙の左までにかけて、之れ亦大分長い文が御引用になりてある。

問曰、初歡喜地菩薩在此地中、名多歡喜、爲得諸功德、故、歡喜爲地、

法應歡喜、以何而歡喜答曰、

常念於諸佛

及諸佛大法

必定希有行

是故多歡喜

如是等歡喜因緣故、菩薩在初地中、心多歡喜、(中略)必定菩薩、若念諸佛及諸佛、大功德威儀尊貴、我有是相、必當作佛、即大歡喜、餘者無有是事、定心者、深入佛法、心不可動。

之れは初地の菩薩の歡喜の心相を明した文である、名號大行を奉行する者、亦かくの如き歡喜の利益を得ること云ふが、祖師御引用の御趣意である。

次に淨地品の文は、十住毘婆沙論卷二(卅藏貳拾壹の五―八紙右)の文で、前の地相品の文に次ひて行卷九紙左から十紙右にかけて御引用になりてある。

又云、信力増上者、(信は)何(論文は信)名有所聞見、必受無疑増上名殊勝、問曰、有二種増上、一者多、二者勝、今說何者、答曰、此中二事俱說、菩薩入初地、得諸功德味、故、信力轉増、以是信力、籌量諸佛功德

無量深妙能信受、是故此心亦多亦勝、深行大悲者、愍念衆生、徹入骨髓、故名爲深、爲一切衆生求佛道、故名爲大、慈心者常求利事、安穩衆生、慈有三種（下略）

此の長行の前に七頌の偈文がありて、其の最初の一頌に「信力轉増上、深行大悲心、慈愍衆生類、修善心無倦」ごある、今の長行は前半頌、即ち信力増上ご深行大悲の二句を釋した文である、信力増上は自利、深行大悲は利他である、初歡喜地の菩薩には、かくの如き自利利他二利の徳が備はりて居る、今他力大行の名號を信行する者にも、亦かくの如く二利満足すご示し給ふが、祖師御引用の御趣意である。

後に易行品の文は、難易對判の文から、十佛章、彌陀章までの文を、長々ご御引用になりてある。前來入初地品、地相品、淨地品に、廣く初歡喜地の相を明してある、かゝる初歡喜地の位には、果して如何なる行を以てか到ることを得る、是れ豈に他語を要せんや、龍樹菩薩自ら第九易行品に至りて、難易二道いで、更に易行品の文を長々ご御引用になりたものである。

(二)

龍樹菩薩ご華嚴經

(龍宮及南天鐵塔)

賢首の華嚴經傳記卷一に、眞諦三藏の説ごして、西域の傳説を擧ぐるごころに依れば、龍樹菩薩龍宮に往き、華嚴大不思議解脫經を見る、三本あり、其の上本は十三大千世界微塵數偈、四天下微塵數品あり、中本は四十九萬八千八百偈、一千二百品あり、下本は十萬偈、四十八品あり、中に就いて、龍樹菩薩は下本を龍宮より將來し、大不思議論を造りて之れを釋す、十住毘婆沙論は是の大不思議論中的一部分であらうごこのことである。

此の華嚴經龍宮傳來説ご同じ様に、密經には鐵塔傳來説が唱へられてある、かゝる傳説の史上に明記せられたるは、餘り古くないごことで、華嚴の方は前記

華嚴傳、探玄記等の賢首の著書に始めて見へ、其の師至相の搜玄記には「此の經本は外國には凡そ十萬偈あり」このみ記して、未だ龍宮傳來説には言及してないやうである、又密教の方では不空の金剛頂經義決に、南天鐵塔傳來の事が、金剛智相承の説として記してある、即ち龍宮傳來、鐵塔傳來など云ふこの史上に明記せられたのは、華嚴の賢首大師や、密教の不空三藏に始まりたることで、共に唐朝以後の事である、若し夫れ龍樹菩薩に關する根本史料としては、今のところ羅什三藏譯の龍樹菩薩傳を推さねばならない様であるが、彼の傳には、龍宮傳來のことも、鐵塔相承のことも出て居ない、若し彼の傳中に強ひて求むるならば、龍樹菩薩初め同輩三人と、隱身の術を學びて宮中に忍び入り、事露はれて他の三人は殺されたが、龍樹獨り辛ふじて免るゝことを得、始めて「欲爲苦本」たることを悟り、出家して法を求むと云ふ記事の處に「既而得出、入山詣佛塔、出家受戒、九十日中、誦三藏盡、通諸深義、更求諸經、都無得處、雪山中深遠處有佛塔、塔中有一老比丘、以摩訶衍經與之」この密

教の鐵塔相承説は、此所等に胚胎して居るものであらうか。かくて與へられたる摩訶衍經を誦持愛樂し、實義を知ること雖も未だ通利を得ず、更に諸國を周遊して餘經を求む。外道論師、沙門義宗、咸く皆摧伏して乃ち憍慢の心を起し、茲に新教を主張せん企圖せり云ふ記事の處に「與諸弟子、受新戒、著新衣、便欲行之、獨在靜室水精地房、大龍菩薩、見其如此、惜而愍之、即接入海、於宮殿中、開七寶藏、發七寶函、以諸方等深奧經典無上妙法、授之龍樹、龍樹受讀、九十日中、究練甚多、其心深入、體得實利」このある、華嚴經の龍宮傳來説も、亦此所等から起りたるものであらう。

元來龍王龍宮の事は、小乗では樓炭經、正法念經、起世經などに、沙竭龍王、阿耨達龍王のことが説かれてあり、大乘では大集經の日藏分月藏分、菩薩所胎經などに説かれてありて、佛法の護持者云ふことになりて居る。而して其の所在が、大海中ともなりてあれば、雪山中ともなりて居る。されば龍王云ひ龍宮云ふは、雪山中の阿耨達地附近に居住せる、佛法崇信の種族をいふのであら

うごは、學者の推測するところであるけれども、未だ確乎たる結論には達して居ない様である。

(三) 十地經論

(1) 十住毘婆沙論と十地論

十地經論 Dasubhūmika-sūtra-sāstra は、眞宗七祖の第二天親(世親)菩薩 Bodhisattva Vasubandhu の所造で、支那北魏の朝に北印度の三藏菩提流支 Bodhiruki が翻譯した、龍樹の十住毘婆沙論と同じく、華嚴經の十地品を釋したもので、全部十二卷ある、祖師の本典には御引用なされてないやうなれど、七祖聖教の第二淨土論と同じく、天親菩薩の作であるから、今十住毘婆沙論に次いで、少しく紹介することにした。

同じく華嚴經十地品の釋論ではあるけれども、十住毘婆沙論の達意的、實行的、將た通俗的なることは異なりて、此の十地論は十地品の文々句々を、逐次に詳解したものである、我朝東大寺凝然大徳の華嚴法界義鏡に、此の二論の事を

記して「十住毘婆沙は彼の論(大不思議論)の一分、即ち十地の處なり、第二地に至る、是れ本論なりと雖、未だ人の疏を作りて昌に之を翫習する者あらず、十地論十二卷は天親菩薩の造、菩提流支の譯なり、華嚴の疏家、十地品に至りて皆依らざるなし、六相圓融特に楷模と爲して翫習し、憑據とすること此の論に過ぎたるなし」と云入てある、即ち彼の達意的、通俗的なる十住毘婆沙論は華嚴哲學の研究と云ふ方面には深い關係がない爲に、華嚴經を註釋する華嚴宗の人々からは、あまり多く顧られてない。然るに此の十地論は註釋的、研究的でありて、六相圓融、果分不可說等の、幽玄なる華嚴教理を發揮せる最初の釋論であるから、苟くも華嚴經を註釋する人の、其の十地品の處に到るや、必ず此の十地論を依憑せざるはない。之れ亦やがて吾祖の御引用にならなかつた所以とも見るべきであらう。

此の十地論には、支那隋朝淨影寺慧遠の十地義記と云ふがありて、其の卷頭に「實義彰れ難し、剛藏(十地品を説きたる金剛藏菩薩の事)に非れば以て其の玄

を闡くことなし、眞言御り難し、唯天親のみ乃ち能く其の要を宣ふ、是に於てか法他化(十地品説法の會)たる他化自在天の(ここ)に雨り、義天竺に流る」云ふて、他化自在天で十地品を説いた金剛藏菩薩と、其の十地品を釋して天竺に流布したる天親菩薩の徳を、鳥の兩翼、車の雙輪の様に推稱してある、十地論の華嚴教義史上に於ける位置、以て知るべきである。

(口) 十地論と淨土論

龍樹菩薩の阿彌陀佛に歸命したまへる麗はしき御信仰は、押へんとして押ふる能はず、縁に觸れ、物に接する毎に漏洩した、乃ち華嚴經の十地品を釋するに當りても、特に易行品の一品となりて露はれ、吾淨土眞宗の源を成した。淨土論の作者たる天親菩薩も、亦言ふまでもなく一心願生の有難き御同行であらせられた、然るに同じく華嚴經の十地品を釋するに當りて、其の法悦の發現するものなかつたは何故であらうか。之れに就ては、少しく其の御一代の事跡を伺はねばならぬ。

天親菩薩の傳は、眞諦三藏譯の婆數槃豆傳に出て居る。無着菩薩の御弟で、初め小乗を學び、諸部を研究して「理長爲宗」の主義の下に阿毘達磨俱舍論三十卷を造り、小乗を執して大乘を信ぜず、摩訶衍(大乘)は是れ佛説に非ずと主張せられた。後に至り、兄無着菩薩の懇切なる訓誡を受けて大乘に歸し、華嚴、涅槃、法華、般若、維摩、勝鬘等、諸大乘經の論を造られた。今の十地經論も其の中の一である。

西域記卷五の記事に依れば、無着菩薩の弟子が十地經を讀むのを聞きて、翻然として大乘の心を起したとあり。又清凉の華嚴玄談卷八には、大乘に歸入したる最初に、此の十地論を造りて色々の奇瑞があつたと記してある。則ち天親菩薩の十地論は、小乗より進んで大乘に入られし當時の御製作で、未だ一心願生の御安心をば獲得せられない時の事と伺はれる。蓋し天親菩薩は、少壯氣銳の時代には小乗諸部を研究して廣く五百部の論を作り、學解更らに進める中年時代には、一轉して大乘に入り、茲に亦五百部の論を作りて、大小千部の論師

として名聲五印を震動せしめた。

而して晩年の圓熟期には、再轉して他力淨土の法門に入り、麗はしき一心願生の行者ならせられた、彼の淨土論は即ち當時の御製作と伺はれるのである。

龍樹菩薩は餘程早くから大悲の願船に乗托せられたと見へて、祖師の和讃にも「智度十住毘婆沙等、ツクリテオホク西オホメ」とある如く、獨り十住毘婆沙論のみでなく、般若經を釋する大智度論にも、其の隨所に阿彌陀佛の法門が宣說せられてある。

然るに天親菩薩は前に言ふ如く、晩年に及びて他力本願に歸入せられたらしいので、今此の十地論を始め、佛性論、法華論、攝大乘論釋、唯識三十頌等の諸大乘論に、其の麗はしい法悦のほごは伺はれない、天親菩薩の願生淨土の御法悦は、獨り吾七祖聖教の第二に收め奉れる無量壽經優婆提舍願生偈―淨土論に依りてのみ伺ひ奉るべきである。

四 首楞嚴經

(イ) 傳譯沿革

具には大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經 Mahābuddhoshniṣa-tathā-gata-guhyahetu-sākshūtkṛita-prasannārtha-sarvabodhisattvākaryā-sūtrāṅgama-sūtra 云ふ、十卷あり。開元釋教錄卷九には「羅浮山南樓寺の沙門懷迪、廣府に遊んで一梵僧に遇ひ、齎すところの梵經を、請ふて共に譯し、十卷と成す、即ち大佛頂萬行首楞嚴經是なり。懷迪經旨を筆受し、兼ねて文理を緝綴す。其の梵僧傳經の事、畢に知るころなし」とあるが、貞元釋教錄卷十四には「中印度の沙門般刺蜜帝 Pāramiṣi 神龍元年五月二十三日、廣洲制旨寺に於て、灌頂部中一品を誦出し、譯して十卷とす、即ち萬行首楞嚴經是なり。烏菟國沙門彌伽釋迦 Mī-kāśākyā 譯語し、前正儀太夫同中書門下平章事房融筆受し、羅浮山南樓寺沙門懷迪證譯す」とある。開元錄に「一梵僧」とあるのは、蓋し此般刺蜜帝のことであらう。

(ロ) 一經の梗概

世尊室羅筏城の祇桓精舎にましくて、舍利弗、目連、富樓那等の大阿羅漢及び文殊師利等の大菩薩と俱に、波斯匿王及び城中の長者居士等の大供養を受けたまう。時に阿難獨り出で、行乞したりけるが、大幻師摩登伽女の爲に、妖呪を以て姪室に攝入せられ、將に戒體を破毀せられんことを。世尊之を知ろしめして、文殊師利を遣し、神呪を宣説して妖呪を銷滅し、阿難及び摩登伽を提獎して、佛所に歸來せしむ。阿難佛を見て頂禮悲泣し、久來一向多聞なれども未だ道力を全ふせざるを恨み、默然として聖旨を承受す。

佛言く、善哉阿難、汝當に知るべし、一切衆生無始よりこのかた生死相續するところは、皆常住の眞心性淨明體なるを知らずして諸々の妄想を用ふるに由る。此の想眞ならず、故に輪轉あるなり。時に世尊金色の臂を舒し、阿難の頂を摩して告げて言く、三摩提あり、大佛頂首楞嚴王具足萬行十方如來一門超出妙莊嚴路と名づく、汝今諦に聽け。阿難頂禮して、伏して慈旨を受く。佛爲に先づ圓通の解を説き、次に圓通の行を示し、次に圓通の位を明し、乃至精しく

三界の苦果を説き、詳かに煩惱業障を辯じたまう。凡そ一經の始終、眞心妄想の際を明にし、修因成果の道を教へて餘すところなし、之を稱して首楞嚴三昧といふのである。

(ハ) 首楞嚴三昧

首楞嚴とは、一切事究竟堅固と意譯せられてある。首楞嚴三昧と云ふのは略稱で、具には經題の通りに大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴三昧と云はねばならぬ。中に就て、初の大佛頂と云ふ三字が總體で、次の十六字が別明である。即ち如來密因修證了義と云ふ八字は如來果人に就て云ひ、諸菩薩萬行首楞嚴と云ふ八字は菩薩因人に就て云ふたものである。尙ほ其の意味を詳言すれば、如來密因修證了義とは、修因證果共に唯佛與佛の知見にして、淺智の測り知るところに非ず、故に密因修證と云ふ。了義とは說法顯了にして虛妄を離れ、眞實の義理を詮表するに名づく。即ち如來の因果說法を總稱して如來密因修證了義と云ふたものである。諸菩薩萬行首楞嚴とは、菩薩自利利他の行無

量なるを萬行と云ひ、之等の萬行能く堅固に究竟せるを首楞嚴と云ふ。即ち菩薩の二利因果を總稱して、諸菩薩萬行首楞嚴と云ふたものである。かゝる佛の因果と菩薩の因果は、體性明淨なる眞心に總該せらる、故に冠して大佛頂と云ふ。大は眞心の廣大を意味す、所謂體大相大用の三大の義がある。佛頂とは眞心を喻顯す、一切法中最も尊崇すべき佛なり、佛身中最も尊きは其の頂なり、蓋し尊崇すべきもの佛頂に過ぎたるはない、以て眞心の尊重すべきを顯したものである。されば諸佛諸菩薩、因行果德、一切網羅して餘す所なき、之を名けて一心とす、經に常住眞心性淨明體と説けるが之れで、所謂總該萬有の一心、之を稱して大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴三昧と云ふのである。



かくの如く、因果を總該せる一心に名づけたるものであるから、若し要略して云へば、大三昧と云ふべきである。

(二) 高祖の御引用

▲本典化土卷の末に「夫れ諸の修多羅に據て、眞僞を勘決して、外教邪僞の異執を教誡せば」さて、廣く諸經論を御引用せられたる中に、首楞嚴經に言くことして、次の文が御引用になりてある。(化土卷末二十三紙右)

彼等の諸魔、彼の諸の鬼神、彼等の群邪亦徒衆ありて、各々自ら謂はん、無上道を成りて、我滅度の後、末法の中に、此の魔民多からん、此の鬼神多からん、此の妖邪多からん、世間に熾盛にして、善知識を爲りて、諸の衆生をして愛見の坑に落さしめん、菩提の路を失し、無識を眩惑して、恐は心を失せしめん、所過の處、其の家耗散して、愛見の魔となりて、如來の種を失せん。

之は首楞嚴經卷六(卅藏拾貳の四一三二二十七紙左)の文を取意せられたもの

で、經文の上は、道場に安立して諸の魔事を遠ざけ、菩提心に於て退屈なきを得せしめん爲の御說法である。今御引用の趣意は、外教邪偽の異執（聖道の諸教に執着する者を指す）を諸魔に比し、若し夫れ邪正の道路を辨へずんば、遂に菩提の路を失し、如來の種を失はんと警告せられたものである。

▲三帖の御和讃第一帖の終りに「首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる八首」と云ふ一章がある、普通に勢至和讃と稱して居る。其の最後に「已上大勢至菩薩 源空聖人御本地也」と、特に御結讃あらせられたところから伺へば、祖師聖人の御用意の、尋常一様でないことが分る。首楞嚴經卷五の終り

（正藏拾貳の四―三百二十四紙左）に次の様な文がある。

大勢至法王子、其の同倫五十二の菩薩と、即ち座より起ちて佛足を頂禮し、佛に白して言く、我れ憶ふに、往昔恒河沙劫に、佛あり世に出づ、無量光と名づく、十二の如來相繼ぐこと一切、其の最後の佛を超日月光と名づく、彼の佛我れに念佛三昧を教ふ。譬へば人あり、一は専ら爲に憶ひ、一人は

専ら忘るゝが如し、如是二人は、若し逢へども逢はず、或は見れども見るに非ず。二人相憶へば、二の憶念深し、如是は生より生に至り、形と影とに同じく、相乖異せず、十方の如來衆生を憐念すること、母の子を憶ふが如し、若し子逃逝すれば、憶ふと雖も何にか爲ん、子若し母を憶ふこと、母の憶ふ時の如くなれば、母子生を歴るも、相違遠せず、若し衆生心に佛を憶ひ佛を念すれば、現前當來必定して佛を見たてまつり、佛を去ること遠からず、方便を假らずして、自ら心開くることを得ること、染香人の身に香氣あるが如し、此を則ち名づけて香光莊嚴と曰ふ。我れ本と因地にして、念佛の心を以て無生忍に入る、今此の界に於て、念佛の人を攝して淨土に歸せしむ。佛圓通を問ふ、我れ選擇することなく、都て六根を攝して、淨念相繼ぎ、三摩提を得たり、斯を第一と爲す。

經に二十五人の聖者の圓通を説ける中、之れは第二十四の大勢至菩薩の念佛圓通を説ける文である。以上の文を和譯して讚嘆せられたのが、祖師聖人の勢

至和讚八首である。

(一) 勢至念佛圓通して、五十二菩薩もろごもに、すなはち座よりたゞしめて、佛足頂禮せしめつゝ。(二) 教主世尊にまふさしむ、往昔恒河沙劫に、佛世にいでたまへりき、無量光ごまふしけり。(三) 十二の如來あひつぎて、十二劫をへたまへり、最後の如來をなづけてぞ、超日月光ごまふしける。(四) 超日月光この身には、念佛三昧おしへしむ、十方の如來は衆生を、一子のごこく憐念す。(五) 子の母をおもふごこくにて、衆生佛を憶すれば、現前當來をからず、如來を拜見うたがはず。(六) 染香人のその身には、香氣あるがごこくなり、これをすなはちなづけてぞ、香光莊嚴ごまふすなる。(七) われもご因地にありしごき、念佛の心をもちてこそ、無生忍にはいりしかば、いまこの娑婆界にして。(八) 念佛のひこを攝取して、淨土に歸せしむるなり、大勢至菩薩の、大恩ふかく報ずべし。

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

以上八首の意を、第三帖の正像末和讚に至り、更に二首の和讚を以て讚詠せられてある。

(一) 無礙光佛のみごこには、未來の有情利せんごて、大勢至菩薩に、智惠の念佛さづけしむ。(二) 濁世の有情をあはれみて、勢至念佛すゝめしむ、信心のひこを攝取して、淨土に歸入せしめけり。

吾祖師聖人は首楞嚴經を以て、淨土念佛法門の源流を説きたる經典ご觀られたのである。即ち往昔恒河沙劫の古へ、無礙光如來親しく念佛法門を勢至菩薩に授けられた、これが抑々淨土念佛法門流傳の根源である。而して大勢至菩薩自ら源空聖人と現れて、濁世の有情を引導攝益したまへるもの、之れ我が淨土眞宗である。然れば則ち淨土眞宗は、彌陀如來直傳の法門なりご宣言したへるものご伺はれる。

(ホ) 楞嚴經の疏

首楞嚴經は、華嚴宗、天台宗、禪宗等の諸師に依りて盛に註釋せられ、大藏經及

日本續藏經に收められて、現存して居るものゝみでも五十有餘部ある。其中代表的のものを擧ぐれば、宋の長水子瑋（華嚴宗）の楞嚴經義疏注經二十卷（續藏十六の三以下）。明の藕益智旭（天台宗）の楞嚴經玄義二卷、同文句十卷（續藏貳拾の三以下）。明の憨山德清（禪宗）の楞嚴經懸鏡一卷、同通議十卷（續藏拾九の一下）等であらう。

此の首楞嚴經及び圓覺經は、華嚴宗及び禪宗で重用するところの御經である。中に就て圓覺經は、高祖の御引用中にはないやうであるけれども、因に少しく紹介して置かう。

五 圓 覺 經

(イ) 傳譯及び梗概

具には大方廣圓覺修多羅了義經 Mahāvaiṣṭya-pūrṇabuddha-sūtra-prasānārtha-sūtra 云ふ、一卷の御經で、唐の佛陀多羅 Buddhaśrīta の譯である。經の終りに「是の經をば、大方廣圓覺陀羅尼と名づけ、亦修多羅了義とも名づけ、亦秘密王三昧

とも名づけ、亦如來決定境界とも名づけ、亦如來藏自性差別とも名づく」と云ふ五名が擧げてある。其中第一名と第二名を合集し、陀羅尼の三字を省きて、今の經題としたものである。

所謂圓覺とは、一心眞如のところで、起信論では之を在纏位中（纏とは煩惱のここ）に就て衆生心と云ひ、今は出纏の邊で大圓覺と云ふたものである。虛明靈照、諸の分別念想なきを覺と云ふ。而して此の覺たるや、凡を離れて聖に局るに非ず、境を離れて心に局るに非ず、心境凡聖、本來空にして、唯是れ一の靈覺である、之を名づけて大圓覺と云ふ。華嚴宗では之を總該萬有の一心と取り、禪宗では以て西來の祖道とす。兩宗の人師によりて愛翫せらるゝ所由、以て知るべきである。

(ロ) 圓覺經の疏

支那華嚴宗及び禪宗の諸師の圓覺經の疏は、大藏經及び日本續藏經に收められて現存せるものゝみでも、約そ二十部近くある。中に就て代表的のものを擧

ぐれば、唐の圭峰禪師宗密(華嚴宗)の圓覺經大疏十二卷、同大疏釋義鈔二十六卷、同略疏鈔十二卷、同略疏四卷、以上は教禪の諸宗を通じて、圓覺經の指針となれるものである。尙ほ別に道場修證義十八卷をも著してある。禪宗では明の憨山徳情の圓覺經直解二卷を推すべく、又宋の孝宗帝の御註圓覺經云ふもの一巻あり、我國では鳳潭の日本訣、普寂の義疏等がある。

唐の圭峰禪師宗密云ふは、初め禪宗に參じ、後ち華嚴宗に入れる人で、教宗と禪宗の一致、特に華嚴宗と禪宗の一致を主張した人である。而して其の一致の中心をば、此圓覺經に取られたもので、大疏の自序に「禪は南宗に遇ひ、教は斯の典(圓覺經のここ)に逢ふ、一言の下心地開通し、一軸の中義天朗耀たり」と云ふてある。かくて教と禪とを巧に融會したものであるから、教禪諸宗の大師圓覺經を讀むや、必ず此圭峰の疏鈔に據らざるはないやうになりたのである。

(ハ) 首楞嚴經と圓覺經

首楞嚴經と圓覺經とは、教義の能く似た御經であつて、華嚴宗及び禪宗の人

師に重用せられて居ることは、前から云ふ通りであるが、煩惱即道と云つた様な趣が、頗る大膽に説かれてあるで、不得意の輩には稍々危険の恐れがある。それ故に禪宗では、古來大分物議に亘りて居る。禪林寶訓(合註卷二)に曰く「叢林至るごころ邪說熾然なり、乃ち云く、戒律必ずしも持たず、定慧必ずしも習はず、道徳必ずしも修めず、嗜欲必ずしも去らずご。又維摩圓覺を引て證ご爲し、貪瞋癡殺盜婬を替じて梵行ご爲す。嗚呼斯の言起る、豈獨り叢林今日の害のみならんや、眞に法門萬世の害なり」と。之は維摩經の「大乘菩薩、入諸婬舍、示欲之過」の説、及び圓覺經の「一切障礙即究竟覺、乃至諸戒定慧、及婬怒癡、俱爲梵行、此大權聖人、示跡利生」の説を以て、害を萬世に遺すものご爲したものである。

又我朝曹洞禪の道元禪師は、遙に書を支那天童山の如淨禪師に呈し「拜問して云く、首楞嚴經、圓覺經は、在家の男女之を讀み、以て西來の祖道ご爲す。道元兩經を披閱して、文の起盡を推尋するに、自餘の大乗諸經に同じからず。

未だ其の意を審にせず、諸經に劣るの言句ありと雖、全く諸經に勝るの義なし、頗る六師(外道のこころ)等の見に同じきものあり、畢竟如何が決定せん」として、師の教示を請はれた。時に天童和尚も「楞嚴經は昔より疑ふ者あり、謂く此の經は後人の構ふところ歟、先代祖師、未だ曾て經を見ず、近代癡暗の輩、之を讀み之を愛す。圓覺經も亦然り、文相の起盡、頗る似たり」と答へられた。六師外道の説に似たりと云ひ、後人の偽作ならんご云ふが如き、言あまりに酷に過ぎるやうであるが、蓋し之は、在家の男女、及び初學の者をして、過ちなからしめんが爲の、婆心の切なるものと見るべきであらう。

六 首楞嚴三昧經

(イ) 傳譯の沿革

略名で呼べば、前の經も此の經も同じく首楞嚴經であるが、全く別本である。此の首楞嚴三昧經 Śraṅgama-sāṃdhi-sūtra は、羅什三藏 Kumārajīva の翻譯で、上下二卷ある。開元釋教錄や、貞元釋教錄に記するところに依れば、此の現存

の羅什所譯のものは第九譯で、之より以前に入譯ありたが、皆傳はらないこのことである。其の目錄のみを擧ぐれば、次の如くである。

第一譯	首楞嚴經二卷	漢の支婁迦讖	(缺)
第二譯	方等首楞嚴經二卷	吳の支謙	(缺)
第三譯	蜀首楞嚴經二卷	魏、吳の失譯	(缺)
第四譯	後出首楞嚴經二卷	魏、吳の失譯	(缺)
第五譯	首楞嚴經二卷	魏の白延	(缺)
第六譯	勇伏定經二卷	晋の法護	(缺)
第七譯	首楞嚴經二卷	晋の竺叔蘭	(缺)
第八譯	首楞嚴經二卷	涼の支施崙	(缺)
第九譯	首楞嚴三昧經二卷	秦の鳩摩羅什	(存)

(ロ) 鸞師の御引用

世尊王舍城耑闍崛山中にましますごき、大比丘衆三萬二千人、大菩薩衆七萬二

千人、皆來集せり。時に賢意菩薩、三昧の法を請問せしに、佛爲に首楞嚴三昧を教へたまう。即ち一經の始終に亘りて、具に百句の義を以て此の三昧を釋し、更に三昧の威神力、功德利益等を説きたまへり。

此の經は、高祖の御引用中にはないやうであるが、曇鸞大師の往生論註卷上終り八番問答の第六に、滅罪のここを問答せられて在心、在緣、在決定と云ふ御解釋がなされてある。其の在緣と云ふ御釋の下に譬喩を擧げて「譬へば人ありて毒箭を被ふり、中るごころ筋を截り骨を破るに、滅除藥の鼓を聞けば、即ち箭ぬけ、毒除るるが如し」とて、脚註に首楞嚴經の「譬へば藥あり、名づけて滅除と曰ふ、若鬪戰の時、用て鼓に塗れば、鼓の聲を聞くもの、箭ぬけ、毒除るるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、首楞嚴三昧に住して、其の名を聞けば、三毒の箭、自然に拔出す」と云ふ文が引かれてある。之れは首楞嚴三昧經卷上(卅藏拾壹の四一六六十五紙右)の文を取意せられたもので、經文の方は次の如くである。

大藥王あり、名づけて滅除と曰ふ、若し鬪戰の時、用て鼓に塗れば、諸の箭射刀矛に傷つけらるるもの、鼓の聲を聞くことを得て、箭ぬけ、毒除るるが如し、是の如く、堅意菩薩よ、首楞嚴三昧に住して、名を聞くものは、貪恚癡の箭、自然に拔出し、諸の邪見の毒、皆悉く除滅し、一切煩惱復動發せず。御引用の趣意は、觀經下々品の五逆十惡の機類が、十念々佛によりて往生を得ることを證明せられん爲でありて、即ち五逆十惡の重罪を造れる者も、阿彌陀如來の名號を聞て、無上の信心に住すれば、罪業消滅して往生を得ること、恰も滅除藥の鼓の聲を聞けば、箭ぬけ、毒除るるが如くであること仰せられたものである。經文は首楞嚴三昧の功德利益を喩顯せられたものであるが、今はそれを名號の功德に轉用せられたものである。

以上鸞師の御引用になりた首楞嚴經と、高祖の勢至和讚及び本典化土卷に御引用になりた首楞嚴經とは、全く別本であることを忘れてはならぬ。

七 楞伽經

(1) 傳譯の沿革

楞伽經 Lankavatara-sutra には前後四譯ありて、一亡三存して居る、それを時代別に表示すれば左の如くである。

楞伽經	四卷	涼の曇無讖 Dharmarakṣa 譯	亡
楞伽阿跋多羅寶經	四卷	宋の求那跋陀羅 Guṇabhadra 譯	存
入楞伽經	十卷	魏の菩提留支 Bodhiruci 譯	存
大乘入楞伽經	七卷	唐の實叉難陀 Śikṣananda 譯	存

三存の經をば、其の卷數で呼び分けて、宋譯の楞伽阿跋陀羅寶經を四卷楞伽と云ひ、魏譯の入楞伽經を十卷楞伽と云ひ、唐譯の大乘入楞伽經を七卷楞伽と呼び倣して居る。其の卷數に多少のある如く、四卷楞伽は前後に缺くところがありて最も不完全であり、十卷楞伽は最も完全なものではあるが、譯文冗長に失するの嫌があるを稱せられ、最新の七卷楞伽は、宋魏二譯の長短を補削し、諸種の梵本を參考して譯成したるものゆへに、三本中最も完全なるものと稱せ

られて居る。

三本の中で四卷楞伽は、禪家の大師に愛翫せられて居る。それは彼の達磨大師が支那に渡來して、法を第二祖の慧可大師に傳へる時分に、此の四卷の楞伽阿跋陀羅寶經を心印として付屬せられたと云ふことより、大變彼の宗の師資の間に重用せらるゝやうになりたのである。然るに第六祖の慧能大師が、其の初め金剛般若經(羅什譯)を讀むを聞いて發心せられたと云ふことより、人々楞伽よりも金剛經の方を愛翫するやうになりたこと云ふやうな傾向を示した。けれども楞伽の信用全く地を拂つたこと云ふではなく、宋元以後まで、流行なかなか盛んで、蘇東坡の如きは、特に序文を書いて世に推奨した。

楞伽經の梵本には大中小の三本あり、其の大本は十萬頌で、千闍の南、遮俱槃國の山中にあり、中本は三萬六千偈で、吐火羅の三藏彌陀山の如きは、親しく天竺に於て此の本を受持せりと傳へられ、小本は千頌(又は四千頌)で、楞伽乾利陀耶(楞伽心)と云ふ、現存のものは此小本の一部であることである。

(口) 一經の大意

世尊羅婆那王の請ひに應じて楞伽山に入りたまひ、王及び大慧菩薩に對して、廣く五法(相、名、分別、正知、如如)三自性(遍計所執性、依他起性、圓成實性)八識(眼、耳、鼻、舌、身、意、末那、阿賴耶)二無我(人、法)の教相より、六度の妙行、邪正の因果を説き示したまへり。中に就いて一經の中心は、眞如如來藏と無明との關係を説くに在りて、或は如來藏を以て不生不滅の法なりと説き、或は如來藏を善不善の因と爲すと説き、以て眞(眞如)妄(無明)和合非一非異の道理を明らかにせられてある。要するに一心眞如如來藏なるもの、如何なるものなりやを明らかにするが、此の經の主眼なるゆへに、四卷楞伽では一經を四品に分ちて、一切佛語心品之一、二、三、四と爲してある。即ち此の經は、一切佛の心印を説(語)かれたるものと云ふ意味である。以心傳心を貴ぶ禪宗で、此の經を心印として付屬したさいふことも、これが爲であらうと思はる。又馬鳴菩薩の大乗起信論は、主として此の經に依りて造られたものであるから、起信論に

依るごころの多ひ華嚴宗の人々は、此の楞伽經をも同様に重んずる。又既に五法、三自性、八識、二無我の法門が説かれてあるから、法相宗では所依の六經の中に算へてある。

(ハ) 楞伽經の疏

三本の楞伽經の中、翻譯の點から云へば四卷楞伽が最も不完全のものであるけれども、達摩大師が佛祖の心印なりとして付屬せられたさいふごころから、禪宗の流行と共に此の本が最も多く世に愛翫せられて居る。随つて楞伽經の疏と言へば、唐、宋、元、明、清の各時代に亘りて、現存して居るもの、みでも十有餘家の多きに達して居るが、それ等が殆んど皆四卷楞伽を釋したるものばかりと云つていゝほごである。但し四卷楞伽を中心とし、後の二譯を参照してあることは、諸疏皆同轍であるが、特に三譯の比較さいふごころを主として書いたものは、左の二疏である。

楞伽阿跋多羅寶經會譯四卷 明の員珂

諸經論大意

楞伽經宗通八卷

明の曾鳳儀

四卷楞伽を中心として經義を解釋したるもの、主なるものを擧ぐれば、左の數部であらう。

楞伽經通義六卷

宋の四明善月

觀楞伽經記八卷

明の慈山德清

楞伽參訂疏四卷

明の仁安廣莫

楞伽阿跋多羅寶經合轍八卷

明の通潤

楞伽阿跋多羅寶經玄義一卷

明の藕益智旭

同

義疏四卷

同上

それから翻譯の上より云へば最も精細を極めたる十卷楞伽に就いては、冗長の嫌ひがあるさへ云はれて居るだけに、特に此の本に就ての註釋は、古來からないやうである。最後の唐譯七卷楞伽に就いては、左の二疏がある。

入楞伽心玄義一卷

唐の法藏

大乘入楞伽經註十卷

宋の寶臣

中に就いて入楞伽心玄義一卷は、華嚴宗の祖賢首大師法藏の著述で、僅に一卷の小編ではあるが、傳譯の沿革から、一經の大綱を陳べたる、寔に要領を得たる名著でありて、凡そ楞伽の註釋書中、此の書の右に出づるものなしと稱せられて居る。

吾國では虎關師鍊(元亨釋書の著者)の佛語心論、及び養存の楞伽折衷等がある。

(二) 高祖の御引用

正信偈の龍樹章に「釋迦如來楞伽山、爲衆告命南天竺、龍樹大士出於世、悉能摧破有無見、宣說大乘無上法、證歡喜地生安樂」とあり、又高僧和讚の龍樹章にも

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべし

世尊はかねてこきたまう

ご仰せられてある。之れは釋尊が楞伽經の中に、龍樹菩薩の出世を豫言せられてある經文の意を述べられたのである。それは楞伽經の最後の偈頌品に出て居るものであるが、四卷楞伽には此の品が缺けて居る、乃ち十卷楞伽と七卷楞伽とに、次のやうな文がある。

十卷楞伽（魏譯の入楞伽經）卷九總品第十八之一||世藏九の十一九百九十四紙右

我乘内證智 妄覺非境界 如來滅世後 誰持爲我説

如來滅度後 未來當有レ人 大慧汝諦聽 有レ人持我法

於南大國中 有大德比丘 名龍樹菩薩 能破有無見

爲人説我法 大乘無上法 證得歡喜地 往生安樂國

七卷楞伽（唐譯の大乗入楞伽經）卷六偈頌品第十之初||世藏十の一三十三紙右

自内所證乘 非計度所行 願説佛滅後 誰能受持此

大慧汝應レ知 善逝涅槃後 未來世當有 持於我法者

南天竺國中 大名德比丘 厥號爲龍樹 能破有無宗

世間中顯我 無上大乘法 得初歡喜地 往生安樂國

之を稱して楞伽懸記の文と云ふ、懸記とは懸かなる後世の事を記するところで所謂未來記—豫言のこころである。龍樹菩薩はかゝる世尊の豫言に應じて出世せられた方であるといふこころから、此の楞伽懸記の文は、諸宗通じて非常に貴重ぶこころである。

(木) 口傳鈔の引用

眞宗法要の口傳鈔に「眞宗所立の報身如來、諸宗通途の三身を開出する事」と云ふ一章がある、略して「開出三身章」と稱して居る、其の中に「楞伽經にのたまはく」として、次の文が引いてある。

十方諸刹土 衆生菩薩中 所有法報身(佛) 化身及變化

皆從無量壽 極樂界中出

之は七卷楞伽卷六偈頌品の文、即ち懸記の文と一連の偈頌で、少し前のところにある文である。全く經文のまゝであるが、たゞ「所有法報身」と云ふ一句が、經父の方は「所有法報佛」となりて居るのみである。それが十卷楞伽の方では、大分文句が異なりて、次の如くなりて居る。

報相佛實體 及所化佛相 衆生及菩薩 并十方國土
習氣法化佛 及作於化佛 是皆一切從 阿彌陀國一出

兩譯共に意味は同じことで、十方諸佛の法、報、應、化身は、皆阿彌陀如來の安樂世界より出現したるものといふのである。口傳鈔の開出三身章に引用せられたるここ、寔に所由ありといふべきである。經文の上は、此の文の前に廣く三性（遍計所執性、依他起性、圓成實性）の事を詳説し、妄計の遍計所執性や、有相の依他起性は、虛妄の法である、諸法の空無相、不生不可得なる、之れ圓成實性で眞實であること説いて、さて同じく有相と云ふても、十方佛國の三身の如きは、阿彌陀佛の極樂界中より出現したもので、虛妄ではない眞實であること

説かれたものである。

八 大乘起信論

(1) 傳譯の沿革

大乘起信論 Mahāyāna-sraddhotpāda-sūtra は、馬鳴菩薩（梵名、阿濕縛囉沙 Asvaghosa）の作にして左の如き二代の譯翻あり、共に現存して居る。

大乘起信論一卷 梁の眞諦（梵名、抱那羅陀 Gunarata）譯

同 二卷 唐の實叉難陀 Śikṣānanda 譯

兩譯の中、唐の實叉難陀の譯本に就ては、法相宗の人々の間に、一種の傳説がある。それは起信論の中に説かれてある眞如受重、眞如隨緣と云ふ説は、唯識家の根本教義たる眞如凝然不作諸法——眞如は凝然として諸法と作らずと云ふ説と矛盾するところから、彼の論は眞諦三藏の誤譯であること主張するに至りた。然るに獨り眞諦三藏のみならず、唐朝の實叉難陀三藏所譯にも、同じく眞如受熏、眞如隨緣の説がある、累代の三藏悉く翻譯を誤れりとはいはれまい、

之れはやはり、馬鳴菩薩が此の説を立てられたのであらう。果して然らば、印度諸論師の間に於て、無着世親等の諸菩薩は眞如の凝然不作を主張し、馬鳴菩薩は隨縁受熏を説く云ふことになりて、矛盾衝突甚だ領解しがたきことなる。そこで實叉難陀譯の梵本は、あれは印度に古來からありた梵本ではなく、玄奘三藏入竺の時に、彼の國の人々の請に依り、眞諦の漢譯を其のまゝ梵譯して説示した、其の本を實叉難陀の再び漢譯したものが、即ち唐譯の起信論であるから、梁譯と同じ様に、眞諦三藏の誤譯で、決して印度在來の説―馬鳴菩薩の説ではなひご主張する様になりたのである。蓋し之れは自家の教義を守らん爲に無理に捏造せる傳説で、其の實、梁唐兩譯は同本の異譯であらう、二本對檢するに致一にして支吾するところはなひ。

(口) 馬鳴菩薩の傳

馬鳴菩薩の傳は、馬鳴菩薩傳(羅什譯―正藏二十七の二)婆數槃豆法師傳(眞諦譯―同上)付法藏因縁傳卷五(正藏二十六の六)等に出て居る。今且らく此

の三書によりて略傳を擧げやう。

馬鳴菩薩は、佛滅後五百年の頃に、中印度舍衛國(室羅筏悉底Grāvastī)に出づ、八分毗伽羅論、四皮陀六論に通じ、十八部三藏を解し、當時の文宗學府と稱せられて居つた。初め外道によりて一世に獨歩し、沙門を難詰して顔色なからしめ、彼等は捷椎(Chakri) (木にて作り、時刻を報ずる木板の如きもの)を鳴して、人を集め、説法し供養を受くる資格なしとて之を打つことを禁じ、頗る傍若無人に振舞ふて居つた。時に北方の長老協尊者(梵名、波栗濕縛Parivā)中天竺に來り、諸寺の法によりて捷椎を鳴さる所以を詰問すれば、寺僧前記の事情を訴ふ。尊者曰く、須らく捷椎を鳴せ、彼の外道來らば吾自ら對論せんご寺僧乃ち捷椎を鳴すに、彼れ果して來り論議を挑む。尊者曰く負けたる者、勝者の弟子となることを誓はんご。かくて論難往復せしに、馬鳴屈伏して約に従ひ弟子となり、後協尊者の弟子富那奢Punayasasより衣鉢を傳へ、爾來佛門の驍將として名聲五印に轟くやうになりた。彼れまた頗る詩想に富み、加ふるに音

聲哀婉にして人を魅するの力があつた。曾て頼吒和羅の曲を作り、華氏城（梵名、婆吒梨子 Pataliputra）に行化して自ら鍾鼓を撃ち、以て諸法空無我の教へを諷誦するや、王子群臣、城中の男女、一時に開悟して出家修道する者五百餘人と注せられた。其の後北方月氏國（梵名、覩貨羅 Tukhara）の迦膩色迦 Kaniska 王四方を征服して勢ひ當るべからず、遂に南下して中印度を攻む。時に償金三億にかゆるに、佛鉢と馬鳴を以てし、和儀を容れて北に歸つた。爾來馬鳴は迦膩色迦王の下にありて、彼の第四結集の際には、選ばれて綴文の任に當り、十二年を経て、婆沙論編纂の大業を成就した。後ち彼れは盛に大乘佛敎を唱説し一代の間、著述頗る多かつたが、大藏中に現存して居るものは、大乘起信論の外に、大宗地立文論二十卷、尼乾子問無我經一卷、大莊嚴論經十五卷、佛所行讚五卷、十不善業道經一卷、六趣輪迴經一卷、事師法五十頌一卷等である。

(ハ) 一 論の梗概

淨影寺慧遠法師の如きは、起信論を以て楞伽經別申の論と爲し。新羅の元曉

法師や、唐朝華嚴宗の賢首大師等は、諸大乘經通申の論と爲して居る。兎に角楞伽經と起信論とは、教義上頗る密接の關係を持ちて居る。而して一論の結構は五段に組織されてある、一に因緣分、二に立義分、三に解釋分、四に修行信心分、五に勸修利益分である。因緣分に造論の所由を説く、之れ序分である立義分で大綱を總論し、解釋分でそれを解説する、此の二段が立論で、次の修行信心分に實行の方法を示す、以上中間の三段が正宗分で、最後の勸修利益分は、有縁の衆生に信心修行を勸むる流通分である。其中間三段の正宗分に説かれたる理論と實行の法門は、一心二門三大四心五行である。所謂一心とは、論に之を衆生心と云ふてある、衆生心と云ふても、唯識論に云ふころの阿頼耶識の如き、個人的の心でなく、亦有漏虛妄の心でもなく、法界に遍滿せる普遍的の眞如來藏心である。次に二門とは、其の如來藏心の不變常住なるを心眞如門と云ひ、それが無明の縁によりて隨緣起滅する邊を心生滅門と云ふ、それを三細六麁の九相を以て分別してある。次に三大とは、眞如來藏心の本體、

徳相、業用の廣大無邊際なるを云ふのである。後に四心五行の實行方法では、眞如と佛法僧の三寶を信するのを四種の信心——四心と云ひ、布施、持戒、忍辱、精進、止觀の行を修するのを五行と云ふのである。

(三) 起信論と淨土教

四心五行を明せる修行信心分の終りに「復次に怯弱の衆生ありて、此の娑婆世界に於ては、常に諸佛に値ひて親しく供養すること能はざるが故に、懼らくは信心成就し難からんとして、意退轉せん」と欲はんものには、如來に勝方便ありて信心を攝護したまう、謂く意を專にして佛を念ずるの因縁を以て、願に隨つて他方佛土に生ずることを得、常に佛を見たてまつりて永く惡道を離るること、次のやうな經文が引いてある。

修多羅に説くが如し、若し人専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根を回向して彼の世界に生れんと願求すれば、即ち往生を得て常に佛を見たてまつるが故に、終に退あることなし。

云ふところの修多羅とは、蓋し大無量壽經を指したのであらう、即ち彼の經の第十八願成就文に「諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼國、即得往生、住不退轉」とある文と、全く同じ意味である。道綽禪師の安樂集(下卷十紙左)に、此の文が引かれてある。かくの如く西方願生を勧められてあるから、法然聖人の選擇集には、此の論を以て傍明淨土の論と爲されてある。又高祖聖人は本典化土卷末に、同じく修行信心分の「或は衆生ありて、善根力なければ則ち諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらる」等の文が御引用になりてあり、同眞佛土卷には飛錫の寶王論によりて、起信論の離言眞如の下の「若知(一切法)雖レ説無レ有ニ能説可レ説、雖レ念亦無レ能念可レ念」等の文が引かれてある。佛滅後五百年代に出世して、大乘佛教を復興せられたる馬鳴菩薩は、同時に又淨土教をも復興せられた人であることを忘れてはならぬ。かくて龍樹天親等の諸大士次第に出世して、淨土の一門像末法滅の時期まで光輝を放つやうになりたのである。

(木) 起信論の疏

釋摩訶衍論十卷は、龍樹菩薩が大乗起信論を釋されたるもので、後秦の代に後提摩多といふ人が翻譯されたとして、藏經中に現存して居る。支那では唐末から宋遼の間に、起信論と同じく全く華嚴宗の書物として取り扱はれて居つたやうで諸師の註釋書が日本續藏中に數部現存して居る。又我國では空海上人以來、殆んど東密眞言宗の中心聖典として、重用せられて居るやうであるが、叡山や南都法相宗の間には、全く後人の僞作として貶斥せられて居る。それは天應年中に、藥師寺の戒明和尚が歸朝の時、此の釋摩訶衍論を將來した、諸宗の學者皆以て僞作ならんと疑ふて居つたが、果して當時南都大安寺に居られたる新羅の僧珍聰の云ふには、是の論は新羅大空山の沙門月忠なるもの、撰である。是を以て淡海居士は「名を聞くの初めには龍樹の妙釋を披くことを喜び、卷を開くの後には馬鳴の眞宗を穢すを恨む」と云はれた、即ち此の論は龍樹の眞撰にあらず、愚人菩薩の名を假りて作れるものと云ふのである。傳説もこよ

り信用することは出来ないが、之を論の本文に就て檢し、他の智度論、十住毘婆沙論等と比較するに、とても龍樹の眞撰とは思はれない、恐らく僞作と云ふのが事實であらう。

支那に於て起信論の疏を作りたるもの現存して居るものでは、譯者眞諦二藏の弟子智愷(又は慧愷)の起信論一心二門大意一卷、隋の禪定寺曇遷(或は曇延の作とも云ふ)の起信論義疏二卷(但し下巻缺)、隋の淨影寺慧遠の起信論義疏四卷、新羅の元曉の起信論疏記六卷、別記一卷、唐朝華嚴宗の賢首大師法藏の起信論義記七卷、別記一卷等が其の主なるもので、慧遠、元曉、賢首の作をば、起信論の三疏と稱して居る。就中賢首の義記が其の白眉でありて、爾來幾多の起信論疏が續出して居るが、皆悉く賢首の義記を註釋し布演したるものと言つていゝほごである。かくて起信論は全く華嚴宗の聖典となり、清凉、圭峰の二師は、之によりて華嚴と禪とを融會し、唐宋の禪風爲に一變した。又宋代の天台宗に山家山外と云ふ教義上の大變革を來したるも、全く此の起信論の影響

を受けたものである、起信論一卷、其の量より云へば寔に片々たる小冊子なり
と雖、凡そ此の論傳譯以來の支那佛敎界に、其の影響を蒙らざるものはない、
即ち大乘一乘宗の中心思想となりて居るものである。

實叉難陀の新譯には、明の藕益大師智旭の起信論裂網疏六卷があるばかりで、
其他和漢諸師の幾多の註釋書は、皆眞諦の舊譯を釋したものである。

九 般舟三昧經

(一) 傳譯及び梗概

般舟三昧經 Pratyutpanna-buddhasammukhāvasthita-samādhi 略して般舟經云ふ、
現存せるもの左の四譯あり。

佛說般舟三昧經一卷

後漢の支婁迦讖 Lokarakṣa 譯

般舟三昧經三卷

同 上

大方等大集經賢護分五卷

隋の闍那崛多 Jñānagupta 譯

拔陂菩薩經一卷

僧祐錄云安公古典是般舟三昧經初異譯。

般舟三昧 Pratyutpanna-samādhi は現前三昧、佛立三昧など、譯す、定中現前に
諸佛立ちたまうが故に此の名あり。此の定は、七日又は九十日を限り、心に阿
彌陀佛を想念し、口に阿彌陀佛の名號を唱へて、常に行道する定なるが故に、
亦常行三昧とも名づく、かくて現前に諸佛の立ちたまうを拜することを得るの
である。即ち此の經は毘陀和(羅)菩薩 Bhadrāpāla (賢護と譯す)等の爲に、般舟三
昧の行法、功德等を説かれたものである。

(四) 善導大師の御引用

善導大師の般舟讚、觀念法門は、觀無量壽經及び此の般舟三昧經に依り、法
事讚及び法照禪師の五會法事讚も、阿彌陀經や此の般舟經に依りて作られたも
ので、其の外、苟くも阿彌陀佛の念佛三昧を明すに就ては、此の般舟三昧經を
引用せざるものなしと言つてい、ほごである。善導大師の觀念法門四紙左りか
ら七紙左りにかけて、般舟三昧經の請問品(現存の經文には問事品)及び行品
の文が、長々引用せられてある。請問品が經の最初で、佛毘陀和菩薩の請問

に對し、三昧の名を説き示されてある。

佛魔陀和に告げたまわく、三昧あり、十方諸佛悉在前立と名づく、能く是れを行なへ、汝の問ふところ、悉く得べきなり。

かくて次に其の行法を説き示されたのが、第二の行品である。

佛魔陀和菩薩に告げたまはく、疾やかに是の定を得んご欲は、常に大信を立て、法の如く之を行ぜよ、則ち得べきなり、疑想毛髮ばかりもあること勿れ(中略)それ比丘、比丘尼、優婆塞優婆夷ありて、法の如く行じ、持戒完具し獨り一處に止まりて、西方阿彌陀佛今現に彼に在すご念ぜよ(中略)此の間の國土に於て阿彌陀佛を念すれば、專念の故に之を見たてまつることを得ん。即ち問へ、何の法を持てか此の國に生る、ごことを得んご。阿彌陀佛報へて言はん、來生せんご欲は、我が名を念すべし、休息あるごことなくんば則ち來り生る、ごことを得んご。佛の言はく、專念の故に往生を得るなり。(下略)

此の文は道綽禪師の安樂集(下卷四紙右)にも引かれてある。即ち般舟三昧ごは、心に阿彌陀佛を專念し、口に阿彌陀佛の御名を唱へて、常に休息せざる定である。而して此の定を修すれば、現前に諸佛を拜し、當來には西方安樂世界に往生するごことを得るのである。

(ハ) 口傳鈔の引用

口傳鈔の開出三身章に、楞伽經の「十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報身、化身及變化、皆從無量壽、極樂界中出」の文(前章參照)を引き、其の次に「また般舟經にのたまはく」ごして

三世諸佛 念彌陀三昧 成等正覺

ご云ふ文が引かれてある、けれども、此のやうな文は、現存の經中には見當らないやうである。蓋し彌陀佛を念じ、彌陀佛の名を唱ふるごころの般舟三昧を修すれば、十方諸佛悉く現前に立ちあらわれたまうごいふのであるから、此の三昧は獨り彌陀佛のみの三昧ではなく、十方諸佛皆悉く此の三昧中にましま

すのである。して見れば、十方三世の諸如來は、皆此の彌陀三昧を修して成道なされしものであらねばならぬから、今の如き文として、引用せられたものであらう。

高祖の本典化土卷末の初め及び蓮師の御文章に引かれてある「優婆夷聞是三昧、欲レ學者、乃至、自歸ニ命佛、歸ニ命法、歸ニ命比丘僧、不レ得レ事ニ餘道、不レ得レ拜ニ於天、不レ得レ祠ニ鬼神、不レ得レ視ニ吉良日、已上」こいふ文は、般舟三昧經四輩品第五の文である。

以上の諸文は、皆現存の四本の中では、共に一卷本の佛說般舟三昧經の文である。

十大集經

(一) 其の編製

大集經六十卷は、左の六經を大集したものである。

大方等大集經 Mahāvaiṣṭya-mahāsannipāta-sūtra.

三十卷

北凉曇無讖 Dharmarakṣa

譯

無盡意菩薩經 Akṣharamati-nirdeśa-sūtra

六卷

宋智嚴、寶雲

共譯

大乘大方等日藏經 Mahāvāyama-mahāvaiṣṭya-sūryagarbha-sūtra

十卷

隋那連提耶舍 Narendrayasas

譯

大方等大集月藏經 Mahāvaiṣṭya-mahāsannipāta-kandragarbha-sūtra

十卷

同上

譯

大乘大集經須彌藏分(大集須彌藏經 Mahāsannipāta-sumarugarbha-sūtra) 二卷

同上

譯

佛說明度五十校計經 二卷 後漢安世高

譯

以上の六經を大集して六十卷の一經とし、左の如く編輯してある。

一、瓔珞品 卷一

二、陀羅尼品 卷一—卷四

諸經論大意

七十七

- 三、寶女品 卷五—卷六
- 四、不响品 卷七
- 五、海慧品 卷八—卷十一
- 六、無言品 卷十二
- 七、不可說品 卷十三
- 八、虛空藏品 卷十四—卷十八
- 九、寶幢分 卷十九—卷二十一
- 十、虛空目分 卷二十二—卷二十四
- 十一、寶髻菩薩品 卷二十五—卷二十六以上大方等大集經
- 十二、無盡意菩薩品 卷二十七—卷三十無盡意菩薩經
- 十三、日密分 卷三十一—卷三十三大方集經の日密分—曇無讖譯
- 日藏分 卷三十四—卷四十五大方等日藏經
- 十四、月藏分 卷四十六—卷五十六大方等大集月藏經

- 十五、須彌藏分 卷五十七—卷五十八大方集經須彌藏分
- 十六、十方菩薩品 卷五十九—卷六十一佛說明度五十校計經

以上は高麗版大藏經の大集經六十卷の内容であるが、之は隋朝の原本に就て、曇無讖譯の大方等大集經三十卷の外、更に無盡意經及び日藏經、月藏經、須彌藏經、明度五十校計經等を合して、六十卷を成したものであるこの事である。大集經の編次に就ては、昔から異論のありたもので、今其の大要を記すれば最初梁の僧祐の出三藏記集卷九に大集經の編次を次のやうに記してある。祐舊錄を尋ぬるに、大集經は是れ晋の安帝の世、天竺の沙門曇摩讖、西涼州に於て譯出す、二十九卷あり、首尾十二段の説あり、共に一經を成す、第一瓔珞品、第二陀羅尼自在王、第三寶女、第四不响、第五海慧、第六無言、第七不可說、第八虛空藏、第九寶幢、第十虛空目、第十一寶髻、第十二無盡意、更に異人の別譯を見ず云云。

之を智昇の開元錄卷十一に引て「今經本を檢するに、祐記と同じからず」とて

詳細に其の編次を論じてある。中に就て其の主要なる點は「然るに僧祐記中、日密分なくして無盡意品あるもの然らず、今以るに、無盡意經は是れ大集の別分なりと雖、曇摩讖の譯にあらず、又次第に非ず、中に入るべからず」と云ふところに在る、乃ち無盡意經を除き、日密分を第十一分とし、次に月藏經を第十二分、十輪經を第十三分、第十四分は經本傳はらず、須彌藏經を第十五分、虚空孕經を第十六分と爲すべしと云ふてある。

日密分及び日藏分は同本の異譯で、經の初に日密分の方には「爲諸大衆說」虚空目出息入息甘露門已」とあり、日藏分には「爲諸大衆說」虚空目安那波那甘露法門四無量已」とあり、即ち虚空目分を説き已りて今此の日藏分を説くといふのであるから、虚空目分の次に日藏分と次第せねばならぬのであるが、經には其の間に寶髻品がある。次に月藏分の初には「說日藏經已」の文があるから、日藏分の次が月藏分で、又十輪經の初には「說月藏經已」の文があるから、月藏の次は十輪經でなければならぬ。又須彌藏經の初には「大乘大集經須

彌藏分第十五」とあり、虚空孕經の初には「授功德天記別訖已」の文がある。須彌藏經は功德天の間によりて説かれた經であるから、須彌藏經を第十五分、虚空孕經を第十六分と爲すべしと云ふが、智昇の意見である。更に復彼は隋朝の僧就が大集經に合するに明度五十校計經を以てし、題して十方菩薩品と爲し、月藏の後に編したるをも非なりとし、憑准なきが故に彼れに依らずと云ふてある、かくて彼は若し合せんと欲せば虚空孕經の次に念佛三昧經、次に賢護分、次に譬喻王經とし、最後に無盡意經と編次する、亦將に契へりせんかと云ふてある。

今麗藏に於ける六十卷の大集經は、智昇が以て非なりと爲せる梁の僧祐の三藏記集や、隋の僧就の合集せる大集經を憑准として、編製したもの、やうである。此の六十卷の梗概を次項に紹介しやう。

(口) 六十卷の梗概

世尊成道十六年、大乘法藏を宣説して諸佛の深境界を知らしめんと欲したま

ひ、欲界色界の中間に七寶の大坊庭を化作せられた。時に諸天龍鬼神、并に十方佛刹の諸菩薩衆、悉く來りて大雲集した。佛爲に菩薩の種々の莊嚴光明、及び衆生の惡業を破る如來の大悲行相、如來の眞實智慧等の法門を説かれた。(第一卷―第四卷) 瓔珞品、陀羅尼品(第五卷―第六卷)には實語義語、十力四無畏、十八不共法、三十七菩提分、三十二相の業因、三十二の障大乘法、三十二の速成就大乘法等を説き、不昫菩薩品(第七卷)には一切法自在三昧、海慧菩薩品(第八卷―第十一卷)には淨印三昧及び攝取大乘法、障礙大乘法、破魔法、調伏波旬法等を説きたまふ。次に無言菩薩品(第十二卷)には、王舍城に一童子あり、生れて啼泣せず、八歳に至るも言はず、時に佛の威神力によりて、其の父母親族と共に佛所に詣り、大神通を現じて偈を以て佛を讚嘆したてまつる。かくて諸の聖衆と法要を問答したる事が説かれてある。次に不可説品(第十三卷)には、菩薩あり其の名を不可説と云ふ。佛所に來りて大事を請問す、佛爲に無差別法界中の差別法、無出の出、不説の説、不可思議の六波羅蜜多等の

法門を説き示された。次の虚空藏品(第十四卷―第十八卷)には、虚空藏菩薩の功德神通、智慧方便、行願等の一切法、虚空と等しき微妙の法門を説き、次に寶幢分(第十九卷―第二十一卷)には、魔衆來りて馬星比丘の修行を擾亂せんとして能はず、魔又其の力を盡して佛を害せんとするや、舍利弗、目連、富樓那、須菩提等、各々五百の魔子を調伏し、佛蓮華を現じて偈を説きたまふ、魔詐りて歸依し、七たび脱走せんとして遂ぐる能はず、終に至心に聽法する様になり、かくて諸魔天神各々佛を供養し、諸菩薩大願力を以て鬼畜の身を現じ、以て鬼畜を調伏する等の事が説かれてある。次の虚空目分(第二十二卷―第二十四卷)には、佛他方諸佛國より來集せる諸菩薩衆の爲に、四眞諦、八忍八智、四念處、三解脱、四禪四定、十二因縁、四無量心等の法を説き、諸菩薩或は天像、鬼修羅、八部鳥獸等の像と爲り、衆生を教化する等の事が説かれてある。次の寶髻菩薩品(第二十五卷―第二十六卷)には、佛寶髻菩薩の爲に、四事法所行清淨(一、行度無極、二、遵修諸佛道品、三、具足神通、四、開化衆生)、六度、三十七

品、五通、及び菩薩の生死を厭はざる二十事を説き、佛及び寶髻、彌勒等の往昔の因縁を説き給ふ。時に寶髻、其の髻中の明珠を佛に奉じて發願す、佛爲に當來成佛の記別を授けられた。次の無盡意菩薩品(第二十七卷—第三十卷)には、無盡意菩薩舍利弗の問に對して、初發心、六度、四無量心、六通、四無礙智、四攝、四依、三十七助道法等を説き、之等の法門は一一皆無盡なり、之等の法門に能く一切佛法を包容す、是れ諸菩薩不退轉の法印なり、速に能く無上菩提を成就すべしと説いた。次の日密分(第三十一卷—第三十三卷)及び日藏分(第三十四卷—第四十五卷)は同本の異譯で、日密分は文略、日藏分稍々精しい、破戒受施の惡報から、法物を侵奪する者、惡果より、教法を護持する者の功德甚大なることを説き、又諸種の陀羅尼から二十八宿の事より、諸龍の爲に苦樂業報の因縁を説き、盲龍は淨眼を得、熱惱餓龍等皆安穩を得、佛天龍鬼神等に付囑して、國土衆生等を守護せしむる等の事が説かれてある。次の月藏分(第四十六卷—第五十六卷)には、佛月藏菩薩の爲に吉祥呪を説いて衆生を利益し、又諸菩

薩、一切龍天諸部大鬼神等の爲に、甚深の佛法を説き、世間を護らんが爲の故に、閻浮提諸國に於て、釋梵護世諸天一切龍神修羅夜叉鬼神等に付囑し、障を除き善を護り、法をして久しく住せしむる等の事が説かれてある。次の須彌藏分(第五十七卷—第五十八卷)には、功德天佛に修禪の本業を問ひ、地藏菩薩、須彌藏菩薩等、各々神呪を説く。最後の十方菩薩品(第五十九卷—第六十卷)には、菩薩の修行に就て、失行不失行等を校量し、甚だ詳かに説かれてある。

(八) 十輪經 その他

智昇が以て大集經の第十三分であるを爲せる十輪經には、左の二譯が現存して居る。

佛說大方廣十輪經 Mahāvaiṣṭya-sūtra spoken by Buddha on the ten wheels (of the Bodhisattva Kṣitigarbha) 八卷

北涼失譯

大乘大集地藏十輪經 Mahāvāna-mahāsannipāta-kṣitigarbha-dasakakra-sūtra 十卷

唐

玄奘譯

經の初に「説三月藏已」の文があるで、此經を大集經月藏分第十二の次に編し、以て大集經の第十三分を爲すべしと云ふが、智昇の意見であることは、前に云ふ通りである。一經八品より成りて、世尊無垢生天帝釋の爲に、地藏菩薩は已に無量無數大劫の間、五濁惡時無佛世界に於て有情を成熟し、不可思議の殊勝功德を具足せられ、又十方諸佛國土に於て、一切有情を利益し、一切の煩惱憂苦を除き、一切の所求所願を満足せしめられた。若し人あり一食の間、此の地藏菩薩に歸依し、供養したてまつれば、一切の所願速に満足することを得て、百劫の間他の諸大菩薩に歸依し供養したてまつるよりも、其の功德が勝りて居ると説かれてある。

それから第十四分は缺本で、須彌藏經を第十五分、虚空孕經を第十六分とすべしと云ふ智昇の意見である。中に就て、須彌藏經は六十卷の中の五十七、五十八兩卷に編入してある。其の虚空孕經には、次の諸譯がある。

虚空藏菩薩經 Akāṣagarbha-bodhisattva-sūtra 1卷

姚秦

佛陀耶舍 Buddhagāsa 譯

虚空孕菩薩經(三)

隋

上(一)卷 闍那崛多 Gñānagupta 譯

虚空藏菩薩神呪經 Akāṣagarbha-bodhisattva-dhāraṇī-sūtra 1卷

宋

曇摩蜜多 Dharmamitra 譯

虚空孕經の初に「世尊授功德天記蒞訖訖」の文がある、功德天は須彌藏經の對告衆であるから、須彌藏分第十五の次に、此の虚空藏經を第十六分とすべしと云ふが、智昇の意見なることは、前に云ふ通りである。一經の大意は、世尊虚空藏菩薩の神力を讚説し、其の頂上の妙珠の功德、能く國王、大臣、聲聞、菩薩等の本罪を除き、亦衆生の一切の所求を満足せしむることを説かれたものである。同じく宋の曇摩蜜多の譯に

觀虚空藏菩薩經 Akāṣagarbha-bodhisattva-bhṛyāna-sūtra (?)

諸經論大意

ご云ふ一卷の經がある、王古の法寶標目などには、前の三譯と同じく虚空藏經の異譯なりご云ふてある。尤も同じ虚空藏菩薩の功德を説いたものではあるが、前の三譯とは、よほご其の説相を異にして居る、蓋しこれは別本であらう。一經の大意は、罪を治せんご欲せは如何が觀すべきご云ふ優波離の問に對し、世尊爲に先づ規定の戒律を持ちて三十五佛を敬禮すべきごを教へ、次に虚空藏菩薩の頂上にある如意珠を觀じ、若し此の珠を見て、天冠中に三十五佛現はれ、珠中に十方佛現はるゝを見、或は除罪字の印を得、或は空中に罪滅ご唱ふるを聞かば、便ち僧中に入るごが出来。又疾病の平癒を禱る者、或は夢に藥を得、或は像を見るごあれば、疾病即ち癒ゆへし等の事を説かれたものである。

更に又智昇は、大に合集せんご欲せば、虚空孕經の次に念佛三昧經、次に賢護分、次に譬喩王經とし、最後に無盡意經とするも可なるべしご云ふてある。念佛三昧經には左の二譯がある。

菩薩念佛三昧經 Bodhisattva-buddhānusmṛti-samādhi 五卷

宋

功德直

譯

大方等大集經菩薩念佛三昧分 Mahāvaiṣṭya-mahāsannipāta-bodhisattva-buddhānusmṛti-samādhi 十卷

隋

達磨笈多 Dharmagupta 譯

一經の大意は、菩薩の念佛三昧には、法の去來生滅等を見ざるごを説いたもので、大弟子目蓮迦葉等、神通を現じて大師子吼して居る。

次に賢護分は、具に大方等大集經賢護分ご云ふ、五卷あり、般舟三昧經の異譯で、前章『般舟三昧經』に、其の大意を記してある。

次に譬喩王經は、具に大集譬喩王經 Mahāsannipāta-vadānarāga-sūtra (?) 二卷あり、隋の闍那崛多の譯で、世尊舍利弗の問に對して、聲聞智、獨覺智は一滴水の如く、佛智菩薩智は大海水の如し等ご、種々の譬喩を以て廣説したまひ、善友に親近し、菩提心を發すべきごを勧められた御經である。最後に編

入すべしと云ふ無盡意經は、六十卷の大集經卷二十七—三十に收めてある。
大集經諸品の別譯は數多あるが、今は大集經の編製に就て問題となりて居る
ところの御經を、以上の數部紹介するに止めて、其の他は略して置く。

(二) 五個の五百年

宗祖聖人は正像末和讃に「大集經にこきたまふ、この世は第五の五百年、鬪
諍堅固なるゆへに、白法隱滞したまへり」又「末法第五の五百年、この世の一切
有情の、如來の悲願を信ぜずば、出離その期はなかるべし」と仰せられてある。
これは道綽禪師の安樂集に依らせられたもので、即ち彼の第一大門(初紙左)に
「教興の所由を明し時に約し機に被ふらしめ勸めて淨土に歸せしむ」として、大
集月藏經の五個の五百年の説を引き「今の時(道綽禪師の時)の衆生を計かるに
即ち佛世を去りて後の第四の五百年に當れり、正に是れ懺悔修福し、佛の名號
を稱すべき時の者なり、若一念阿彌陀佛を稱するに即ち能く八十億劫の生死の
罪を除却せん、一念既に爾り、況んや常念を修するは、即ち是れ恒に懺悔する

人なり」と御勸めくたされてある。所謂五個の五百年とは、大方等大集經月藏
分の分布闡淨提品(大方等大集經卷五十五—三百四紙)に次の様に説かれてある。

爾時世尊、月藏菩薩摩訶薩に告げて言く、了知せる清淨土、若し我れ世に住
せば諸の聲聞衆、戒具足し、捨具足し、聞具足し、定具足し、慧具足し、解
脱具足し、解脫知見具足し、我が正法熾然として世に在り、乃至一切諸天人等、
亦能く平等の正法を顯現せん、我が滅後五百年中に於て、諸の比丘等猶ほ我
が法に於て解脫堅固ならん。次の五百年には、我が正法禪定三昧堅固に住す
ることを得ん。次の五百年には讀誦多聞堅固に住することを得ん。次の五百
年には、我が法中に於て多く塔寺を造り、堅固に住することを得ん。次の五
百年には、我が法中に於て、鬪諍言訟し、白法隱没して、損減すること堅固
ならん。了知せよ清淨土、是より以後我が法中に於て、復鬚髮を剃除し身に
袈裟を著すも雖、禁戒を毀破し、行ひ如法ならざるも假りに比丘と名づく。
是の如き破戒名字の比丘も、若し檀越あれば捨施供養し、護持養育せん、我

れ説く是の人は猶ほ無量阿僧祇の大福德聚を得。何を以ての故に、猶ほ能く多くの衆生を饒益するが故に、何に況んや我れ今現に世に在るをや。譬へば眞金を無價の寶と爲すが如し、若し眞金なくんば銀を無價と爲す、若し銀なくんば鍮石無價なり、若し鍮石なくんば僞寶無價なり、若し僞寶なくんば赤白銅鐵、白銀鉛錫を無價の寶と爲す、是の如く一切世間中佛寶無上なり、若し佛寶なくんば縁覺無上なり、若し縁覺なくんば羅漢無上なり、若し羅漢なくんば諸餘の聖衆、以て無上と爲す、若し聖衆なくんば得定の凡夫、以て無上と爲す、若し得定なくんば淨持戒者、以て無上と爲す、若し淨戒なくんば汗戒の比丘、以て無上と爲す、若し汗戒なくんば鬚髮を剃除し身に袈裟を著けたる名字の比丘を無上の寶と爲す、餘の九十五種の異道に比するに最尊第一なり、應に世供を受け物の福田と爲るべし、何を以ての故に、能く衆生に怖畏すべきことを示すが故に、若し護持し養育し安置するものあらば、是の人は久しからずして忍地に住することを得ん。

以上經説の意は品題の示すが如く、教法を閻浮提に分布するに就て、滅後の變遷を豫言せられたもので、第五の五百年即ち滅後二千年以後になれば、道俗俱に鬪諍を事として我が法は隱没せん、此の時に當りて我が弟子中、戒を持つものなく威儀を修むるものなく、唯鬚髮を剃除し身に袈裟を着けたる名ばかりの比丘のみならん、是の如き無戒名字の比丘、能くその門信徒を教化して、我が法を永久に傳ふべきが故に、之を世間最尊第一の者と爲すに仰せられたものである、籍を佛門に懸けたるものは、深く此の懇切なる聖誠を服膺するところがなくてはならぬ、道綽釋師及び宗祖聖人は、此の經説を體せられて、末法の今の時、彌陀の本願によらずしては、他に出離解脱の道あるべからずと御勸めくだされたものである。

(ホ) 四種法度生

道綽釋師の安樂集第一大門に、前節に記せし「五個の五百年」の文を引用せられたる次に、又彼經云とて。

諸佛の世に出でたまうや、四種の法ありて衆生を度す、何等をか四ご爲す、
 一には口に十二部經を説く、即ち是れ法施をもて衆生を度するなり、二に
 は諸佛如來無量の光明相好あり、一切衆生但能く心を繋けて觀察すれば、益
 を獲ざるごごなし、是れ即ち身業をもて衆生を度するなり、三には無量の
 徳用、神通、道力、種々の變化あり、即ち是れ神通力をもて衆生を度する
 なり、四には諸佛如來無量の名號あり、若し總、若し別、それ衆生ありて、
 心を繋けて稱念すれば、障を除き益を獲て、皆佛前に生ぜざるなし、即ち
 是れ名號をもて衆生を度するなり。

ご云ふ文を引かれて、今の時は佛滅後第四の五百年に相當し、四種の法の中で
 は、佛の名號を稱すべき時であるから、須らく彌陀の名號を稱へて、永劫の苦
 困を除くべしご御勸めくだされてある、ごころが此の四種法度生の文が大集經
 には見當らないご云ふので、古來の學者、頗る頭を悩まして、或は迦才の淨土論
 下卷に引ひてある正法念經のごごではなからふかご云ひ、或は大集經中某々の

文の取意であらうご云ふて居る人もある、源信僧都の往生要集下本にも、安樂
 集所引をそのまゝ承けて、大集經云として今の文が引かれてあるから、之はや
 はり大集經の文を取意せられたものご見るべきであらう、大集經の中には、四
 種法ご云ふごごも種々説かれてあるが、先づ初の方では陀羅尼自在王菩薩品（
 大集經卷一―卅藏六の六一―八紙右）に曰く

佛の言はく、善男子よ、菩薩には四の瓔珞莊嚴あり、一には戒瓔珞莊嚴、
 二には三昧瓔珞莊嚴、三には智慧瓔珞莊嚴、四には陀羅尼瓔珞莊嚴なり等
 ご、かくて更らに四種一に就て細説せられてある、前三戒定慧は之れ身口意
 の三業行にして、名號度生は之れ陀羅尼（總持ご譯す）の徳なるが故に、此の
 四瓔珞莊嚴の文を取意せられたりご見るも、強ち無理ではないやうである、又
 海惠菩薩品（大集經卷九―卅藏六の六一―五十四紙左）には、衆生を攝するに就
 いて種々の四事を説ける中に、福をもて衆生を攝するに亦四事ありごて。
 一には身を莊嚴す、三十二相八十種好なり、二には口を禁嚴す、凡そ演説

するところ衆生樂んで聞く、三には佛土を莊嚴す、四には種姓を莊嚴す、所謂釋梵轉輪聖王なり。

等と説かれてある、此の中前の二は全く今の所引に相當して居る、以上僅に一二文を照合せるに過ぎないが、かくの如く種々の四事が説かれてあるから、それ等の中より取意して、五個の五百年の文と連引し、以て末法の今の時、彌陀名號の一法以外には、出離解脱の道あるべからざることを明されたものである。

(へ) 説聽の方軌

安樂集第一大門第二に、諸部の大乘に據りて説聽の方軌を明すとして、第一に大集經の文が引かれてある。

大集經に云く、説法の者に於ては醫王の想を作せ、拔苦の想を作せ、所説の法をば甘露の想を作せ、醍醐の想を作せ、其の聽法の者をば增長勝解の想を作せ、愈病の想を作せ、若し能く是の如き説者聽者は、皆佛敎を紹隆するに堪へたり、常に佛前に生ぜん。

之れ亦取意の文で、本文は大集經卷十一海慧菩薩品 (正藏六の六一六十七紙左) に出て居る次の様な文である。

若し法師ありて是の如き等の咒を受持し讚誦し、師子座に昇りて専ら諸佛を念じ、慈衆生に及び、自ら己が身に於て醫師の想を生じ、所説の法に於て良藥の想を生じ、聽法者に於て疾苦の想を生じ、如來の所に於て善友の想を生じ、正法の中に於て常恒の想を生ぜん、若し能く是の如く正法を説く時、其の處の四邊各々一由旬、魔到ることを能はず。

經文の上は、五想共に説法者の想であるが、安樂集には前三想を取意して、説者聽者相互の用心とし、以て警告せられたものである。

(ト) 未有一人得者

安樂集第三大門に、聖道淨土の二門を判釋し、聖道門の修行成就し難き立證として大集月藏經の文を次の様に引き。

我が末法の時の中の億億の衆生、行を起し道を修せんに、未だ一人として

得る者あらず。

此の經說によれば、「當今は末法にして現に是れ五獨惡世なり、唯淨土の一門のみありて、通入すべき路なり」とて、往生淨土の、彌陀念佛の一門に歸入すべきことを勧められてある、所謂「我が末法の時の中の億億の衆生」云云は、全く彼の「五個の五百年」の文を取意し、略して其の要領のみを擧げられたものである、即ち五個の中の前三は正法及び像法の時期で、戒定慧の三學も猶堅固に行はれるが、第四、第五の末法の時期に入りては、徒らに寺塔を造營し、鬪諍を事として、如法に修行するものごては一人もないと云ふ佛の御誡めである、それ故に今の様に取意して要領のみを引き、以て淨土一門のみ今時通入すべく開かれたることを教へられたるものである、高祖聖人は化土卷の本に兩所（十四紙左及び三十五紙右）此の文が引かれてあるが、後の所には五箇の五百年の文と此の取意の文とを同所に引かれてある、又以て兩文が廣略の關係なることを知るべきである。

(チ) 高祖の御引用

高祖聖人化土卷の末に「夫れ諸の修多羅に據りて、眞偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡せば」とて、涅槃經、般舟經、大集經、華嚴經、楞嚴經、灌頂經、十輻經、福德三昧經、藥師經、菩薩戒經、佛本行集教等の十一經の文が御引用にありてある、就中大集經をば、日藏經より三文、月藏經より七文、總て十文を長々と御引用になりてある。

其の第一は日藏分星宿品（大集經卷四十二―出藏六の八一―二百四十二紙右より卷末まで）の文で、文の始終は、初めに日月星宿を布置して諸の衆生を安穩ならしむることを説き、又四天王を、須彌の四方面に置き、亦諸の鬼神を置き、一切洲諸城邑を守護せしむることを説く、之れ即ち日月星宿、諸天鬼神、皆悉く佛に歸依して行者を守護するものである、然るを何ぞ佛に歸命せずして諸天鬼神に歸依するやと誡しめたまふが、御引用の御趣意である。

第二は日藏分念佛三昧品（大集經卷四十三―出藏六の八一―二百四十四紙左）

の文で、一の魔女あり離暗と云ふ、過去世に於て衆の徳本を植へ、今また佛に歸依して、深く念佛三昧の法を信じ、若し衆生ありて佛名を聞くこと得、一心に歸依すれば、一切諸魔、彼の衆生に於て悪を加ふること能はず、何に況んや佛を見、親しく法を聞くをやとて、宮中の五百の魔女、姉妹眷屬等をして、皆菩提の心を發さしめた、時に魔王は、宮中五百の魔女の發心を見て、大忿恚を起したが、魔女離暗及び五百の魔女等は、佛の説法を聞て皆念佛三昧を得、悉く本形を捨て男子の身を得たこと説かれてある、かくの如く佛に歸すれば一切衆魔害を加ふること能はず、然るを何ぞ佛に背きて邪魔に事へんやと云ふが、御引用の御趣意である。

第三は日藏分護塔品(大集經卷四十五―日藏六の八一―二百五十五紙右)の文で、魔波旬其の眷屬八十億衆のために、前後を圍繞せられて佛所に到り、接足作禮して次の如き偈を説く。

三世諸佛大慈悲

受我禮懺一切殃

法僧二寶亦腹然

至心歸依無有異

願我今日所供養

恭敬尊重世導師

諸惡永盡不復生

盡壽歸依如來法

即ち魔波旬一切の殃を三寶の前に懺悔發露して、壽盡くるまで如來の法に歸依したてまつらんご誓ふたのである、魔既に斯の如し、須らく餘道に事へずして佛法に歸せよご勸誡したまふが、御引用の御趣意である。

以上三文は日藏分より御引用になりましたものである、以下月藏分より御引用の七文を擧ぐべし。

第一は月藏分の諸惡鬼神得敬信品(大集經卷五十一―日藏六の八一―二百八十一紙左)の文で、諸の惡鬼神、佛の説法を聞て邪見を離れ、心性柔善にして伴侶賢良となり、業報を信じて諸惡を起さず、三寶を敬信して天神を信ぜず、正見を得て良日吉時を簡ばざる等の十徳を得、此の善根を回向して速やかに六彼羅蜜を満足し、善淨の佛土に於て正覺を成就す等ご説かれてある、以て捨邪歸正せよ

と誨へたまふが、御引用の御趣意である。

第二も亦同じく諸惡鬼神得敬信品（大集經卷五十一―卅藏六の八―二百八十六紙右）の文で、佛偈を以て説きたまはく、

佛出世甚難	法僧亦復難
衆生淨信難	離諸難亦難
哀愍衆生難	知足第一難
得聞正法難	能修第一難
得レ知難平等	於レ世常受樂
此十平等處	智者當速知

ご。かくて諸の惡鬼神等の中に於て、彼等は昔佛法に於て決定の信を依したれども、後の時惡知識に近づき、心に他人の過を見たり、是の因縁を以て惡鬼神に生るご説きたまうてある、前の第一文は正見によりて十徳を得、今此の文は惡知識に近づきて惡報を得たりごの經説である、邪正の得失經説分明なり、御

引用の御趣意、以て知るべきである。

第三には諸天王護持品（大集經卷五十一―卅藏六の八―二百八十七紙右の）全文が、長々ご御引用になりてある、一品の説相凡そ二段に分れて、初には空居諸天、帝釋四王、鬼神宿曜等、悉く歸佛の者を護持することを説き、次には過去佛法を諸天王等に付囑することを説き、今亦大梵天王に付囑すご説かれてある、御引用の御趣意は、諸天鬼神悉く歸佛の者を護持することを顯して、異邪道に迷ふべからざるごを諭されたものである。

第四は諸魔得敬信品（大集經卷五十二―卅藏六の八―二百九十紙右）の文で、百億の諸魔共に佛所に來り、佛足を頂禮して誓ふらく、世尊よ、我等當に大勇猛心を起し、佛の正法を護持養育し、三寶の種を熾然ならしめ、久しく世間に住せしめ、地の精氣、衆生の精氣、法の精氣をして、皆な悉く增長せしめん、若し聲聞弟子ありて、法に住し、法に順じ、三業相應して修行する者は、我等皆悉く護持養育して、一切の須ふるごころ、乏しきごころ無からしめん、一切

諸の悪衆生をば我等悉く遮障し、一切處に於て、あらゆる鬪諍、飢饉、疾疫、他方の怨敵、非時の風雨、氷寒、毒熱、蚊虻、蛇蠍、諸の蟲獸等、我等皆遮護して敬信を得しめん等と、現世利益和讃に

南無阿彌陀佛さなふれば

他化天の大魔王

釋迦牟尼佛のみまへにて

まもらんごこそちかひしか

ごあるも、此の經文に依られてたものである、諸魔佛前にて三寶を護持せんご誓ふ、何ぞ去りて邪道にこそあるごを得ん、御引用の御趣意拜戴すべきである。

第五は提頭頼吒(持國)天王護持品(大集經卷五十二―出藏六の八一―二百九十一紙右)の文で、佛日天子月天子に勅して、正法を護持せしめ、次に百億の四天王、佛勅を受けて佛法を護持するごが説かれてある、御引用中「乃至」せられて、

我今亦與ニ上首毗沙門天王ニ同心、護ニ持此闍浮提北方諸佛法

ご云ふ文が引かれてある。之れは此の品の次に毗樓勒叉(增長)天王品ご毗樓博叉(廣目)天王品ごの二品を隔て、其の次の毗沙門(多聞)天王品(大集經卷五十二―出藏六の八一―二百九十四紙左)の文であるが、以上四品に説かれたる四天王は、同心の佛法護持者であるから、中間の二品を乃至し、初後の二品を以て一連の文ごして御引用になりましたものである。

第六は忍辱品(大集經卷五十三―出藏六の八一―二百九十七紙右)の文で佛法を護持すれば無量の福報あり、破壊すれば墮獄の重罪を受くご説かれてある。

第七も亦忍辱品(同上―二百九十八紙左)の文で、諸天善神佛弟子を擁護し惡鬼神をして惱亂せざらしむるごが説かれてある。

以上大集經の中より、廣く十文を御引用になりました所詮は、異端邪說に迷ふごなく、直ちに佛法の正道に入るべきごを勸誡せられん爲であつて、所謂佛法の正道に入るごは、本願一實の大道に歸入するに在りご誨へられたものである。

十一 悲華經

(イ) 傳譯及び梗概

悲華經 Karunapundarika-sūtra には左の四譯ありて、一二二存して居る

閑居經一卷

西晉

竺法護 Dharmaraksā 譯

亡

大悲分陀利經八卷

秦

失譯

存

悲華經十卷

北涼

道龔

存

悲華經十卷

北涼

曇無讖 Dharmarakṣa 譯

存

大悲分陀利經は三十品になりて居り、悲華經は六品になりてある。一經の大意は、諸佛清淨の本願を以て佛土を莊嚴し、釋迦如來大悲を以て五濁惡世に出で成佛度生する等の事を説き、釋迦佛因地に身命を布施する等の種々の大悲行願、彌陀、觀音、勢至、文殊、普賢等の因地發願の相を説いて、此の經の乃至一偈でも書寫し讀誦する功德は、十大劫の間六波羅蜜を行じたる功德にも勝ると説かれてある。

(ロ) 高祖の御引用

悲華經卷二大施品から諸菩薩本授記品に亘りて、阿彌陀佛のことが説かれてある。恒河沙阿僧祇劫の往昔、刪提嵐世界に轉輪聖王あり、無諍念と云ふ、一人の大臣あり寶海と云ふ、梵志種なり、一子を生む、出家成道して寶藏如來と云ふ。時に王及び千子諸小王等、皆發心發願し出家修行す。寶藏如來即ち無諍念王に無量壽佛、第一太子に觀世音、第二王子に大勢至、第三王子に文殊、第四王子に普賢等、以下千子諸小王に各々記別を授けられた。中に就て無諍念王即ち無量壽佛因位發願の相が、殆ど無量壽經の四十八願と同じ様に説かれてある。それ故に吾祖師聖人は本典行卷に、悲華經大施品の二卷に言くとして、願くば我れ阿耨多羅三藐三菩提を成し已らんに、無量無邊阿僧祇の餘佛世界の所有の衆生、我が名を聞かん者、諸の善本を修して我が界に生れんと欲せんに、願くば其れ捨命の後、必定して生ずることを得しめん、唯五逆と聖人を誹謗せんご、正法を廢壞せんをば除かん

云ふ文が引かれてある。之れは四十八願中の第十七、第十八兩願に相當する文である。又化十卷の本にも悲華經の大施品に言ふことして

願くば我れ阿耨多羅三藐三菩提を成じ已らんに、其の餘の無量無邊阿僧祇の諸佛世界の所有の衆生、若し阿耨多羅三藐三菩提心を發し、諸の善根を修し、我界に生れんご欲はん者は、臨終の時、我れ當に大衆を圍繞して其の人の前に現すべし、其の人我れを見て、即ち我が前に於て心に歡喜を得ん、我れを見るを以ての故に諸の障關を離れて、即ち身を捨て我界に來生せん

云ふ文が引かれてある、之れは四十八願中の第十九願に相當する文である。以上二文ともに悲華經の諸菩薩本授記品に出て居るのを、祖師聖人が大施品に言ふことして引かれたのは、蓋し暗記の失であらうご古來から會通して居るが、前にも云ふ通り、大施品から授記品にかけて無量壽佛の因位無諍念王のここが説かれてあるから、其の初に就いて大施品に言ふことせられたものであらうごも

伺がはるゝのである。

十二 大般若經

(イ) 傳譯及び梗概

大般若波羅蜜多經 Mahāprajñāpāramitā sūtra 六百卷は、唐の玄奘新譯中最大部の經にして、又實に一切經中最大部の經典である。唐の顯慶五年正月翻譯に着手し龍朔三年十月に譯成した、前後四年を費して居る。此の經は天上人界四處に於ける十六會の説法でありて、第一會より第十會までに總じて般若の相を説き、第十一會より最後の第十六會に至る六會に、別して六波羅蜜多の相を分説せられてある。波羅蜜多 Paramitā は度又は到彼岸と譯す、此の生死の海を渡りて、涅槃の彼岸に到るの義である。此の行に六あり、稱して六波羅蜜多一六度と云ふのである。

一、檀那 Dana 布施

二、尸羅 Sila 戒(持戒)

- 三、 辱提 Ksanti 忍辱
- 四、 毗梨耶 Birya 精進
- 五、 禪那 Dhyanā 靜慮(定)
- 六、 般若 Prajna 智慧

六度の中では智慧(般若)が最勝第一である、若し智慧がなかつたならば、他の諸度のみでは彼岸に到ることが出来ないのである。般若を稱して諸佛の母と云ふも之れが爲め、又此の經を稱して大般若と云ふも之が爲めである。蓋し般若は六度の一ではあるが、他の五度をば未だ大と稱せず、惟此の般若を獨り大と稱するもの、乃ち是れ衆妙の淵府、群智の玄宗、萬法の本源、衆聖の圓極でありて、他の五度はた、輔佐となりて般若に隨伴するものなるからである。此の經十六會の説法に於て、始め十會に廣く般若を説き、終り六會に六度を別説して亦般若に結歸するもの、即ち諸度は般若より出で、般若に歸入し、かくて到彼岸の行となる旨を顯したものである。以下少しく十六會の梗概を記述しやう。

(口) 第壹會 自第壹卷 至第四百卷

佛王舍城 Dājāgrha 鷲峰山(靈鷲山)耆闍崛山 Grdhrakuta)に菩薩聲聞衆と俱に住したまひ、大光明を放ちて遍ねく三千大千世界及び十方恒河沙の諸佛世界を照らしたまう十方諸佛各々大菩薩衆を遣し、金蓮華を持ちて釋迦佛に奉ず。佛諸菩薩衆の爲に般若波羅蜜多を説く。第壹會四百卷七十九品の中には、一切法五蘊、十二處、十八界、十二緣生、三十七菩提分法、四靜慮、四無色、八解脫、八勝處、九次第定、十徧處、如來三身、四智、十力、四無畏、四無量心、六神通、十八不共法、三十二相、八十種好、之等一切の功德は皆六波羅蜜多より生ず、六波羅蜜多の中にては、般若波羅蜜多を最大、最勝、最第一と爲す、更に之に過ぐるものなし、餘の五波羅蜜多は皆此の般若波羅蜜多の中に攝入す、一切諸法は若し般若なくんば、名づけて、到彼岸と爲すことを得ずと説き、更に又一切法は空なり、所謂五蘊、十二處、十八界、有色無色、有見無見、有對無對、有漏無漏、有爲無爲の法皆空なり、不可得なり、少法の得べきものあることなし、何となれば、諸法は能

く和合して生じ、自性あることなし、即ち能和合の自性もなく、所和合の自性もなし、無自性の故に空不可得なり。是の故に、六波羅蜜、三解脱、十力、十八不共法、一切智、四果、二乗、十地、究竟涅槃も皆亦如幻如夢、空不可得なり、一切法と涅槃と無二無別なるが故に説いてある。かくの如く、妄想戲論を遠離して、一切諸法は空無相不可得なりと體達する、之を般若波羅蜜多と爲す、若し能く此の般若波羅蜜多を體得しぬれば、則ち一切諸佛の功德智慧、皆此の般若波羅蜜多より生じ、一切三乗の賢聖より乃至人天の富樂福德、亦此の般若波羅蜜多を離れず、一切世間出世間の諸功德善法は、若し般若の先導なくんば、人の眼なければ則ち往くところ無きが如くであるといひ、般若の功德たる斯くの如く廣大無邊なるが故に、若し人受持讀誦し、恭敬供養し、念を繋けて忘失せざれば、即ち是れ成佛の前相で、佛を去ること遠からず、是の如き人は、一切の魔怨外道惱亂すること能はず、一切の毒藥毒蛇惡獸敢て傷害せず、諸の惡鬼神皆遠離し、水火風災亦及ばず、若し人陣頭に立てば、刀箭中らず、戰鬪

には大勝を得、一切の災難滅せざるものなしといひてある。

(八) 第二會 自第四百七十八卷 至第四百七十八卷

此の會八十五品七十八卷あり、舊譯の小品般若、光讚般若、放光般若の異譯である。佛王舍城鷲峰山中に住し、舌大千を覆ひ、身巨億を分ち、普ねく六趣を利して十方を震動し、微塵の刹土不動にして悠遊し、恒沙の諸佛不謀にして證せしむ、般若の至徳に非ずんば焉んぞ能く斯の如きを得ん。凡そ般若の徳たるや、幻花の開落と同じく不生不滅なり、夢像の妍媸と等しく無染無淨なり等と明す、之れ斯の會の所詮である。

(三) 第三會 自第四百七十九卷 至第五百三十七卷

此の會五十九卷三十一品あり、佛王舍城鷲峰山中に住し、若し諸の菩薩、疾く一切智を證得せんご欲せば、應に般若波羅蜜多を學ぶべし、聲聞獨覺等の地を超へんご欲し、菩薩不退轉地に住せんご欲し、殊勝の六種神通を得んご欲し、一念隨喜の心を以て一切聲聞獨覺施戒定慧忍進を超過せんご欲し、一食一香一

華一燈一衣一蓋一幢一幡を以て十方沙界の如來を供養せんと欲し、六波羅蜜を満足せんと欲し、一切如來の殊勝功德を得んと欲せん、如上の無量無邊なる殊勝の功德を得んと欲せば、應に般若波羅蜜多を學ぶべし等と説かれてある。

(ホ) 第四會 自第五百三十八卷 至第五百五十五卷

此の會十八卷二十九品あり、舊譯の道行般若、小品般若、明度經等は此の會の異譯である。假名の般若を以て假名の菩薩に授け、恰も幻法を持って幻人に與ふるが如く、作もなく亦得もなきことを明して、假法の名相に貪着する一切凡夫の迷情を説破せられたるが、此の會の所詮である。

(ヘ) 第五會 自第五百五十六卷 至第五百六十五卷

此の會十卷二十四品あり、佛王舍城鷲峰山頂にて、若し諸の菩薩、但般若波羅蜜多を聞くも、尚ほ無邊の功德勝利を獲、況んや深く信解し、如説に修行せんをや、是の諸の菩薩は、一切智に近づき、眞如に安住し、疾く菩提を證せん。若し菩薩あり、聲聞法を説いて、三千大千世界の一切有情をして、悉く皆阿羅

漢果を證せしめん、獲るところの福聚甚だ多し、若し菩薩諸の有情の爲に般若を宣説すること、乃至一彈指の頃ならんに、獲るところの福聚甚だ前よりも多し等と説かれてある。

(ト) 第六會 自第五百六十六卷 至第五百七十三卷

此の會八卷十七品あり、佛鷲峰山に在す時、最勝天王請問すらく、云何が菩薩一法を修學して能く一切法に通達するや。佛爲に般若を修學すれば能く十波羅蜜に通達することを得る等の事を説きたまう。舊譯の勝天王般若は、此の會の異譯である。

以上第壹會より第六會に至る諸會は、總じて鷲峰山上の説法である。

(チ) 第七會 自第五百七十四卷 至第五百七十五卷

此の會は室羅攢城(舍衛 Sravasti)の祇樹給孤獨園(Jetavana-Anathapindada-Arāma)に於ける説法にして、曼殊室利分と云ふ、二卷あり、曼殊室利、舍利子と般若甚深の法門を問答す。舊譯の文殊般若は此の會の異譯である。

(リ) 第八會 第五百七十六卷

前會と同じく給孤獨園の説法にして、那伽室利分云ふ。龍吉祥菩薩、妙吉祥菩薩等と法要を問答す。佛頌を説いて言はく「如星翳燈幻、露泡夢電雲、於一切有爲、應作如是觀」云。舊譯の濡首菩薩分衛經は此の會の異譯である。

(又) 第九會 第五百七十七卷

此の會も亦給孤獨園の説法にして、能斷金剛分云ふ。菩薩は分別を以て煩惱を爲す、分別の煩惱は堅きこと金剛の如し、無分別の智慧乃ち能く此の煩惱を斷ずることを明す、之が此の會の所詮である、是れより先き玄奘三藏、能斷金剛般若波羅蜜多經として別譯したりしを、六百卷の大般若を譯するに當り、其のまゝ第九會に編入したものである。此の一會の經は、羅什三藏已來義淨三藏に至るまで、前後六回も翻譯せられ、亦泰西人の翻譯にかゝるものも尠からず、阿彌陀經、般若心經等と共に東方聖書第四十九卷大乘佛典の中に収録せられてある。又支那禪宗の第六祖慧能禪師は、此の經を聞て入道せりと傳へられ、

其の撰述なりと稱する解義及び直解の二書が傳はりてある。かう云ふことから此の經は非常に禪家に重んぜられて、經中の「應無所住、而生其心」と云ふ文や「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と説かれたる文の如きは、千古の名句として參禪者の間に賞翫せられて居る。

(ル) 第十會 第五百七十八卷

此の會は佛他化自在天王宮に住して、八百萬の大菩薩の爲に、一切功德甚深微妙の般若理趣清淨法門を説く、名づけて般若理趣分云ふ。乃ち之れ諸會の旨歸衆篇の興趣、一軸に能く具に諸分を該ねたるが故に、若し能く此の經文を咀嚼しその奥旨を體得すれば、則ち般若秘密藏を悟了するここが出来るのである。

(ヲ) 第十一會 第五百七十九卷

佛給孤獨園に在す時、再三舍利弗に勸めて、諸の菩薩の爲に布施波羅蜜多を説かしむ、乃ち此の會をば布施波羅蜜多分云ふ。舍利弗言く、若し菩薩無上菩提を證せんご欲せば、一切行中應に先づ施を行はずべし、是の如き念を作せ、我れ

十方界の一切有情に施し、永く悪趣生死を解脱せしめん、未だ無上菩提の心を發さざる者には速かに發心せしめん、已に發心せる者は永く不退ならしめん、已に退せざる者は速に一切智を圓滿せしめん、布施の善根を以て餘果を招くことなく、惟無上菩提を證し、能く未來際を盡して一切を利樂せんこと、是の如きを乃ち布施波羅蜜多と名づく。菩薩は一切法幻化の如しと知るが故に、布施を行ずる時、實に捨つべきなく、正覺を證る時、實に得るところなし、二人の幻師戲に交易を爲すが如し、此の中の二事俱に實有に非ず。かくて佛神力を以て、舍利弗及び大衆等をして、十方佛刹中諸菩薩の廣大布施、財施、法施、身命施等を見せしめ、大菩提を求むるには、當に是の如き施を行ずべしと説き聞かせられた。

(ワ) 第十二會

至第五百八十八卷
自第五百八十四卷

佛給孤獨園に在す時、舍利弗に命じて戒波羅蜜多を宣説せしむ、乃ち此の會をば淨戒波羅蜜多分と名く。滿慈子(富樓那)問ふ、云何が菩薩の持戒犯戒なること、

舍利子答ふ、若し二乗の作意に住すれば、是を菩薩の犯戒と名づく、菩薩は衆相を遠離して有法に非ず亦無法に非ず、所修の六度に隨つて皆大悲を首として隨順廻向一切智の心を發す、是を具戒の菩薩と名く等と云へり。

(カ) 第十三會

第五百八十九卷

佛給孤獨園に在す時、滿慈子(富樓那)に命じて忍波羅蜜多を説かしむ、乃ち此の會をば安忍波羅蜜多と名づく、舍利子問ふ、菩薩の忍と聲聞の忍との差別がある、滿慈子答ふ、聲聞は唯自身の煩惱を捨棄せんこと、名づけて少分安忍と爲す、菩薩は無量の有情を度せんこと欲す、名づけ具分安忍と爲す等と云へり。

(コ) 第十四會

第五百九十卷

佛給孤獨園に在す時、滿慈子(富樓那)、菩薩の勤波羅蜜多を問ふ、佛爲に、菩薩は初發心の時より、若しは身、若しは心、先づ他の爲に饒益の事を作んと志す等のことより、詳かに諸菩薩の懈怠及び精進の行相を説かれた。此の會をば乃ち精進波羅蜜多分と名づく。

(夕) 第十五會

自第五百九十一卷
至第五百九十二卷

佛鷲峰山に在す時、舍利子及び滿慈子、交るく菩薩の靜慮波羅蜜多を問ふ、佛爲に、菩薩は漸次四靜慮に入りて五通を引發し、降魔成道す、又四禪四定に入ることを現す雖も、而も味着せず、亦離染せず、一切法都て不可得なりと觀す雖も、而も一切智を棄捨せず等と説き示された。此の會をば乃ち靜慮波羅蜜多分と名づく。

(レ)

第十六會

自第五百九十三卷
卷至六百

佛竹林精舍(Venuvana)の白鷺池の側にて聲聞菩薩衆と俱に在しき、善勇猛菩薩請問すらく、云何なるか之れ般若なるを、佛爲に、實に少法の般若と名づくべき無し、如實に一切法の性を知りぬれば、實なく生なく、亦虚妄なし、菩提心の性あることを見ずして、而かも能く大菩提心を發起す、彼れ是くのごく菩提心を發するに雖も、而かも菩提に於いて引發するところ無し、若し能く遠く諸法の實性に達する、是れを微妙甚深の般若と謂ふ、實に不可説なりと説き、

今世俗の文句に隨つて方便して説かばさて、蘊處界、世間出世、有爲無爲、有漏無漏、一切の法は皆般若に非ず、別に般若あり、夢の如く、幻の如く、燄の如く、影の如く、響の如く、沫の如く、泡の如く、芭蕉の如く、虚空の如く、影光の如く、寶光の如く、燈光の如くにして、圓成實に非ず等と説かれた。此の會を般若波羅蜜多分と云ふ。

以上此の般若波羅蜜多甚深の法門に於て、若し能く一句をも受持する者は、尙無量無邊の功德を獲、況んや此の大般若經を能く具に受持し、轉讀し、書寫し、供養し、流布して廣く他の爲に説かば、彼の獲るところの福德は實に不可思議なりと説かれてある。此の法を説く時、無量無邊の菩薩は無生法忍を得、無邊の諸有情類は皆無上正等覺の心を發した。時に佛彼等に決定して當に無上菩提を證すべしと云ふ記別を授けられた。

以上は支那譯六百卷の大般若であるが、此の外二樂莊には、蒙古譯の大般若と云ふ珍本を藏して居られる。

(7) 諸譯般若經

(1) 放光般若波羅蜜經二十卷

(2) 摩訶般若波羅蜜經二十七卷

(3) 光讚般若波羅蜜經十卷

以上三部は般若經第二會の異譯である。

(4) 道行般若波羅蜜經十卷

(5) 摩訶般若波羅蜜經十卷

(6) 佛母出生三法藏般若波羅蜜多經廿五卷

(7) 佛母寶德藏般若波羅蜜經三卷

(8) 大明度經六卷

(9) 摩訶般若波羅蜜鈔經五卷

以上六部は般若經第四會の異譯である。

(10) 勝天王般若波羅蜜經七卷

西晋 無羅叉譯
後秦 鳩摩羅什譯
西晋 竺法護譯

後漢 支婁迦讖譯
後秦 鳩摩羅什譯

宋 施護譯

宋 法賢譯

吳 支謙譯

前秦 曇摩婢共譯

陳 月婆首那譯

右一部は般若經第六會の異譯である。

(11) 文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經二卷

(12) 文殊師利所說般若波羅蜜經一卷

右二部は般若經第七會の異譯である。

(13) 濡首菩薩無上清淨分衛經二卷

右一部は般若經第八會の異譯である。

(14) 金剛般若波羅蜜經一卷

(15) 金剛般若波羅蜜經一卷

(16) 金剛般若波羅蜜經一卷

(17) 金剛能斷般若波羅蜜經一卷

(18) 能斷金剛般若波羅蜜多經一卷

(19) 能斷金剛般若波羅蜜多經一卷

以上六部は般若經第九會の異譯である。中に就て玄奘譯の能斷金剛般若波羅

梁 曼陀羅仙譯
梁 僧伽波羅譯
宋 翔公譯

後秦 鳩摩羅什譯
後魏 菩提流支譯

陳 眞諦譯
隋 達磨笈多譯

唐 義淨譯
唐 玄奘譯

蜜多經一卷は、彼の六百卷の大般若經を譯出する已前の翻譯でありて、仍ち彼の第九會は、此の經を編入したものである。又此の經は支那譯に以上の如き六譯あるのみならず、泰西人の翻譯にかゝるものもあり、而して特に禪宗に重用せられて居る、之等は第九會の下に記してある。

(20) 實相般若波羅蜜經一卷 唐 菩提流志譯
右一部は大般若經第十會理趣分の異譯である。

(21) 仁王般若波羅蜜經二卷 後秦 鳩摩羅什譯

(22) 仁王護國般若波羅蜜經二卷 唐 不空譯

右二部異譯、略して仁王經と云ふ、法華經、金光明經と共に、鎮護國家の三部と稱せらる。序品、觀如來品、菩薩行品、二諦品、護國品、不思議品、奉持品、囑累品の八品より成る。世尊十六國の王等の爲に、佛法滅せんことを欲する時一切衆生惡業を造るが故に災難競ひ起る、時に國王、眷屬、百官、百姓、皆此の般若を受持すれば、災難即時に滅して安樂を得んと説き、又廣く菩薩の行位、佛果の

功德等を説かれてある。而して序品に「時に諸大衆、俱にみな疑を生じ、各々相謂て言く、四無所畏、十八不共法、五現法身、世尊前に已に我等大衆の爲に、二十九年、摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讚般若波羅蜜を説けり、今日如來大光明を放つ、斯れ何事をか作す」とあり。蓋し此の經は、大般若經中一部分の別行せるものに非ず、獨立の一經なること以て知るべきである。

(23) 摩訶般若波羅蜜大明呪經一卷 後秦 鳩摩羅什譯

(24) 般若波羅蜜多心經一卷 唐 玄奘譯

(25) 般若波羅蜜多心經一卷 唐 般若譯

(26) 普遍智藏般若波羅蜜多心經一卷 唐 法月譯

(27) 聖佛母般若波羅蜜經一卷 宋 施護譯

右五部異譯、此の外更に梵本一卷あり、東方聖書第四十九卷に收められてある。大般若經六百卷廣しと雖、要略すれば此の般若心經の外に出でず、故に若し此

の經を受持讀誦すれば、殊勝の功德あり、菩提を證得すること遠からず、一切の魔怨、毒藥、蛇獸、鬼神、水火、刀箭、風災、害を爲すこと能はず、立契流沙に於て之等の難に遇ふ、時に此の般若心經を念誦せしに、皆散滅せりと傳へられてある。此の經は前の仁王經と同じく大般若中一會若くは一品の別行ではなく、全部を該ねたる經典である。

以上の外、宋代譯經の中に、般若部に屬する經典が、尙ほ次の如き數部ある。

(28)了義般若波羅蜜經一卷

宋 施護譯

此の經は、世尊舍利子の爲に、諸法を如實に了知し、あらゆる所作に於て一切の相を離れ、十種の疑惑(有性疑、無性疑、諸法差別疑、毀法疑、一法疑、多法疑、同異疑、上品疑、如名疑、如名義疑)を斷除して、能く六度を圓滿する、之を般若波羅蜜相應行と名づくこと説かれたものである。

(29)五十頌聖般若波羅蜜經一卷

宋 施護譯

此の經は、世尊靈鷲山にましくて、須菩提の爲に、此の般若波羅蜜經は、あ

らゆる聲聞法、緣覺法、菩薩法、菩提分法、一切諸佛、一切波羅蜜法を聚集し攝受して、平等なること一の如しと説かれたものである。

(30)帝釋般若波羅蜜多心經一卷

宋 施護譯

此の經は、世尊靈鷲山にましくて、帝釋天主の爲に、般若波羅蜜その義甚深、一に非ず、異に非ず、相に非ず、無相に非ず、乃至、實際に非ず、不實際に非ず、是の如く一切法は平等なり、般若波羅蜜も亦平等なりと説き、後に頌及呪を以て、般若の義無量無邊なることを明されてある。

(31)開覺自性般若波羅蜜經四卷

宋 惟淨譯

此の經は、世尊靈鷲山にましくて、須菩提の爲に、六識、六境皆無自性なり、諸行無常なり、諸行苦なり、諸法無我なり、涅槃寂靜なり等と説かれたものである。

以上諸譯の中より、特に八部を取りて、古來八部般若と稱して居る、一に大品般若(羅什譯二十七卷の摩訶般若波羅蜜經の事)、二に小品般若(羅什譯十卷

の摩訶般若波羅蜜經の事、三に放光般若、四に光讚般若、五に道行般若、六に金剛般若、七に勝天王般若、八に文殊般若である。龍樹菩薩の大智度論一百卷は、大品般若を釋したものである。

十三 大智度論

(イ) 其の傳譯

大智度論 Mahāprajñāpāramitā-sāstra 一百卷は龍樹(那伽樹那 Nāgārjuna)菩薩の所造で、後秦の鳩摩羅什 Kumārajīva の譯、大智度經論とも云ひ亦摩訶般若釋論とも云ふ、大品般若九十品を釋したもので、富詞妙辯、事理精廣、西域の學者欽崇せざるはなしと稱せられてある。什公自ら云く、餘若し廣譯せば千卷に餘るべし、秦人識劣なるが爲に十分の一を存す。一百卷の中、三十四卷は初品の釋で、頗る精緻を極めてあるが、第三十五卷以下の諸品は文意を開釋するに止まつて居る、蓋し是れ什公翻譯の際略して出だしたものであらう。譯成りて秦主姚興これを廬山の慧遠に致し其の序を求むるや、慧遠は本論の文句繁廣にし

て初學の尋ね難きを遺憾なりとし、其の要文を抄出して、一百卷を更に二十卷かりに要約した、そのため當時の學者は非常に便益を得たこのことである。

(ロ) 其の大要

大品般若九十品を釋したるが大智度論であるから、大品般若の大要が即ち大智度論の大要である。智度論第百卷に大品般若第九十囑累品を釋して、次のやうに問答してある。

問て曰く、先に阿閼佛品中囑累を見る、今復囑累す、何等の異ありや、答へて曰く、菩薩の道に二種あり、一には般若波羅蜜道、二には方便道なり。先の囑累は爲に般若波羅蜜の體を説き竟る、今は衆生をして是の般若の方便を得せしむることを説き竟るを以て囑累す。

大品般若を見るに、九十品の中、第六十六品の終り、第九十品の終りこの兩所に付屬の説あり、今の問答は其の所以を釋したものである。蓋し般若には體用の別がありて、所謂般若波羅蜜道は體、方便道は其の用である。即ち九十

品の大品般若には、前六十六品に般若の體を説き、後の二十四品に般若の用、方便道が説かれてある。般若の體用を説く、これが大品般若の大要で、又大智度論の大要である。

佛般若の説法には主として舍利弗(智慧第一)須菩提(解空第一)の兩弟子を對告衆させられてある。故に智度論卷頭の歸敬序にも「一心恭敬三寶已、及諸救世彌勒等、智慧第一舍利弗、無諍空行須菩提」さて、特に兩弟子の名をあげて歸敬せられてある。かくの如く舍利弗須菩提の兩弟子を對告衆させられたに就て、智度論卷十一に其の所以を釋し、次のやうに問答してある。

問て曰く、般若波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の法なり、佛何を以ての故に舍利弗に告げて菩薩に告げざる、答へて曰く、舍利弗は一切弟子中に於て智慧最第一なり。

問て曰く、若し爾らは何を以て初めに少しく舍利弗の爲に説き、後に多く須菩提の爲に説くや、若し智慧第一なるを以ての故ならば、應に爲に多く

説くべし、復何を以て須菩提の爲に説くや、答へて曰く、舍利弗は佛弟子中智慧第一なり、須菩提は弟子中に於て無諍三昧を得ること最第一なり、無諍三昧の相は、常に衆生を觀じて心惱せしめず、多く憐愍を行す、諸菩薩は弘大の誓願以て衆生を度す、憐愍の相同じ、是の故に命じて説く。

智度論卷四十に又曰く、

問て曰く、若し爾らば目連迦葉等甚だ多し、何を以て次第に皆ために語げざる、答へて曰く、此の經をば智慧三名づく、舍利弗は智慧第一なり、是の故に問ふ。須菩提は種々の因縁あり、雖も、二の因縁大なるを以ての故に、一には好むで無諍定を行じ、常に衆生をいつくしむ、廣く衆生を度すること能はず、雖も、而も常に菩薩を助け、菩薩の事を以て佛に問ふ、二には好むで深く空法を行す、是の般若中多く空法を説く、是の故に須菩提に命じて説く。

されば又智慧及び空法を説くが此の經論の大要であるとも云ふべきである。

(八) 智度論と天台宗

南岳の慧思禪師は、中論三諦の偈及び智度論の「一心中得三智の文を體得して、三諦一諦一心三觀の圓融法門を唱へられたと傳へてある。所謂一心中得三智の文と云ふは、智度論卷二十七に大品般若の「菩薩摩訶薩道慧を得んご欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし、菩薩摩訶薩道慧を以て道種慧を具足せんご欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし、道種慧を以て一切智を具足せんご欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし、一切智を以て一切種智を具足せんご欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし、一切種智を以て煩惱習を斷ぜんご欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし、舍利弗菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を學ぶべし」と云ふ文を釋して、詳かに一心三智の關係を明してある、今その結論も見るべき一文を擧ぐれば、次の如くである。

問て曰く、一心中に一切智一切種智を得一切煩惱習を斷ず、今云何ぞ一切智を以て一切種智を得、一切種智を以て煩惱習を斷ずと言ふや、答へて曰

く、實に一切一時に得るなり、此の中は人をして般若波羅蜜を信ぜしめんが爲の故に、次第差品して説き、衆生をして清淨心を得しめんご欲す、是の故に是の如く説く。

一切を一時に得、一心中に三智を得るが實際であるけれども、他の爲に説き、人をして信を生ぜしむる爲に、順序次第を説いたものだこの釋である。此の一心中得三智の釋は、天台教義の根柢を成して居るものであるが、更に智度論の中には般若法華兩經の分際が論じられてある。卷四十六に曰く

本起經、斷一切衆生疑經、華手經、法華經、雲經、大雲經、法雲經、彌勒問經、六波羅蜜經、摩訶般若波羅蜜經、是の如き等の無量無邊阿僧祇の經は、或は佛説、或は化佛説、或は大菩薩説、或は聲聞説、或は諸得道天説、是の事相合して皆摩訶衍と名づく、此の諸經中、般若波羅蜜最大なり、故に摩訶衍と説く、即ち知る已に般若波羅蜜を説く、諸餘の助道法は般若波羅蜜の相合なければ即ち佛に至ること能はず、是を以ての故に一切助道法は皆是

れ般若波羅蜜なり、後品中の如し、佛須菩提に語けたまはく、汝摩訶衍を説く、般若波羅蜜に異ならず。

これは法華等の諸經と般若經とを比較して、般若を最大なりと釋したものであるが、更に第百卷には經の付屬に就て次のやうに論じてある。

問て曰く、更に何の法の甚深なること般若に勝るもの有りてか、般若を以て阿難に囑累し、餘經をば菩薩に囑累するや、答へて曰く、般若波羅蜜は秘密の法に非ず、法華等の諸經は阿羅漢の受決作佛を説き、大菩薩能く受持し用ふ、譬へば大藥師の能く毒を以て藥と爲すが如し。復次に先に説くが如く、般若に二種あり、一には共聲聞説、二には但十方住十地の大菩薩の爲に説く、九住の所聞に非ず、何に況んや新發意の者をや、復九地所聞乃至初地所聞なるあり、各各同じからず、般若波羅蜜の總相は是れ一にして深淺異なることあり、是の故に阿難に囑累す、咎なし

二乗開會は法華の特色である、般若は獨り菩薩の爲めのみの説法であるから、

此の點より論ずれば、法華を以て般若に勝れりと爲すのである、智度論と天台教義との關係淺からざること、以て其の一斑を窺ふべきである。

(二) 智度論と淨土教

宗祖聖人の高僧和讃龍樹章に

本師龍樹菩薩は

智度十住毘婆娑等

つくりておほく西をほめ

すゝめて念佛せしめたり

と仰せられてある、智度十住毘婆娑とは、智度論と十住毘婆娑論のことであり、中に就て、十住毘婆娑論のことは、前に既に紹介した通りであるが、今智度論と淨土教との關係はさうであるか云ふに、宗祖聖人が直接に御引用になりたのは、化土卷本の終りに近く、大論に四依を釋して云くとして

涅槃に入らんと欲する時、諸々の比丘に語りたまはく、今日より法に依りて人に依らざるべし、義に依りて語に依らざるべし、智に依りて識に依らざるべし、了義經に依りて不了義經に依らざるべし。法に依ることは、法に

十二部あり、此の法に隨ふべし、人に隨ふべからず。義に依るは、義の中に好惡罪福虚實を諍ふことなし、故に語は己に義を得たり、義は語に非ざるなり、人指を以て月を指して以て我に示教す、指を看視して月を視ざるが如し、人語りて言はん、我れ指を以て月を指して汝をして之を知らしむ、汝何ぞ指を看て月を視ざるやと、此れ亦是の如し、語は義の指を爲す語は義に非ざるなり、此を以ての故に語に依るべからず、智に依るは、に智能く善惡を籌量し分別す、識は常に樂を求めて正要に入らず、是の故に識に依るべからずと言ふ。了義經に依るは、一切智人あり、佛第一なり、一切諸經書の中に佛法第一なり、一切衆の中に比丘僧第一なり、無佛世の衆生、佛此を重罪を爲したまへり、見佛の善根を種へざる人なり（智度論卷九 正藏第十九之九 五十二紙左の文）

云ふ文が引かれてある。之れは淨土眞宗は大聖の自説である云ふことを立證せん爲めに引かれたもので、直ちに淨土教義を説かれた文ではない。又高僧

和讚の龍樹章には

智度論にのたまはく

菩薩は法臣と化したまひて

一切菩薩ののたまはく

無量劫をへめぐりて

恩愛はなはだちがたく

念佛三昧行じてぞ

如來は無上法皇なり

尊重すべきは世尊なり

われら因地にありしとき

萬善諸行を修せしかと

生死はなはだつきがたし

罪障を滅し度脱せし

と曰はれてあるが、之れは智度論卷七 正藏第十九之九 三十九紙左に

佛を法王と爲し、菩薩を法將と爲す、尊ぶところ重んずるところは唯佛世尊なり、是の故に常に念佛すべし。復次に常に念佛すれば種々の功德利益を得ること、譬へば大臣の特に恩寵を蒙りて、常に其の主を念ずるが如し、菩薩も亦かくの如し、種々の功德、無量の智慧、皆佛より得るを知る、恩重きを知るが故に、常に念佛す

ごある文、及び智度論卷二十九や卷三十七等の所々に出でたる念佛三昧の文を取意せられたもので、安樂集卷下第四大門の下にも、取意の文が擧げてある。和讃の方は易行品の恭敬心の相を助顯せんため、安樂集の方は廣く念佛三昧の徳を明さんが爲に引かれたるもので、之れ又直接に淨土教義を説ける論文ではないのである。

以上の如く、宗祖聖人が直接御引用になりた智度論の文は、正しく淨土教義を説いた論文ではないが、直ちに智度論に就いて見ると、一部始終に互りて頗る盛に阿彌陀佛の因位の願行から果上の淨土の模様等が説かれてある。即ち智度論卷三十八の終りには、選擇淨土の相を次のやうに云ふてある。

阿彌陀佛先世の時、法藏比丘と作る、佛將導して遍く十方に至りて清淨國を示し、淨妙の國を選擇せしめ、以て自ら其の國を莊嚴す

又智度論卷五十(卅藏第二十二二百八十八紙左)には
世自在王佛、法積比丘を將いて十方に至り、清淨世界を示す

ご云ひ、又智度論卷十(卅藏第十九之九一五十九紙左)には

阿彌陀佛世界は華積世界に如かず、何を以ての故に、法積比丘は、佛ごにも十方に至りて清淨世界を觀すご雖も、功德力薄くして上妙の清淨世界を見ることを得ることを能はず、是れを以ての故に世界如かざるなり
ご云ふやうなごも説いてある。「阿彌陀佛世界は華積世界に如かず」ご云ふが如きは、願生西方の龍樹大士の説として、解し難き點がないではないが、兎に角これ等の説は、無量壽經に於ける法藏比丘の選擇淨土の説を襲用せられしものなるごは明かである。

又智度論卷八(卅藏第十九之九一四十五紙右)には
佛阿彌陀佛世界の種種の嚴淨を説くが如き、阿難言く、唯願はくば佛を見んご欲すご、時に即ち一切衆會をして皆無量壽佛世界の嚴淨を見せしむ、佛の舌相を見るご亦復かくの如し、佛廣長舌相を以て遍ねく三千大千世界を覆ふ

等ご云ふてある、之れは無量壽經及び阿彌陀經に依られたものなるご明かである。又智度論卷九(卅藏第十九之九一五四紙右)には

一比丘あり、阿彌陀佛經及び摩訶般若波羅蜜を誦す、是の人死せんご欲する時、弟子に語りて言く、阿彌陀佛彼の大衆ご俱に來るご、即時身を動かして自ら歸し、須臾にして命終す、命終の後、弟子薪を積みて之れを焼く明日灰の中に舌の焼けざるを見る、阿彌陀佛經を誦するが故に佛自ら來るを見、般若波羅蜜を誦するが故に舌焼くべからず、此れ皆今世の現事なり等ご云ふてある、所謂阿彌陀佛經ごは、佛の來迎を説ける觀無量壽經及び阿彌陀經の事であらう。又智度論卷九十二(卅藏第二十之四一五百二十四紙右)には佛國土あり、一切樹木常に諸法實相の音聲を出す、所謂無生無滅無起無作等なり、衆生但是の妙音を聞きて異聲を聞かず、衆生利根の故に便ち諸法實相を得、かくの如き等の佛土莊嚴名けて淨佛土ご爲す、阿彌陀等の諸經の中に説くが如し

ご云ふてある、之れは無量壽經及び阿彌陀經の寶樹説法の文に依られたものなるご明である。

以上擧ぐるごころ僅に兩三文に過ぎないが、凡そ智度論の淨土教義は、淨土の三部經に依られたる説が多い、以て智度論ご淨土教義ごの關係の尋常一様でないごを見るべきである。尙ほ二三の要文を擧ぐるならば、智度論卷三十二(卅藏第二十之一百九十四紙左)に云く

問て▲く、若し爾らば何を以てか阿彌陀佛壽命無量、光明千萬億由旬無量劫にして衆生を度すご言ふや、答へて曰く、諸佛世界種種淨不淨あり(中略)當に知るべし釋迦文佛更に清淨世界あり、阿彌陀佛國の如し、阿彌陀佛亦嚴淨不嚴淨世界あり、釋迦文佛國の如し、諸佛の大悲は骨髓に徹す、世界の好醜を以てせず、度すべき者に隨つて之を教化す、慈母の子を愛するや、子廁溷に没在すご雖も、勤求拯拔して以て惡ご爲さるるが如し。

又智度論九十三(卅藏第二十之四一五百二十七紙右)に云く

問て曰く、餘佛の三乗教化ある、豈獨り劣ならんや、答へて曰く、佛五濁惡世に出づれば、一道に於て分つて三乗を爲す、問て曰く、若し爾らば阿彌陀佛、阿闍佛等は、五濁惡世に生ぜず、何を以て復三乗あるや、答へて曰く、諸佛初發心の時、諸佛の三乗を以て衆生を度するを見る、自ら發願して言く、我も亦當に三乗を以て衆生を度すべし云。

阿彌陀佛國に淨不淨ありと云ひ、阿彌陀佛國に三乗ありと云ふが如きは、前に阿彌陀佛世界は華積世界に如かずと云へるに、願生西方者たる龍樹大士の説として稍や奇異の感なきにあらざれども、彌陀佛の淨土には報土あり化土あり、而して化土の業因は干差なるが故に、土亦干差なるべきは勿論なるが故に此の義を顯はされたるものに見れば、何等不可解のこともないのである。

更に又智度論卷二十九(卅藏第十九之千一百七十三紙左)には、往生淨土の業因を論じて、次のやうに云ふてある。

菩薩常に善く念佛三昧を修する因縁の故に、所生常に諸佛に値ふ、般舟三

昧中に説くが如し、菩薩是の三昧に入りて即ち阿彌陀佛を見たてまつり、便ち其の佛に問ふ、何の業因縁の故に彼の國に生ずることを得たるか、佛即ち答へて言く、善男子、常に念佛三昧を修し憶念して廢せざるを以ての故に我國に生ずることを得たりと。

又智度論卷二十一の終りには「無量壽佛國の如き、人生るれば便ち自然に能く念佛す」と云ひ、智度論卷四(卅藏第十九之九一二十七紙右)には「阿彌陀佛國の人壽は無量阿僧祇劫なり」等と云ふてある。

かくの如く智度論百卷一部始終に亘りて、西方阿彌陀佛の因行果徳を論じたる文、擧げ來れば實に應接に暇ないほどである、宗祖聖人が龍樹菩薩を讚歎して「智度十住毘婆娑等、つくりてをほく西をほめ」このたまへるもの、誠に所以ありと云ふべきである。

淨土眞宗御相承の間に於て、最も多く智度論を依用せられたのは、曇鸞大師の往生論註である、論註には冒頭先づ龍樹菩薩の十住毘婆娑論(易行品)を引

き、自力他力の二門を以て、彼の難易二道判の幽意を發揮せられてある、即ち往生論註上下二卷は、龍樹菩薩の説を以て、世親菩薩の淨土論を註釋せられたものである。曇鸞大師が龍樹菩薩を敬慕せらるゝことの如何に深切であつたかと云ふことは、彼の讚阿彌陀佛偈に

本師龍樹摩訶薩

誕形像始理類網

關閉邪扇開正轍

是闍浮提一切眼

伏承尊語歡喜地

歸阿彌陀生安樂

譬如龍動雲必隨

闍浮提放百卉舒

南無慈悲龍樹尊

至心歸命頭面禮

さて、特に歸敬頌に詠ぜられてあるので分る。由來龍樹菩薩は般若無所得中觀を主義とせらるゝ大士であり、世親菩薩は深蜜瑜伽の唯識緣超を主義とせらるゝ大士である、一は無相の人、一は有相の人、一見氷炭相容れざるの觀ある兩大士が、共に願生西方の念佛行者であられるといふことは、頗る不可思議の現象である。此の間の消息を最も徹底的に其の根本の教義主張から調節し融合

して見せたのが、曇鸞大師の往生論註である、即ち龍樹菩薩の説を以て世親菩薩の淨土論を註釋せられたといふことが、正しく其の事を表明して居るのである。

有相の緣起を主義とする人が往生淨土を願ふのは自然であるが、無相不可得を主張する人が願生安樂するに云ふことは、矛盾して居るやうに見ゆるのである。是に於てか曇鸞大師は、天親菩薩の願生を次のやうに解釋せられた。

問ふて〇く、大乘經論の中處々に衆生畢竟無生にして虚空の如しと説けり、云何ぞ天親菩薩願生と言ふや、答へて曰く、衆生無生にして虚空の如しと説くに二種あり、一には凡夫の謂ふところの如き實の衆生と、凡夫の見るところの如き實の生死と、此の所見の事は畢竟して所有なきこと龜毛の如く虚空の如し。二には謂く、諸法は因縁生の故に、即ち是れ不生にして所有なきこと虚空の如し。天親菩薩の願生するところは是れ因縁の義なり、因縁の義なるが故に假りに生と名づく、凡夫の謂ふが如き實の衆生實の生

死あるには非るなり。

問て曰く、何の義に依りて往生を説くや、答へて曰く、此の間の假名の人中に於て五念門を修す、前念は後念のために因と作る、穢土の假名の人は淨土の假名の人は、決定して一なるを得ず、決定して異なるを得ず、前心と後心も亦復かくの如し、何を以ての故に、若し一ならば則ち因果なけん、若し異ならば則ち相續に非ず、是の義一異を觀する門なり、論の中に委曲なり。(往生論註卷之上)

因縁の故に生あり、而も因縁の生は即空の故に無生である。五念門の行によりて安樂國に生ずることを得、是れ因縁の故に生あり、而も因縁生は即空の故に無生である。抑々穢土にて五念門を修する人、是れ因縁生の人なるが故に假名の人にして即空である、五念門の行によりて淨土に生じたる人も亦因縁生の假名の人にして即空である。而も穢土淨土の間、願生の人得生の人の間に、因果關係歴然として存す、願生するに毫末も非理はない。天親菩薩の願生は、かく

の如き意味の願生である、若し夫れ凡夫の謂ふが如き實の生死に執着して願生するならば、此の事必ず不可なりと云ふのである。而して此の解釋は、全く智度論の説に依られたものである。智度論卷三十八(中藏貳拾之一)二百二十三紙左)に曰く

今世五衆因縁の故に更に後世に生ず、五衆行業相續異ならざる故に果報を受く、又冬木未だ華葉果實あらずと雖も、時節會するを得れば則ち次第に出づるが如し、かくの如き因縁の故に死生あるを知る。(中略)佛法中、諸法畢竟空にして而も亦斷滅せず、生死相續すと雖も亦是れ常ならず、無量阿僧祇劫、業因縁過ぎ去ると雖も、亦能く果報を生じて滅せず、是を微妙知り難しと爲す。若し諸法都て空ならば、此の品中往生を説くべからず、何ぞ智者に前後の相違あらん。若し死生の相實有ならば、云何ぞ諸法畢竟空と言はん、但諸法中愛着邪見の顛倒を除かんが爲の故に畢竟空と説く、後世を破せんが爲にあらず。

前記論註の願生釋は、全く此の智度論の説に依られしものなること明かである。此の外論註の一部に亘りて、妖嬖、蠶繭、毘首羯磨、魚母、孝子父母、函蓋指月、蛇性、火椽、劣夫跨驢等の譬喩より、釋義の法目語句等、智度論を襲用せられしもの、之を對照するに殆ど應接の暇ないほどである。往生論註の智度論に依るところ既にかくの如く多し、而して宗祖聖人の本典には「謹按淨土眞宗有二種廻向一者往相二者還相」このたまひて、論註の往還二廻向、即ち願力廻向と云ふことを中心とせられてあるから、論註を通して智度論と淨土眞宗との關係を案ずるに、其の尋常一様でないことが益々明了に知らるゝのである。

(ホ) 十六正士

無量壽經の序分菩薩衆を挙げし中に「又賢護等十六正士、善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩、寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脫菩薩」がある。所謂十六正士を善思議菩薩等のこと、すれば、賢護菩薩を加へても尙ほ十五菩薩に

して十六に達しない、されば善思議菩薩等の外、別に賢護等の十六正士と云ふが有るか、否やと云ふことが、古來註釋家の間に一の問題となりて居る。今智度論卷七(卅藏第十九之九一四十一紙右)を見るに、般若經の菩薩衆の文に

諸菩薩等、如是等無量功德成就、其名曰毘陀婆羅菩薩(秦言善守)、刺那迦羅菩薩(秦言寶積)、導師菩薩、那羅達菩薩、星得菩薩、水天菩薩、主天菩薩、大意菩薩、益意菩薩、增意菩薩、不虛見菩薩、善進菩薩、勢勝菩薩、常勸菩薩、不捨精進菩薩、日藏菩薩、不缺意菩薩、觀世音菩薩、文殊尸利菩薩(秦言妙德)、執寶印菩薩、常舉手菩薩、彌勒菩薩、如是等、無量千萬億那由他諸菩薩摩訶薩、皆是補處紹尊位者

とあるを釋して

是の中二種の菩薩あり、居家と出家なり、善守等の十六菩薩は是れ居家の菩薩なり、毘陀婆羅居士菩薩は是れ王舍城の舊人なり、寶積王子菩薩は是れ毘耶離國の人なり、星得長者子菩薩は是れ瞻波國の人なり、導師居士菩

薩は是れ舍婆提國の人なり、那羅達婆羅門菩薩は是れ彌梯羅國の人なり、水天は優婆塞の菩薩なり、慈氏妙德菩薩等は是れ出家の菩薩なり、觀世音菩薩等は他方佛土より來る。若し居家を説けば一切の居家菩薩を攝す、出家他方亦かくの如し。(中略) 善守菩薩は是れ王舍城の舊人、白衣菩薩中の最大なるを以て、佛王舍城に在りて般若波羅蜜を説かんご欲するや、是を以ての故に最も前に在りて説く

等ご云ふてある。颯陀婆羅をば善守ごも譯すれば賢護ごも譯する、同じ意味である。今般若の菩薩衆を在家出家の二類に分ち、善守等の十六菩薩は在家の菩薩なりとて、其の生國まで擧げてあるごころを見れば、常に十六菩薩、十六正士、若しくは十六賢士等ご呼ばれて居つたごころの、一類の在家の菩薩のあつたごころが明かに知らるゝのである。中に就て善守は白衣菩薩中の最大なるを以て、常に最初に在りご云ふのであるから、無量壽經に「又賢護等、十六正士」ごあるのは、即ち今の善守等の十六菩薩の事で、善思議菩薩 ごは全く別類の

菩薩なるごころ明かである。此の外思益梵天所問經、持心梵天所問經、勝思惟梵天所問經等にも、賢護等を十六賢士、十六正士、十六大賢士等ご説いてある。

十四 灌頂經

(イ) 傳譯及び内容

佛說大灌頂神咒經 Buddhahāshita-mahābhishekarddhīharani-sūtra 略して灌頂經ご云ふ東晋の帛尸梨蜜多羅 Poh Srimitra の譯で、十二卷あり、實は各卷別經であるのを、合して一部ごして大灌頂經ご名づけたもので、今その別名を擧ぐれば、次の通りである。

- 第一卷 佛說灌頂七萬二千神王護比丘呪經
- 第二卷 佛說灌頂十二萬神王護比丘尼呪經
- 第三卷 佛說灌頂三歸五戒帶佩護身呪經
- 第四卷 佛說灌頂百結神王護身呪經
- 第五卷 佛說灌頂宮宅神王守鎮左右呪經

- 第六卷 佛說灌頂塚墓因緣四方神呪經
- 第七卷 佛說灌頂伏魔封印大神呪經
- 第八卷 佛說灌頂摩尼羅剎大神呪經
- 第九卷 佛說灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經
- 第十卷 佛說灌頂梵天王神策經
- 第十一卷 佛說灌頂隨願往生十方淨土經
- 第十二卷 佛說灌頂拔除過罪生死得度經

(口) 十方隨願往生經

第十一卷の佛說灌頂隨願往生十方淨土經は、亦普廣菩薩所問品も名く、十方隨願往生經として別行して居つたもので、道綽禪師の安樂集には十方西方校量の證として引かれてある。經の初めに普廣菩薩が、今將に入涅槃し給はんごする佛に向ひ、「四輩の弟子臨終の日、若し己に終らば願はくば十方國土に往生せんご欲す、何なる功德を修してか往生を得るや」と問ふた。時に佛は普廣菩薩

に告げて「汝能く四輩の弟子及び未來世の諸の衆生等を愍念して、此の願生因緣の福を問へり、汝今諦かに聽け、吾れ當に汝が爲に之を演説すべし」とて、詳かに十方各佛刹につき、各々願に隨つて往生を得べきことを説いた。かくて普廣菩薩は重ねて佛に問ふた、

世尊、十方佛刹淨妙の國土、差別ありや否や、

佛の言く、

普廣、差別無し、

普廣又問ふ、

世尊、何故經中には、阿彌陀佛刹の七寶諸樹、宮殿樓閣を讚歎し、諸の願生者は皆悉く彼の心中の所欲に隨つて、念に應じて至るべしと説くや、

佛普廣菩薩に告げたまはく

汝我意を解らず、娑婆世界の人多く貪濁にして信向する者少なく、邪を習ふ者多くして正法を信ぜず、專一なること能はず、心亂れて志無し、諸の衆生

をして、専心に在るころあらしめん、是の故に彼の國土を讚歎するのみ、諸の往生者は、悉く彼の願に隨つて果を獲ざる無し、

道綽禪師の安樂集(卷上二十一紙左)には「十方佛國を不淨と爲すに非ず、然も境寛ければ則ち心味く、境狭ければ則ち意専なり」故に十方淨土に願生せんよりは、西方に歸するに如かずとて、今の經文を取意して引かれてある。

次に誦經、然燈、造幡等を以て追福するところから、追薦の功德七分獲一等の事、若し自ら發心すれば福を獲ること無量なり等と説き、更に又那舍長者の父母罪福の因縁等が説かれてある。道綽禪師の安樂集(卷下十一紙右)に又此の追福に關する經文を取意して引かれてある。

(八) 高祖の御引用

宗祖の本典化身土文類末卷(二十三紙右)に灌頂經に言くとして「三十六部の神王、萬億恒沙の鬼神を眷屬として、相を陰し番に代りて、三歸を受くる者を護る」と云ふ文が引かれてある。是れは第三卷佛說灌頂三歸五戒帶佩護身咒經

の文で、經の初めに鹿頭梵志、異學を捨て、三歸五戒を受くることを説いてある。佛梵志に告げて「汝能く一心に三自歸を受け已る、われ當に汝及び十方人の爲に、天帝釋の遣すところの諸鬼神に勅して、以て男子女人輩の三歸を受くる者を護らしむべし」と言ひ、かくて三十六部神王の名を列ね、

是れを三十六部神王と爲す、此の諸の善神凡そ萬億恒沙の鬼神を有し以て眷屬と爲す、相を陰し番に代りて、以て男子女人等の輩の三歸を受くる者を護る、當に神王の名字を書して、帶して身上に在くべし、行來出入畏る、

ところ無し、邪惡を辟除し、不善を消滅せん
と説かれてある。高祖御引用の御趣意は、外教邪僞の異執に滯ほらず、三寶に歸命(三歸)すれば、諸天善神日夜守護し給ふことを立證せられたもので、所謂三歸の究竟は、阿彌陀如來に歸命するに在りこの思召なることは云ふまでもない。

十五 藥師如來本願經

(イ) 傳譯及び内容

藥師如來本願經 Bhesagayaguru-tahāgata-pūrvapranidhāna-sūtra には、左の三譯がある。

藥師如來本願經一卷

隋達摩笈多 Dharmagupta 譯

藥師瑠璃光如來本願功德經一卷

唐玄奘譯

藥師瑠璃光七佛本願功德經二卷

唐義淨譯

前の灌頂經第十二卷、佛說灌頂拔除過罪生死得度經も亦此の經の異譯である。東方藥師如來の十二大願、國土莊嚴、持誦願求、建立道場、除病續命等の法が説かれてある。義淨譯の七佛本願功德經は、東方七佛の本願を説いたもので、その第七が藥師如來の十二大願である。

此の經は、其の名の如く藥師如來の本願功德を説いたものであるが、中に次の様なことが説かれてある。

復次に曼殊室利、若し四衆苾芻、芻苾尼、鄔波索迦、鄔波斯迦、及び餘の淨

信の善男子、善女人等ありて、能く八分齋戒を受持することあり、或は復二月學處を受持し、此の善根を以て西方極樂世界の無量壽佛の所に生ぜん願ぜんに、正法を聽聞して未だ定まらざる者、若し世尊藥師瑠璃光如來の名號を聞かば、命終の時に臨みて、八菩薩あり神通に乗じて來り其の道路を示し、即ち彼の界の種種雜色衆寶華中に於て、自然に化生せん
持戒の善根を廻向して、西方の無量壽佛所に往生せん願はん者、若し藥師如來の名號を聞かば、その功德によりて即ち往生を得と云ふのである。

(ロ) 十二の大願

藥師瑠璃光如來は、本菩薩道を行し給ふ時、諸の有情の求むるところをして皆得せしめんが爲に、十二の大願を發された。

第一光明普照の願

願はくば我れ來世に阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、自身の光明熾然として無量無數無邊世界を照曜し、三十二大丈夫相八十隨形を以て其の身を莊嚴し、

一切有情をして我れの如く異なること無からしめん。

第二隨意成辨の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、身瑠璃の内外明徹にして淨きこと瑕穢なきが如く、光明廣大功德巍巍として身善く安住し、燄網莊嚴日月に過ぎ、幽冥の衆生悉く開曉を蒙ふり、意の趣くところに隨つて諸の事業を作さん。

第三施物無盡の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、無量無邊の智慧方便を以て、諸の有情をして皆無盡を得しめん、受用するころの物、衆生をして乏少するころ有らしむること莫からん。

第四安立大乘の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情の邪道を行する者は、悉く菩提道中に安住せしめ、若し聲聞獨覺乘を行する者は、皆大乘を以て之を安立せしめん。

第五具戒清淨の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し無量無邊の有情ありて、我が法中に於て梵行を修行せば、一切皆不缺戒、具三聚戒を得しめん、設ひ毀犯することあるも、我が名を聞き已らば還た清淨を得て惡趣に墮せざらしめん。

第六諸根具足の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、其の身下劣にして諸根具せず、醜陋頑愚、盲聾瘖瘂、攣臂背僂、白癩癲狂、種種の病苦あらんに、我が名を聞き已らば一切皆端正點慧なることを得、諸根完具して諸の疾苦なからしめん。

第七除病安樂の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、衆病逼切して救なく、歸なく、醫なく、藥なく、親なく、家なく、貧窮にして多苦ならんに、我が名號一たび其の耳を経れば、病悉く除くことを得て身心安樂に、家屬資具悉く

皆豐足し、乃至無上菩提を證得せしめん。

第八轉女得佛の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し女人ありて女百惡の逼惱するところとなり、極めて厭離を生じ、女身を捨てんことを願はんに、我が名を聞き已らば一切皆女を轉じて男ご成ることを得、丈夫の相を具して乃至無上菩提を證得せしめん。

第九安立正見の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、諸の有情をして、魔羅の網を出で一切外道の纏縛を解脫せしめん、若し種種惡見の稠林に墮するも、皆當に引攝して正見に置き、漸やく諸の菩薩行を修習せしめ、速に無上正等菩提を證せしめん。

第十除難解脫の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、王法に録せられて累縛鞭撻せられ、牢獄に繋閉せられ、或は刑戮及び餘の災難、陵辱、悲愁に當りて身心を煎迫し苦を受けんに、若し我が名を聞かば、我が福德の威神力を以ての故に、皆一切の憂苦を解脫することを得しせん。

第十一飽食安樂の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、饑渴に悩まされて食を求めんが爲の故に、諸の惡業を造らん、我が名を聞くことを得て專念に受持せば、我れ當に先づ上妙の飲食を以て其の身を飽足せしめ、後法味を以て畢竟安樂にして之を建立せしむべし。

第十二美衣満足の願

願はくば我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、貧にして衣服なく、蚊虻寒熱、晝夜逼惱せんに、若し我が名を聞きて專念に受持すれば、其の好むところの如く、即ち種種上妙の衣服を得しめ、亦一切寶莊嚴具、華鬘塗香、鼓樂衆伎を得しめ、心の所翫に隨つて皆満足せしめん。(玄奘譯に依る)

以上これを藥師如來の十二の微妙上願と云ふのである。

(ハ) 高祖の御引用

宗祖の化身土文類末卷(二十三紙左)に、本願藥師經に言くとして、玄奘譯藥師瑠璃光如來本願功德經の二文が引かれてある。其の第一文は

若し淨信の善男子善女人等ありて、乃至盡形餘天に事へず

と云ふ文であるが、經の次の文には、一心に佛法僧に歸命して、禁戒を受持すべし、若し五戒、十戒、二百五十戒、五百戒に於て、或は毀犯するこゝがありても、若し能く藥師如來の名號を專念して、恭敬供養すれば、必定して惡趣に墮せずと説かれてあるのである。

其の第二文は九横死の事を説かれたる中の第一横と、それから中略して第八横の經文を引かれてある。要するに諸天神、娑祀邪教に關する文のみを引かれて、それ等に事ふべからざることを誡められたものご伺はれる。

十六 不空絹索神變眞言經

(イ) 傳譯及び内容

不空絹索神變眞言經 Amoghapāśarddhivikrīti-montra-sūtra は、左の諸譯がある。

不空絹索咒經一卷

隋 闍那崛多 Jñānagupta 譯

不空絹索神咒心經一卷

唐 玄奘 譯

不空絹索咒心經一卷

同 上

不空絹索陀羅尼經一卷

唐 李無詔 譯

不空絹索陀羅尼自在王咒經三卷

唐 阿彌眞那 Manicīnta (寶思惟) 譯

不空絹索神變眞言經三十卷

唐 菩提流志 Bodhiruci 譯

不空絹索陀羅尼儀軌經二卷

唐 阿目佉跋折羅 Amoghavajra (不空金剛) 譯

以上の中で、菩提流志譯の不空絹索神變眞言經三十卷が一經の全體であつて、其の他は部分の別譯である。即ち玄奘譯の不空絹索咒心經は此の經の第一卷に當り、李無詔譯の不空絹索陀羅尼經、寶思惟譯の不空絹索陀羅尼自在王咒經、不空譯の不空絹索陀羅尼儀軌等は、共に此の經の第三卷までを譯したものであ

る。又不空譯の不空絹索毗盧遮那佛大灌頂光眞言經（光明眞言）は、此の經卷二十八灌頂眞言成就品の別譯である。

一經總じて三十卷七十八品あり、一時佛補陀洛山觀世音菩薩の大宮殿中に、八千の大苾芻衆、九十億俱胝那由多百千の大菩薩衆、無量百千の天龍八部衆等と俱にまします時、觀世音菩薩是の神咒を説く。此れは是れ一切諸佛菩薩の大寶光聚でありて、若し極重の惡業を造りて應に阿吽地獄に墮し、無數劫を経て苦を受くること無間ならんに、能く懺悔して此の經を持誦すれば、罪悉く滅することを得て地獄に墮せず、惟五逆罪の者は現世に輕き病苦を受くるのみ、何に況んや淨信輕罪の者受持すれば、願として成就せざることなしと説き、更に種種の災厄怖畏、惡夢不祥悉く消滅することを得、無量殊勝の利益あることを説き、壇場手印、持受祈願、咒藥治病、降伏攝召、種種神變等の法が説かれてある。要するに此の經は觀音三昧を説いて、一切法を總該したものである。

(口) 高祖の御引用

宗祖の本典眞佛土卷に、不空絹索神變眞言經に言くことして、次の文が引かれてある。

汝當生の處は、是れ阿彌陀佛の清淨報土なり、蓮華より化生して常に諸佛を見たてまつり、諸の法忍を證して、壽命無量百千劫數ならん。直に阿耨多羅三藐三菩提に至りて復退轉せず、我れ常に祐護す。

之れは菩提流志譯の第二十一、無垢光神通解脫壇三昧耶像品の文で、觀世音菩薩が、神通解脫心陀羅尼を誦持する行者の前に現れ、伸手摩頂して高聲に告げ給ふ言である。即ち如法に此の陀羅尼を誦持すれば、阿彌陀佛の清淨報土に蓮華化生して、無上菩提を退轉せずと云ふのである。高祖御引用の趣意は、阿彌陀佛の清淨報土にある文を取つて、眞佛土の證させられたるものである。

此の經三十卷一部の始終に亘りて、盛に西方阿彌陀佛の極樂世界に往生を得べきことが説かれてある。其の文を一一擧ぐるの違はないが、以下少しく例文を引いて置かう。卷第二秘密成就眞言品に言く

常に夢中に七寶宮殿樓閣華林果樹を見ることを得、一切善友相樂見し、身清淨なることを得、觀世音菩薩當に諸願を興へ、阿彌陀佛夢に爲に現前す、若し命終し已らば直に西方極樂刹土に生ず。

卷第四法界密印莊嚴品に言く

當來世に於て阿耨多羅三藐三菩提處に證趣し、阿彌陀佛の眞子と爲る。

卷第五絹索成就品に言く

蓮華臺上に高座を嚴飾し、其の座上に阿彌陀佛を置き、左に觀世音を置き、右に大勢至を置き(中略)母陀羅尼眞言秘密心眞言を誦し、阿彌陀佛名を稱へて晝夜無間なれば、十五日の夜五更に於て、時に阿彌陀佛大光明を放ち、壇地震動して持眞言者の身上亦光明を出す、行者是の時懺悔發願して又眞言を誦するここ二三七遍、阿彌陀佛現前して摩頂安慰し語けて言く、汝の求願するところ今當に満足すべし、是の時當に清淨無垢光明の身を證し、則ち西方極樂國土の宮段樓閣を見たてまつる、阿彌陀佛、一切菩薩、相好光明種種

の神通をもつて、一時に讚言すらく、善哉、善哉、善男子、汝が所受の身は明れ最後身なり、此の生を捨て已りて我國に生住す。

卷第十四陀羅尼眞言辯解脫品に言く

是の如き陀羅尼三摩地、若し一たび耳を經れば、亦當に極樂刹土の阿彌陀佛前に生じて、蓮華化生することを得べし。

卷第十八十地眞言品に言く

是の如く此の眞言を修治する者は、能く過現の諸惡重罪を害し、一切の垢障盡く皆消滅し、當に一切諸佛菩薩、天僊龍神悉く皆歡喜すべし、觀世音菩薩摩訶薩諸の證願を興へ、當に捨命の後、西方極樂國土に往きて、極喜地に住し蓮華化生すべし。

卷第二十普遍解脫心曼拏羅品に言く

是の業成熟すれば、當に定めて觀世音菩薩大眞身を現じ、手を執つて西方淨土の阿陀陀佛、寶蓮華師子の座に坐し給ふを指示すべし、復阿彌陀佛手づか

ら其の頭を摩して謂く、彼土の一切菩薩の福命功德に同じく、此の身を捨て、後西方安樂國土に往き、上品蓮生して諸の相好を具し、宿住智を識り不退轉を得べしと。

卷第三十供養承事品に言く

則ち當に九十九殞伽沙俱胝那由多百千如來の一切善根に承事供養すべし、一切の重罪災厄病惱悉く自から消除し、諸の有情に於て最も尊上なるが故に、命終の時に臨みて九十二殞伽沙俱胝那由多百千の諸佛現前し、安慰して語けて言く、汝西方淨土に往き、蓮華受生して不退地に住し、寶瓔珞を以つて之れを莊嚴し、宿住智を得て、此の不空一切眞言壇印三摩地盡く皆現前することを得ん。

かくの如き文類は殆ど一部各品を通じてあると言つてい、ほごである。觀音は彌陀覺王の脇士として、その慈悲門を體現して救世の使命を帯びたる大士であり、而して此の不空絹索神變眞言經は、觀音三昧を説きたる御經であるから、

西方阿彌陀佛の清淨報土に往生するを以つて、得益の究竟となせること、蓋し必然の事である云ふべきであらう。

十七 法華經

(イ) 傳譯沿革

法華經 Saddharmapundarika-sūtra の支那に傳譯せらるゝもの前後八回、内四譯缺、四譯現存して居る。

佛以三車喚經一卷(缺)	譬喻品に當る	吳	支謙	譯
法華三昧經六卷(缺)		吳	支謙	譯
薩芸芬陀利經六卷(缺)		西晉	竺法護	譯
正法華經十卷(存)		同	上	
薩曇分陀利經一卷(存)	寶塔提婆二品	同	失	譯
方等法華經五卷(缺)		東晉	支道根	譯
妙法蓮華經八卷(存)		姚秦	鳩摩羅什	譯

添品妙法蓮華經七卷(存)

隋 崛多笈多共譯

以上の外、齊の達摩摩提(法意)譯に、妙法蓮華經提婆達多品第十二の一卷がある、開元錄に依れば、妙法蓮華經に編入せる提婆達多品が即ちそれで、道慧の宋齊錄には、沙門法獻于填國に於て梵本を得來るご見へ、僧祐の錄には、高昌郡に於て梵本を獲たりご云つてあるが、孰れか正しきや詳らかならずご記してある。又妙法蓮華經觀世音菩薩普門品經ご云ふが一卷ありて、卷頭に姚秦の鳩摩羅什長行を譯し、隋の闍那崛多重頌を譯すご記してあるが、妙法蓮華經の普門品ご全く同文である。

現存四本の中、添品妙法蓮華經は、法護及び羅什の譯本に缺くるごころの諸品を添加して、首尾完全の一經ごなしたもので、序文に其の始末を次のやうに記してある。

昔し曠煌の沙門竺法護、晋武の世に於て正法華を譯し、後に秦の姚興更に羅什に請ふて妙法蓮華經を譯す。二譯を考驗するに定めて一本に非ず、護は多

羅の葉に似て、什は龜茲の文に似たり。余經藏を檢して備さに一本を見るに、多羅は則ち正法ご符會し、龜茲は則ち妙法ご允同なり。護葉尙ほ遺るごころあり、什文寧そ其の漏なからんや。而して護の缺くるごころは普門品偈なり、什の缺くるごころは藥草喻品の半、富樓那及び法師等の二品の初め、提婆達多品、普門品偈なり。什は又囑累を移して藥王の前に在き、二本の陀羅尼並びに普門の後に置けり、其の間の異同は、言をもて極むる能はず(中略)大隋仁壽元年辛酉の歲、普曜寺の沙門上行の所請に因り、遂に三藏崛多笈多の二法師ご共に、大興善寺に於て重ねて天竺多羅葉本を勸ふるに、富樓那及び法師等の二品の初めは、本を鈔ふるに猶ほ缺くるがごこく、藥草喻品は更に其の半を益し、提婆達多を塔品に通入し、陀羅尼を神力の後に次ぎ、囑累還つて其の終りを結び、字句の差殊頗る亦改正せり。(下略)

又以て法護譯ご羅什譯の異同をも知るべきである。更に又梵本の法華經あり、南條博士泉芳璟兩氏に依りて和譯新に成り、其の沿革を卷頭に記す、就て見る

べし今は略す。又二樂莊には蒙古譯法華經の珍本を藏して居られる。

(口) 諸本の異同

法護譯と羅什譯の別本なるべきことは、前記添品經の序文にも言ふてある通りであるが、更に世親菩薩の妙法蓮華經憂波提舍(次章に紹介すべし)及び現存の梵本並に蒙古譯等に徴するに、更に幾多の殊なれる原本があつたやうに思はるゝのである。

今例證として一二著るしき相違の文を擧るならば、先づ序品の菩薩衆の中に、梵本及び蒙古譯には賢護等の十六正士が擧げてあり、世親菩薩の論にも「毘陀波羅(賢護)菩薩等の十六大賢士の如きは、菩薩不可思議の事を具足して、常に種々の形相を示現す」と釋してある、然るに支那譯の諸本には皆此れが缺けて居る(但し跋陀婆羅菩薩等の名は出て居るけれども、十六正士としては出て居ないのである)。

又彼の有名なる方便品の「佛の成就したまふところの希有難解の法は、唯佛

と佛とのみ乃ち能く諸法の實相を究盡したまへり、所謂諸法は如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等」
とある十如是の文が、梵本では次のやうになりて居る(南條博士の和譯に依る)。
唯如來のみ一切法を知れり、諸法は何んぞや、諸法は云何んぞや、諸法は何ん
の如きや、諸法は如何なる相ありや、諸法は如何なる自性ありやと、此等
の諸法に於て唯如來のみ現在の守護者なり。

世親菩薩の論に引ける經文にも「唯佛如來のみ能く一切法を説きたまふ、何等
法、云何法、何似法、何相法、何體法、何等、云何、何似、何相、何體、如是
等の一切法、如來現に見たまふ、不現見に非ず」とある。一本に如是とある文
の、他本に云何、如何、何等、何似等とあるが如き、誠に著るしき相違と云は
ねばならぬ。

又普門品の偈頌が、支那譯では「慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂禮」で
終りて居るが、梵本には更に次の如き諸頌がある(南條博士の和譯に依る)。

○世間を悲憐したまひて

當來の世に成佛し

一切の苦難悲を滅す

われ觀自在に歸命せむ。

○世自在王を導師とし

世に供養せられし法藏比丘は

多百劫波を修行して

無垢なる無上覺に達したり。

○右また左に立ちたまひ

無量光世尊を煽ぎつゝ

如幻三昧の力にて

一切國土に佛を供養す。

○西方かしこに幸多き

無垢なる樂有世界あり

かしこに無量光世尊なる

有情調御者は住みたまふ。

○女人はそこに生れねは

界女の情交もたはて無し

かれら佛子は化生して

無垢なる華藏に坐せるなり。

○かの無量光世尊こそ

無垢微妙なる華藏の中に

師子座の上に坐したまひ

娑羅王のごく輝けり。

○人中の無上者よ三界に

世尊に比すべきものあらじ

われその福聚を讚歎し

速かに世尊の如くならむ。

蒙古譯の法華經にも、同じ意味の偈頌がある、是れ觀世音菩薩は彌陀世尊の脇士として、佛化を助成せることを説ける偈頌で、即ち法華經の普門示現は、全く彌陀法王の功德なることが、明了に顯れて居るのである。

以上は僅に著るしき二三の例證を挙げたるに過ぎないが、南條博士の梵本和譯には、冠註に羅什譯の妙法蓮華經全部を舉げて對照してあり、更に卷頭には品名から、序品及び普門品等に就いて、諸譯の比較が試みられてある、就いて見るべし、今は略す。

(ハ) 一經の梗概

羅什譯の妙法蓮華經に依りて、一部の梗概を記せんに、總じて八卷二十八品(序品第一、方便品第二、譬喻品第三、信解品第四、藥草喻品第五、授記品第六、化城喻品第七、五百弟子授記品第八、授學無學人記品第九、法師品第十、見寶塔品第十一、提婆達多品第十二、勸持品第十三、安樂行品第十四、從地涌出品第十五、

如來壽量品第十六、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、法師功德品第十九、常不輕菩薩品第二十、如來神力品第二十一、囑累品第二十二、藥王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四、觀世音菩薩普門品第二十五、陀羅尼品第二十六、妙莊嚴王本事品第二十七、普賢菩薩勸發品第二十八)ある。

諸經の通則に依りて三分を分ては序品第一は序分、方便品第二より分別功德品第十七の半まで、凡そ十五品半が正宗分で、已下終りまで十一品半ほどが流通分である。けれど天台一家では特別に此の二十八品を二分して、前十四品を迹門、後十四品を本門とし、二門に各々序正流通の三分ありごなして居る。即ち序品第一が迹門の序分、方便品第二より授學無學人記品第九に至る八品が迹門の正宗分、法師品第十より安樂行品第十四に至る五品を其の流通分とし、從地涌出品第十五の前半が本門の序分、其の後半より分別功德品第十七の前半までが本門の正宗分、已下終りまでを其の流通分とするのである。無始久遠の古へに成佛し給へる釋尊が、爾來世々に出現して利他教化せられ

し事迹をば、毫も其の本時を説くごごなしに、唯中間の事のみ説けるを迹門の説法ご云ふ、即ち二十八品中の前十四品がそれで、釋尊は此の間に十方佛土中唯一乘法、無二亦無三ご説き、於一佛乘分別説三ご説き、汝等所行是菩薩道等ご説きて、二乘三乗の情執を開會して、唯一佛乘のみなるごごを顯はした、是れを開三顯一ご云ひ、迹門の開顯ご云ふ。かくて釋尊は無始久遠の本時成道の事より、世々に出現して衆生を教化せるごごを説きて、迦耶成道の佛は即ち久遠本成の佛なるごごを顯はした、之れを本門の説法ご云ふ、即ち二十八品中の後の十四品がそれで、釋尊は此の間に「我れ實に成佛已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり」等ご説きて、迦耶始成ご思へる者の情執を開き、久遠本成の古佛たるごごを顯はした、是れを開迹顯本ご云ひ、本門の開顯ご云ふのである。

(二) 諸師の法華經疏

法華經の疏ご云へば、先づ指を天台大師(智顛)の三大部(法華玄義、法華文句、摩訶止觀)に屈せねばならぬ、玄義は法華經の概論で、文句は註釋、止觀

は別に實修の觀門を示したものである。唐の荆溪大師湛然が彼の三大部に各注解(玄義釋籤、文句記、止觀輔行)を加へて、益其の深義を發揮してある。爾來法華經の疏云へは、全く天台の三大部を指すもの、様になりて居るが、天台以前及び以後、更に幾多各宗の諸師によりても解釋せられて居るのであるから今はそれ等を概括して少しく紹介することとする。但し最初の註釋書も云ふべき世親菩薩の妙法蓮華經優波提舍(法華論)は、以章に改めて紹介するから、茲には支那に於ける主なる諸師の疏に就て記して置く。

羅什三藏の妙法蓮華經を譯出してから、其の門下の俊才たる道融は法華義疏を著し、僧叡は法華經後序を書き、慧觀は法華宗要序を書いた等のことが傳記に出て居りて、當時法華の講筵はなかく盛んであつた様である。けれどもそれ等の書は一も今日に傳はつて居ないのであるが、獨り道生の法華經略疏云ふものが二卷存して居りて、續藏經の第二編乙二十三の四に編入せられてある、蓋し是れが支那に於ける法華經疏中の最古のものであらう。既に羅什譯出當

時に於ける其の門下生の著述であるから、解釋も素撰簡結で、天台の三大部以後のものに觀るが如き、繁瑣復雜の俤はない、彼の方便品の十如是の説の如き、最後の本末究竟を二觀て、十一如是を解して居る、教判には善淨法輪、方便法輪、眞實法輪、無餘法輪云ふ四種法輪説を唱へて居る。

降つては梁の光宅寺法雲法師の法華經義記、それから前記天台の三大部、嘉祥大師の法華經玄論及び義疏、慈恩大師の法華經玄贊等が主なるものである。中に就て嘉祥大師は三論宗の祖師、慈恩大師は法相宗の祖師で、共に三乗家一權大乘の人々であるから、同じく法華經を講じて、一乘圓教を宗とする天台大師等の解釋とは、餘程相違して居る點がある、今次に記する一問題に就て、諸師の見解の相違の一斑を紹介して置く。

古來三乗家を又は三車家と云ひ、一乘家をば四車家と呼びなして居るが、之れは法華經の譬喩品に對する見解の相違より、自然に起れる呼稱である、即ち譬喩品に次の様な譚が説かれてある。

なにがしの聚落に由緒ゆかしき大福長者があつた、庫には金銀財寶が充ちて居り、而して三人の兄弟があつた。然るに或日過つて火を失し、またく間に周圍は火炎に包まれて、今や三人の子供の遊び戯むれて居る室に及ぶ様になつた。そこで父なる長者は驅けつけて、今にも焼け死なねばならぬ危険な場合であることを、懇々諭して難を逃れしめ様ごするけれども、遊戯に耽れる子供等は、更に耳をかそうごもしない、かゝる間に火は益せまつて来る、一刻も猶豫が出来なくなつた。父は咄嗟の場合に一策を案出して、子供等の最も好める羊車、鹿車、牛車を、門外に出たならば與へようとして彼等を誘ふた。かく聞きたる三人は、先を争ふて門外に出て「父よ、羊車、鹿車、牛車、願くば賜へ」と請ふた、時に父は三車を與へずして「諸子に等一の大車を賜ふ」たのであつた。小供の索めた羊車(聲聞乘)鹿車(緣覺乘)牛車(菩薩乘)の中の牛車(菩薩乘)と父の與へた等一の大車——大白牛車(佛乘)とは、同なりや將た別なりや、別なれば四車であり、同なれば三車である。一乗家では三乗の外に一佛乘ありこ

爲すから四車となり、三乗家では三乗の外に佛乘あることなしと云ふから三車となる。三乗一乗のやかましき論争の中心は、即ち此に在るのである。

光宅寺の法雲法師は四車家ではあるけれども、天台等の見解は其の趣きを異にして居る、即ち彼の義記の説に依れば、三車の中の牛車は小乗中の菩薩乗で、大白牛車は佛一乘法である、門外に出て、三車なかりしと云ふは、法華の開會によりて二乗の執着を離れたるを謂ひ、三人に等一の大車を與へたりと云ふは、唯一乘法となつてしまつたところを謂ふのである、故に大白牛車は三車の外で、即ち譬喩品のうへは四車の所明であること云ふてある。

次には三車家の中でも嘉祥大師(三論宗)と慈恩大師(法相宗)の見方はまた違ふ、先づ嘉祥大師の法華玄論に云ふところに依れば、門外に出て「羊車、鹿車、牛車、願くば賜へ」と索めたのは、三人の中の二人であつて、長子一人は索めなかつたと言つてある。其の理由は、二人は即ち聲聞緣覺の二乗であつて、これ等二乗の者は、煩惱を斷じて三界を出離して見れば、所謂灰身滅智の無餘涅槃

で、得るところは何にもないから、茲に大心動き來り、進んで佛果を索むることゝなつた、之れを喻へて門外に出で、車を索めたこと云ふのである。然るに長子即ち大乘の菩薩は、初發心の時より界外に佛果を認めて居る、即ち門外に出づれば父の必ず大白牛車を與ふることを知つて居るから、父に向つて更に車を與へよと索むる理由がない、故に牛車が即ち大白牛車であつて、四車と見るべきではないと云ふのである。

慈恩大師は五性各別を宗とする法相宗の人であるから、唯一乗と云ふ説は、不定種性の一機に對する説なりとして、一乗家からの所難をば常に軽く受け流して居る。今此の譬喩品の説に就いても、勿論三車なりと云ふ主張ではあるが、嘉祥大師のやうに、菩薩に索車の義なしと云ふやうな頑固なことは云はず、經文の當面が三人共に索めたことになつて居るから、彼は三車を主張しつつ、而も菩薩索車の義を是認して居る。即ち彼の法華玄贊に云ふところに依れば、門内で三車と言つた中の牛車も、門外で與へた等一の大白牛車も、同じく菩

薩乘なることは勿論であるが、門内は因で門外は果である。即ち初地已上になれば三界分段の生死をば離れて居るけれども、未だ究竟の佛果に達しないで、因位にあつて果を求むる義があるから、長子(菩薩)も門外にて共に車を索めたりと云ふに何等の不思議はない、即ち牛車大白牛車は一法の因果前後を示したもので三乗一乗と區別すべきものではないと云つてある。

天台の章安大師や、華嚴の賢首大師等の一乗家の人々は、前記の三車家を痛く難破して、三車の他の大白牛車を主張し、三乗一乗の區別を明かに論じて居るが、要するに三乗の中の菩薩乘は、堅く三乗の差別に執着して居る、即ち門外に三車ありと聞いた門内の三人は、堅く三車に執着して居たが、門外に出てく等一の大車を與へられた時、始めて其の執着が無くなつたので、それまでは長子も他の二人と同執であつたのである、故に三乗と一乗とは別で、三車に非ず四車であること云ふのである。

(木) 高祖と法華經

宗祖聖人の本典六軸は、經論釋の明文を聚めて御自釋を加へ、以て眞宗義の據るところあることを證せられたものである、故に題號にも教行信證文類と仰せられてある。其の經論の文類は、從來記して來たように、始め華嚴より終り涅槃に及ぶ、廣く諸經論を引かれてあるのであるが、獨り法華經に就ては、直接に引用せられしもの一文もないのである。

法華經に言くとして直接に引用せられてはないが、教卷に「何以得知出世大事」と曰ひ、行卷に「大乘無有二乘三乘、二乘三乘者入於一乘、一乘者即第一義乘、唯是誓願一佛乘也」と曰ひ、又和讃に「彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫ごきたれど、塵點久遠劫よりも、ひさしき佛ごみへたまふ」と曰ひ「久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛ごしめしてそ、伽耶城には應現する」等ご曰へる如きは、彼の方便品や壽量品などの説に依られしものなること明かである。而も法華經に言くとして直接に彼の經を指示せられなかつたのは何故であらうか。

畏れ多いことではあるが、しばらく二つの思召があつたであらうご伺がはるゝのである。其の一つは蓋し事を好まされぬ海洋の如き聖人の雅量の、自から然しめしものであらうご伺がはるゝ。さなきだに念佛の一門は、天台教徒の敵視するところとなり、ひいて當時上下の間の問題となりて居る、かゝる際に法華經の文を引きて、念佛法門を立證するご云ふが如き態度に出でられんか恰も猛火に注ぐに油を以てするやうなもので、物情如何になり行くか測るべからざるごである。如實に如來の本願を説いて、一切群生を化益する以外には何事をも顧みられない聖人が、何ごて事を好まされようか、之れ法華經に言くとして引用せられなかつた一つの思召であらうご推しまつるのである。

他の一つは、於一佛乘分別説三ご言ひ、唯有一乘法無二亦無三ご言ひ、汝等所行是菩薩道ご言ふもの、是れ法華一乘の極説である、即ち一佛乘の外には二乘も三乘もなひ、二乘ご言ひ三乘ご言ふは、一佛乘を分別して説いたもので、二乘の所行そのまゝ菩薩一乘の法であるご云ふのである。今宗祖の觀られ

たる法華經も亦同じ趣意で、盡十方無礙の本願一乘を信仰せらるゝ宗祖の前に
 は本願一乘の外に法の認むべきものがない、故に「一乘者即第一義乘、唯是誓
 願一佛乘也」と仰せられたものである。而して其の誓願一佛乘は大無量壽經の
 所説でありて、此の經已外に一乘經典あることを認むることは出来ない、故に
 出世本懷と言ひ、久遠本成と言ひ、一佛乘と言ふごとき説は、假令如何なる經
 典中にありとも、悉く大無量壽經の説として取り扱はるゝのである、是れ亦
 特に法華經に言くこして引用せられなかつた思召の一つであらうと推しまつる
 のである。

十八 法華論

(イ) 傳譯及び内容

妙法蓮華經憂波提舍 Saddharmapundarika-sūtra-upadeśa 略して法華經論又は法華
 論と稱し、天親菩薩の所造で、左の二譯ある。宗祖は御引用になりてないが、
 法華經最初の註釋書であるから、法華經に次いで少しく紹介して置く。

妙法蓮華經憂波提舍二卷

後魏 菩提流支 Bodhiruci 譯

妙法蓮華經論優波提舍一卷

同 勒那摩提 Rotnamati 譯

其の内容は序品、方便品、譬喻品の三品を詳釋し、其の他の諸品は「自餘の經
 文無上の義を明す、無上の義は略して十種あり」として、七喻（火宅、窮子、藥
 草、化城、衣珠、髻珠、鬘子）等の説を擧げて通釋し、最後に「第一序品には
 七種の功德成就を示現し、第二方便品には五分示現あり二を破し一を明す、餘
 品は向に處分するが如く解し易し」と云ふてある。恰も無量壽經を僅々數葉の
 淨土論に要約したるご同致にして、頗る要領を得たる御製作である。抑々法華
 二十八品廣しご雖も、諸法實相の理を説きて、爾前三乘の龜法即ち一乘の妙法
 なりご開顯せる、所謂開三顯一の説法は方便品にして、其の領解授記等を説け
 るが譬喻品である、而して序品は即ち經の序分であるから、一經の肝要は此の
 三品に概括せられてある。今天親菩薩が此の三品を詳釋し、餘他の諸品は其の
 要を採りて通釋せられたる、誠に所由ありご云ふべきである。

(口) 所謂十如是

羅什譯法華經方便品の所謂十如是の説が、此の法華論に引かれたる經文では如是でなくて云何、何等、何似、何體、何相等となりて居ることは、前に記した通りであるが、論には之れを五法として次の様に釋してある。

又依證法に復五種あり、一には何等法、二には云何法、三には何似法、四には何相法、五には何體法なり。何等法とは謂く聲聞法、辟支佛法、諸佛法の故に、云何法とは謂く種々諸事の説を起すが故に、何似法とは三種門に依りて清淨を得るが故に、何相法とは謂く三種の義一相の法なるが故に、何體法とは二體なきが故に、二體なしとは謂く無量乘唯一佛乘にして二乘なきが故なり。

又復義あり、何等法とは所謂有爲無爲法等なり、云何法とは謂く因緣法非因緣法等なり、何似法とは所謂常法無常法等なり、何相法とは謂く生等の三相法不生等の三相法なり、何體法とは謂く五陰體非五陰體なり。

又何似法とは謂く無常法有爲法因緣法なり。又何相法とは謂く可見相等の法なり、又何體法とは所謂五陰能取可取なり、五陰は是れ苦集の體なるを以ての故に、又五陰は是れ道諦の體なるが故なり。

復異義あり、説法に依りて説く、何等法とは所謂名句身等の故に、云何法とは謂く如來所説の法に依るが故に、何似法とは謂く能教化可化者の故に、何相法とは音聲に依りて取る、音聲に依りて彼の法を取るを以ての故に、何體法とは謂く假名體法相の義なり。

即ち如是と云何の相違のみでなく、十法と五法相違して居る、又以て其の別本なりしを知るべきであらう。

(ハ) 法華論と諸師

法華經の傳譯せられてより、羅什の門下を始めとして、世々の人師盛に講布して居つたようであるが、未だ依憑とすべき釋論の傳譯なかりし爲め、解説區々にして歸趣するところがなかつたようである。今後魏の代に及び、菩提流支勒

那摩提の二師によりて法華論譯出せられて、始めて法華經解説の指南を得たのである。即ち羅什によりて龍樹の論の傳はりし如く、流支摩提の兩師によりて天親の論は譯出せられたのであるが、兩師の鼓吹せしは法華論でなくて十地論であつた爲に、法華論は當時諸師の間に喧傳せられなかつたようである。

當時諸教の優劣を判ずる標準は、懸て佛性常住説の有無にあつた、而して法華經には佛性常住説なしとの理由を以つて、之れを涅槃經の下位に置いた、彼の道場寺慧觀が法華を同歸教とし涅槃を常住教と判じたるを始めとし、法華を宗とする光宅寺法雲の如きも、法華經の中には佛性の説なしとし、涅槃一乘是れ佛性、法華一乘は佛性に非ずと云ふて居る。

然るに天臺の智顛一たび起ちて法華一乘を唱導するや、即ち天親の法華論によりて、法華經は是れ佛性常住を説くの經なりと主張した。法華論には次の様に釋してある。

授記と言ふは六處に示現す、五は是れ佛記、一は菩薩記なり(中略)菩薩記

是は下の不輕菩薩品中に示現するが如し、應に知るべし、禮拜讚歎して如是き言を作す、我れ汝を輕んぜず、汝等皆當に佛と作ることを得べしとは衆生皆佛性あることを示現するが故なり。

天臺此の説を引き、法華玄義及び文句に、法華經の佛性常住教なることを立證してある。三論の嘉祥も亦法華論によりて、法華の佛性常住教たることを主張した(法華玄論)。かくて古來の懸案たりし法華佛性常住有無の論が、明快に解決せられたのである。以て法華經を讀む、必ず法華論の指南に依らざるべからざるを知るべきである。

十九 涅槃經

(1) 傳譯及び部類

大般涅槃經 Mahā-parinirvāṇa-sūtra は釋尊入滅期の説法を結集したもので、大藏經中に現存して居る經典のみでも其の數甚だ多い、殊にそれが大乘小乘諸部に分れて居りて、説相も大いに異なりて居るが、大體に於て大乘部のは佛身の常住